裁判所、臺灣總督府法院、統監府裁判所及關東都督府法院、民政署長又ハ民政支署長相互ノ間ニ於ケル法律上ノ共助ニ關スル件

（明治四十年九月法律第五十二號）

朕帝國議會ノ協賛ヲ經タル裁判所、臺灣總督府法院、統監府裁判所及關東都督府法院、關東都督府民政署長又ハ民政支署長相互ノ間ニ於ケル法律上ノ共助ニ關スル法律ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム（明治四十三年四月法律第四十一號ヲ以テ本令中改正）

裁判所及臺灣總督府法院共助法ノ規定ハ裁判所、臺灣總督府法院、統監府裁判所及關東都督府法院、關東都督府民政署長又ハ民政支署長相互ノ間ニ於ケル法律上ノ共助ニ之ヲ準用ス

附則

本法ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

都督府法院共助ニ關スル費用及囚人刑事被告人押送ニ關スル件

（明治四十年九月勅令第二百九十二號）

都督府法院共助ニ關スル費用及囚人刑事被告人押送ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條　裁判所、臺灣總督府法院、統監府裁判所及關東都督府法院、關東都督府民政署長又ハ民政支署長相互ノ間ニ於ケル共助ニ關スル費用ハ嘱託ヲ受ケタル各官署ノ支辨トス

第二條　囚人及刑事被告人ノ押送ニ關スル手續ハ押送地ノ規定ニ依リ其ノ費用ハ押送ヲ爲ス各官署ノ支辨トス但シ內地、臺灣、韓國及關東州相互ノ間ニ於ケル航海中ノ費用ハ國庫ノ負擔トス

附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

明治三十三年勅令第百七十四號ハ之ヲ廢止ス

〔備考〕明治三十三年勅令第百七十四號ハ本令ト同件ナリ

外國裁判所ノ嘱託ニ因ル共助法

（明治三十八年三月法律第六十三號）

外國裁判所ノ嘱託ニ因ル共助法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條　裁判所ハ外國裁判所ノ嘱託ニ因リ民事及刑事ノ訴訟事件ニ關スル書類ノ送達及證據調ニ付法律上ノ補助ヲ爲ス

法律上ノ補助ハ所要ノ事務ヲ取扱フヘキ地ヲ管轄スル區裁判所ニ於テ之ヲ爲ス

第二條　受託事項カ他ノ裁判所ノ管轄ニ屬スルトキハ受託裁判所ハ嘱託ヲ管轄裁判所ニ移送スヘシ

第三條　受託事項ハ日本ノ法律ニ從テ之ヲ施行スヘシ

第四條　嘱託ハ左ノ場合ニ於テ之ヲ拒絶スヘシ

一　日本ノ法律ニ依レハ受託事項カ其ノ施行ヲ許スヘキモノニ非サルトキ

二　受託事項カ受託裁判所ノ管轄ニ屬セサル場合ニ於テ第二條ノ手續ヲ爲スコト能ハサルトキ

三　相互條件ノ存セサルトキ

裁判所、臺灣總督府法院、裁判所又ハ關東督都府法院、關東都督府民政署長若ハ民政支署長ノ判決ノ執行ニ關スル件

（明治四十二年四月法律第三十六號）

朕帝國議會ノ協賛ヲ經タル裁判所臺灣總督府法院統監府「法務院及理事廳」ノ判決ノ執行ニ關スル法律ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム（明治四十三年四月法律第四十二號ヲ以テ令中改正）

第一條　裁判所ノ言渡シタル民事ノ判決ハ其ノ執行力アル正本ニ基キ臺灣、韓國又ハ關東州ニ於テ臺灣總督府法院、統監府裁判所又ハ關東都督府法院、關東都督府民政署長若ハ民政支署長ノ言渡シタル民事ノ判決ハ其ノ執行力アル正本ニ基キ內地ニ於テ各其ノ强制執行ヲ爲スコトヲ得但シ執行地ノ法令ニ依リ許スヘカラサル請求ニ付テノ强制執行ハ此ノ限ニ在ラス

第二條　裁判所ノ言渡シタル刑事ノ判決ハ臺灣總督府地方法院檢察官若ハ關東都督府民政署、民政支署所屬官吏ニ府區裁判所ノ檢事又ハ關東都督府地方法院檢察官若ハ統監府裁判所又ハ關東都督府法院、統監府裁判所又ハ關東都督府法院、關東都督府民政署長若ハ民政支署長ノ言渡シタル刑事ノ判決ハ地方裁判所又ハ區裁判所ノ檢事ニ各其ノ執行ヲ囑託スルコトヲ得但シ死刑又ハ笞刑ヲ言渡シタル判決ハ此ノ限ニ在ラス

前項ノ囑託ヲ爲スニハ判決謄本ヲ送付スヘシ

第三條　裁判所、臺灣總督府法院、統監府裁判所又ハ關東都督府法院、關東都督府民政署長若ハ民政支署長ノ言渡シタル刑ニシテ刑名同シキモノハ其ノ執行ニ關シテハ同一ノ刑ト看做シ韓國法規ノ流刑又ハ禁獄ハ禁錮ト看做ス（同上法令ニテ全條改正）

第四條　臺灣總督府法院ノ言渡シタル判決ヲ韓國又ハ關東州ニ於テ、統監府裁判所ノ言渡シタル判決ヲ臺灣又ハ關東州ニ於テ、關東都督府法院、關東都督府民政署長又ハ民政支署長ノ言渡シタル判決ヲ臺灣又ハ韓國ニ於テ執行スルニ關シテハ前三條ノ例ニ依ル（同上法令ニテ條中改正）

公廷取締、被告人看護ノ爲メ巡査、押丁使用ノ件

（明治十四年十月太政官達第八十六號）

治罪法實施ニ付テハ大審院其他各裁判所公廷取締ノ使用ニ供スルタメ其院長所長ノ照會ニ應シ一名又ハ數名ノ巡査爲相詰又勾留被告人審問中ハ其護送ノ巡査或ハ押丁ヲシテ守卒トシテ公廷ニ入リ看護セシムヘシ此旨相達候事

裁判傍聽人著席ノ件

（明治十五年三月司法省丁達第二十號）

裁判傍聽ノ儀ハ官民ヲ擇ハス渾テ傍聽席ヘ相廻シ可申此旨相達候事

但外人ニシテ公然ノ照會ヲ經タル者ハ此限ニ在ラス

官吏タル傍聽者著席ノ件

（明治十七年十二月丁達第三十六號）

裁判傍聽ノ儀ニ付テハ明治十五年當省丁第二十號ヲ以テ相達置候處自今勅奏任官及ヒ外國官吏ノ

傍聽ハ一般ノ傍聽席ト別異ス可キ様取計フ可シ此旨相達候事

第三章　臺灣ニ於ケル特則

臺灣總督府法院條例（明治三十一年七月律令第十六號）

臺灣總督府評議會ノ議決ヲ經タル臺灣總督府法院條例改正ノ件勅裁ヲ得テ茲ニ之ヲ發布ス

臺灣總督府法院條例

第一條　臺灣總督府法院ハ臺灣總督ノ管理ニ直屬シ民事刑事ノ裁判ヲ爲スコトヲ掌ル

第二條　臺灣總督府法院ヲ分テ地方法院及覆審法院トス但地方法院ノ管内ニ一若ハ二以上ノ地方法院出張所ヲ置クコトヲ得

地方法院及出張所ノ設立廢止及管轄區域ハ臺灣總督之ヲ定ム

第三條　地方法院ハ其管轄區域内ニ於ケル民事刑事ノ第一審裁判及刑事ノ豫審ヲ爲ス所トス

第四條　覆審法院ハ臺灣總督府所在地ニ一箇所ヲ置キ各地方法院ノ裁判ヲ覆審シ裁判管轄ニ關スル申請ヲ裁判ス

第五條　各法院ニ判官ヲ置ク

判官ハ勅任又ハ奏任トス臺灣總督之ヲ補職ス

裁判所構成法ニ於テ判事タルノ資格アル者ニアラサレハ判官タルコトヲ得ス

第六條　各法院ニ院長ヲ置ク判官ヲ以テ之ニ補ス

院長ハ其院一般ノ事務ヲ指揮シ其行政事務ヲ監督ス

上級法院ノ院長ハ下級法院ノ行政事務ヲ監督ス

院長事故アルトキハ上席判官其職ヲ代理ス

第七條　地方法院ハ單獨判官ヲ以テ總テノ事件ヲ審問裁判ス

第八條　覆審法院ニ一若ハ二以上ノ部ヲ設ケ各部ニ部長ヲ置ク判官ヲ以テ之ニ補ス但院長ヲ以テ部ノ長ニ充ツ[illegible]

各部ハ部長一人判官二人ヲ以テ組織シ總テノ事件ヲ審問裁判シ部長ヲ其裁判長ト爲ス部長ハ其部ノ事務ヲ監督ス[illegible]

第九條　各法院ニ檢察局ヲ附置ス

檢察局ハ臺灣總督ニ直屬シ其管轄區域ハ各法院ノ管轄區域ニ同シ

各檢察局ニ檢察官ヲ置ク

檢察官ハ勅任又ハ奏任トス臺灣總督之ヲ補職ス

第十條　檢察官ハ司法警察官ヲ指揮監督シ刑事訴追ヲ爲シ其裁判ノ執行ヲ指揮監督シ法院所管ノ事務ニ係ル民事訴訟ニ付國ヲ代表ス

上級法院ノ檢察官ハ下級法院ノ檢察官ヲ指揮監督ス

地方法院檢察官ノ職務ハ當分ノ内警部長又ハ警部ヲシテ便宜之ヲ代理セシムルコトヲ得

第十一條　各檢察局ニ檢察官長ヲ置ク檢察官ヲ以テ之ニ補ス但當分ノ内專任檢察官長ヲ置カス檢察官ヨリ之ヲ兼補スルコトヲ得

檢察官長ハ檢察局ノ事務ヲ指揮監督ス

檢察官長事故アルトキハ上席檢察官其職務ヲ代理ス

第十二條　各法院及檢察局ニ通譯ヲ置ク

通譯ハ奏任又ハ判任トス臺灣總督之ヲ補職ス

通譯ハ法廷ニ立會通譯ニ從事ス

通譯ハ前項ノ外上官ノ命ヲ承ケ翻譯ニ從事ス

第十三條ノ二　覆審法院ニ書記長ヲ置ク（明治四十一年四月二十八日律令第五號ヲ以テ本條ヲ新置シ同日ヨリ施行ス）

書記長ハ奏任トス上官ノ命ヲ承ケ書記ノ事務ヲ指揮監督ス

第十三條　各法院及檢察局ニ書記ヲ置ク

書記ハ判任トス臺灣總督之ヲ補職ス

書記ハ民事刑事ノ審判ニ關スル準備ヲ爲シ法廷ニ立會調書ヲ作リ及一切ノ訴訟記錄ヲ整理保管ス

書記ハ前項ノ外上官ノ指揮ヲ承ケ法院ニ於ケル諸般ノ事務ニ從事ス

第十四條　判官ハ在職中左ノ諸件ヲ爲スコトヲ得ス

第一　公然政事ニ關係スルコト

第二　政黨政派ニ加入スルコト

第三　俸給アル又ハ金錢ノ利益ヲ目的トスル公務ニ就クコト

第四　商業ヲ營ムコト

第十五條　判官ハ刑法ノ宣告又ハ懲戒ノ處分ニ由ルニアラサレハ其意ニ反シテ免官轉官セラルルコトナシ

第十六條　判官身體若ハ精神ノ衰弱ニ因リ職務ヲ執ルコト能ハサルニ至リタルトキハ臺灣總督ハ覆審法院ノ總會ノ議決ヲ經テ之ニ退職ヲ命スルコトヲ得

退職者ハ官吏恩給法ニ依リ恩給ヲ受ク

第十七條　臺灣總督ハ必要ト認ムルトキハ判官ニ休職ヲ命スルコトヲ得

休職判官ハ本俸四分ノ一ヲ給ス

休職判官ハ職ヲ執ラサルノ外在職者ニ同シ

第十八條　法院及檢察局ハ各自ノ管轄區域內ニ取扱フヘキ事務ニ付互ニ法律上ノ共助ヲ爲ス

附則

第十九條　此條例ハ明治三十一年七月二十日ヨリ施行ス

第二十條　此條例施行前ニ於テ高等法院ノ受理シタル訴訟事件ニシテ未タ判決ヲ受ケサルモノニ關シテハ從前ノ高等法院ノ職務ハ覆審法院之ヲ行フ

此條例施行前ニ於テ地方法院ノ受理シタル訴訟事件ニシテ未タ判決ヲ受ケサルモノハ各其管轄地方法院ニ於テ審問裁判ス

刑事事件ノ再審ノ訴及非常上告ニ關スル件

（明治三十二年八月律令第二十六號）

臺灣總督府評議會ノ議決ヲ經タル刑事事件ノ再審ノ訴及非常上告ニ關スル律令勅裁ヲ得テ茲ニ之ヲ發布ス

刑事事件ノ再審ノ訴及非常上告ニ關シテハ覆審法院ニ於テ上告裁判所トス

上告裁判所ハ覆審法院ノ判決ニ對スル再審ノ訴ニシテ其原因アリト認ムルトキハ原裁判ヲ破毀シ其事件ノ公訴及私訴ニ付再審ヲ爲スヘキコトヲ言渡シ之ヲ原法院ニ差戻スヘシ

本令ハ發布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

臺灣總督府臨時法院條例（明治二十九年七月律令第二號）

臺灣總督ハ茲ニ緊急ノ必要アリト認メ明治二十九年法律第六十三號第三條ニ依リ臺灣總督府臨時法院條例ヲ發布ス

臺灣總督府臨時法院條例

第一條　臺灣總督ハ左ノ場合ニ於テ必要ト認ムルトキハ臨時法院ヲ便宜ノ場所ニ開設シテ普通ノ裁判管轄ニ拘ハラス之ヲ審判セシムルコトヲ得

一　政府ヲ顚覆シ邦土ヲ僭竊シ其他朝憲ヲ紊亂スルノ目的ヲ以テ罪ヲ犯シタル者アルトキ

二　施政ニ反抗シ暴動ヲ爲スノ目的ヲ以テ罪ヲ犯シタル者アルトキ

三　政事ニ關シ樞要ノ官職ニ在ル者ニ危害ヲ加フルノ目的ヲ以テ罪ヲ犯シタル者アルトキ

四　外患ニ關スル罪ヲ犯シタル者アルトキ（明治三十一年律令第二十三號ヲ以テ本號ヲ追加ス）

五　匪徒刑罰令ニ掲ケタル罪ヲ犯シタル者アルトキ

第二條　臨時法院ニ於テハ三人ノ判官ヲ以テ審問裁判ス（同上法令ニテ全條改正）

其判官ハ覆審法院又ハ地方法院ノ判官ヲ以テ兼補ス

第三條　臨時法院ノ豫審ハ覆審法院判官又ハ地方法院判官ヲシテ之ヲ爲サシメ其結果ヲ報告セシ

ムヘシ

第四條　臨時法院檢察官ハ覆審法院又ハ地方法院檢察官ヲ以テ兼補ス但差支ノ場合ニ於テハ警部長又ハ警部ヲシテ便宜代理セシムルコトヲ得

第五條　臨時法院書記ハ覆審法院又ハ地方法院書記覆審法院檢察局又ハ地方法院檢察局書記ヲ以テ兼補ス（同上）

第六條　臨時法院ノ裁判ハ第一審ニシテ終審トス（同上）

第七條　訴訟手續ニシテ此律令ニ規定セサルモノハ總テ通常手續ニ從フ（同上）

臺灣總督府臨時法院ノ判決ニ對スル再審及非常上告ニ關スル件（明治三十二年八月律令第二十七號）

臺灣總督府評議會ノ議決ヲ經タル臺灣總督府臨時法院ノ判決ニ對スル再審及非常上告ニ關スル律令勅裁ヲ得テ茲ニ之ヲ發布ス

臺灣總督府臨時法院ノ判決ニ對シテハ覆審法院ニ再審ノ訴及非常上告ヲ爲スコトヲ得此場合ニ於テハ再審ノ訴及非常上告ニ關スル上告裁判所ノ訴訟手續ヲ準用ス

覆審法院ハ再審ノ訴ニシテ其理由アリト認ムルトキハ原判決ヲ破毀シ直ニ其事件ノ公訴及私訴ニ付判決ヲ爲スヘシ

外國裁判所ノ囑託ニ因ル共助ニ關スル件

臺灣總督府評議會ノ議決ヲ經タル外國裁判所ノ囑託ニ因ル共助ニ關スル件勅裁ヲ得テ之ヲ發布ス

外國裁判所ノ囑託ニ因ル共助ニ關シテハ明治三十八年法律第六十三號ニ依ル但シ同法律中區裁判所ノ職務ニ屬セシメタルモノハ地方法院又ハ其ノ出張所ヲシテ之ヲ行ハシム

法廷取締等ニ關スル件（明治三十八年九月律令第十一號）

臺灣總督府評議會ノ議決ヲ經タル法廷取締等ニ關スル件勅裁ヲ得テ茲ニ之ヲ發布ス

第一條　開廷中秩序ノ維持ハ裁判長ニ屬ス

第二條　法院ニ於テ對審ノ公開ヲ停ムルノ決議ヲ爲シタルトキハ其ノ決議ハ其ノ理由ト共ニ公衆ヲ退カシムル前之ヲ言渡ス此ノ場合ニ於テ法院ノ判決ヲ言渡ストキハ再ヒ公衆ヲ入廷セシムヘシ

第三條　裁判長ハ公開ヲ停メタルトキモ入廷ノ特許ヲ與フルコトヲ至當ト認ムル者ヲ入廷セシムルノ權ヲ有ス

第四條　裁判長ハ秩序維持ニ害アリト認メル者ヲ法廷ヨリ退カシムルノ權ヲ有ス

第五條　法廷内ニ於テ審問ヲ妨ケ又ハ不當ノ行爲ヲ爲ス者ニ對シテハ裁判長ハ閉廷ノ時マテ之ヲ勾留シ且決定ヲ以テ十圓以下ノ過料ニ處スルコトヲ得

第六條　前條ノ規定ハ左ノ變更ヲ以テ當事者、訴訟代理人、辯護人及鑑定人ニモ之ヲ適用ス

一　違犯者原告ナルトキハ法院ハ處罰ノ上仍本人宥恕ヲ請フカ又ハ恭順ヲ表シテ不敬ノ罪ヲ謝スルトキハ其ノ審問ヲ中止スルコトヲ得

二　違犯者訴訟代理人、辯護人若ハ鑑定人ナルトキハ處罰ノ上仍同一事件ニ付訴訟代理人、辯護人又ハ鑑定人タルコトヲ禁止スルコトヲ得

第七條　左ノ各號ノ一ニ該ル者ハ百圓以下ノ罰金ニ處ス但シ刑法ニ正條アルモノハ刑法ニ依ル

一　訴訟當事者ノ一方ノ爲ニ刊行ノ文書圖畫若ハ公開ノ演說ヲ以テ繫屬中ノ訴訟事項ヲ論評シタル者

二　訴訟事項ニ關シ當事者、證人、鑑定人、訴訟代理人若ハ辯護人ヲ威迫誘導シ又ハ訴訟代理ノ委任ヲ受クルニ當リ受任者ヲ威迫シ若ハ欺罔シタル者

三　故ラニ法院ノ命令ニ服從セス又ハ他人ヲ威迫誘導シテ命令ニ違背セシメタル者

前項ノ違犯者訴訟代理人、辯護人又ハ鑑定人ナルトキハ前條第一號ノ規定ヲ準用ス

第八條　開廷中秩序維持ニ關スル裁判長ノ權ハ裁判上一人ニテ執務スル判官モ亦之ヲ行フコトヲ得

第九條　本令ノ處罰ハ刑事訴追又ハ懲戒訴追ヲ爲スコトヲ妨ケス

第四章　韓國及間島ニ於ケル特則

第一節　韓國ニ於ケル特則

統監府裁判所令（明治四十二年十月勅令第三百三十六號）

朕統監府裁判所令ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

統監府裁判所令

第一條　統監府裁判所ハ統監ニ直屬シ韓國ニ於ケル民事刑事ノ裁判及非訟事件ニ關スル事務ヲ掌

第二條　統監府裁判所ヲ分チテ區裁判所、地方裁判所、控訴院及高等法院トス

統監府裁判所ノ設置、廢止及管轄區域ハ統監之ヲ定ム

統監府裁判所ニ統監府判事ヲ置ク判事ハ勅任又ハ奏任トス

第三條　區裁判所ハ裁判所構成法ニ定メタル區裁判所、地方裁判所ハ同法ニ定メタル地方裁判所ノ職務ヲ行フ

控訴院ハ地方裁判所ノ裁判ニ對スル控訴及抗告、高等法院ハ地方裁判所又ハ控訴院ノ第二審ノ判決ニ對スル上告及控訴院ノ裁判ニ對スル抗告ニ付裁判ヲ行フ

高等法院ハ前項ノ外裁判所構成法ニ定メタル大審院ノ特別權限ニ屬スル職務及第一審且終審トシテ韓國皇族ノ犯シタル罪ニシテ禁錮以上又ハ韓國法規ニ依リ禁獄以上ノ刑ニ處スヘキモノノ裁判ヲ行フ

第四條　區裁判所ハ前條第一項ノ外韓國人ノ犯シタル罪ニシテ左ノ各號ノ一ニ該ルモノノ裁判ヲ行フ

一　韓國法規ニ依リ一年以下ノ懲役、禁獄、罰金、笞刑又ハ拘留ノ刑ニ該ル罪

二　韓國刑法大全第五百九十二條、第五百九十五條、第五百九十六條、第六百一條乃至第六百三條、第六百十六條及第六百十七條ノ罪

三　前號ノ罪ノ贓ヲ分ヲ又ハ買得、受寄シタル罪

四　韓國刑法大全第六百四十四條ノ罪

前項第二號ノ罪ニ付テハ再犯以上トシテ處分スヘキ場合ト雖モ區裁判所其ノ裁判ヲ行フ

第五條　統監ハ地方裁判所ノ事務ノ一部ヲ取扱ハシムル爲管轄區域內ノ區裁判所ニ地方裁判所ノ支部ヲ設置スルコトヲ得

支部ノ職員ハ支部ヲ設置シタル區裁判所ノ職員ヲ以テ之ニ充ツ

第六條　統監ハ地方裁判所ノ管轄區域內ノ一ノ區裁判所ニ屬スル裁判事務ノ全部又ハ一部ヲ其ノ地方裁判所ノ管轄區域內ノ他ノ區裁判所ヲシテ取扱ハシムルコトヲ得

第七條　區裁判所ハ判事單獨ニテ裁判ヲ爲シ地方裁判所及控訴院ハ三人ノ判事、高等法院ハ五人ノ判事ヲ以テ組織シタル部ニ於テ合議シテ裁判ヲ爲ス

高等法院ノ或部ニ於テ上告ヲ審問シタル後從來ノ判決例ニ異リタル意見ヲ有スルトキハ其ノ部ハ之ヲ高等法院長ニ報告シ高等法院長ハ各部ヲ聯合シテ更ニ之ヲ審問シ且其ノ裁判ヲ爲サシム

前項ノ場合ニ於テハ判事ノ三分ノ二以上列席スルコトヲ要ス

第八條　統監ハ地方裁判所又ハ其ノ支部ノ判事ノ一人又ハ數人ニ其ノ裁判所又ハ支部ノ裁判權ニ屬スル刑事ノ豫審ヲ爲スコトヲ命ス

高等法院長ハ第三條第三項ノ豫審ヲ爲スヘキ各別ノ場合ニ付其ノ院ノ判事又ハ下級裁判所ノ判事ニ之ヲ爲スコトヲ命ス

第九條　統監府裁判所ニ檢事局ヲ竝置ス

檢事局ハ統監ノ管理ニ屬シ韓國ニ於ケル檢察事務ヲ掌ル

檢事局ノ管轄區域ハ之ヲ竝置シタル裁判所ノ管轄區域ニ同シ

檢事局ニ統監府檢事ヲ置ク檢事ハ勅任又ハ奏任トス

檢事ハ檢察事務ニ付上官ノ命令ニ從フヘシ

第十條　統監府裁判所ニ書記ヲ置ク書記ハ判任トス

書記ハ裁判所及檢事局ニ附屬ス

第十一條　統監府裁判所ニ通譯官又ハ通譯生ヲ置ク通譯官ハ奏任、通譯生ハ判任トス

通譯官及通譯生ハ裁判所及檢事局ニ附屬ス

第十二條　高等法院ニ高等法院長ヲ置ク

高等法院長ハ統監ノ指揮監督ヲ承ケ其ノ院ノ行政事務ヲ掌理ス

第十三條　控訴院ニ控訴院長ヲ置ク

控訴院長ハ統監ノ指揮監督ヲ承ケ其ノ院ノ行政事務ヲ掌理シ管轄區域內下級裁判所ノ行政事務ヲ指揮監督ス

第十四條　地方裁判所ニ地方裁判所長ヲ置ク

地方裁判所長ハ其ノ裁判所ノ行政事務ヲ掌理シ管轄區域內區裁判所ノ行政事務ヲ指揮監督ス

第十五條　區裁判所ノ判事ハ其ノ裁判所ノ行政事務ヲ掌理ス

判事二人以上アルトキハ上席ノ判事前項ノ職務ヲ行フ

第十六條　高等法院、控訴院及地方裁判所ノ各部ニ部長ヲ置ク

部長ハ各其ノ長官ノ命ヲ承ケ部ノ事務ヲ掌ル

第十七條　高等法院檢事局ニ高等法院檢事長ヲ置ク

高等法院檢事長ハ統監ノ指揮監督ヲ承ケ其ノ局ノ事務ヲ掌理シ下級檢事局ヲ指揮監督ス

第十八條　控訴院檢事局ニ控訴院檢事長ヲ置ク

控訴院檢事長ハ其ノ局ノ事務ヲ掌理シ管轄區域內下級檢事局ヲ指揮監督ス

第十九條　地方裁判所檢事局ニ地方裁判所檢事正ヲ置ク

地方裁判所檢事正ハ其ノ局ノ事務ヲ掌理シ管轄區域內區裁判所檢事局ヲ指揮監督ス

第二十條　區裁判所ノ檢事ハ其ノ裁判所檢事局ノ事務ヲ掌理ス

檢事二人以上アルトキハ上席ノ檢事前項ノ職務ヲ行フ

第二十一條　高等法院及控訴院ニ書記長ヲ置ク書記長ハ奏任トス

書記長ハ院長及檢事長ノ命ヲ承ケ庶務ヲ掌ル

第二十二條　書記ハ上官ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ從事ス

第二十三條　通譯官及通譯生ハ上官ノ指揮ヲ承ケ翻譯及通譯ニ從事ス

第二十四條　統監府裁判所及檢事局職員ノ定員ハ各裁判所及檢事局ヲ通シテ左ノ如シ

判事	三百二十九人
檢事	八十五人
書記長	四人
通譯官	四人
書記	三百六十八人
通譯生	百八十七人

第二十五條　韓國人ニシテ判事又ハ檢事タル者ハ民事ニ在リテハ原告被告トモ韓國人タル場合、刑事ニ在リテハ被告人韓國人タル場合ニ限リ其ノ職務ヲ行フ

第二十六條　區裁判所檢事ノ職務ハ統監府警視、統監府警部又ハ統監府裁判所書記ヲシテ之ヲ行

ハシムルコトヲ得

第二十七條　統監府裁判所及檢事局ノ事務處理ニ關スル規程ハ統監之ヲ定ム

附　則

第二十八條　本令ハ明治四十二年十一月一日ヨリ之ヲ施行ス統監府法務院官制ハ之ヲ廢止ス

第二十九條　本令施行前理事廳又ハ韓國ノ區裁判所、郡衙若ハ地方裁判所ニ於テ受理シタル訴訟事件及非訟事件ハ現在ノ儘理事廳ニ係ルモノニ在リテハ管轄ニ關スル規定ニ從ヒ相當ノ區裁判所又ハ地方裁判所ニ、韓國ノ區裁判所又ハ郡衙ニ係ルモノニ在リテハ其ノ所在地ヲ管轄スル區裁判所ニ、韓國地方裁判所ニ係ルモノニ在リテハ其ノ所在地ヲ管轄スル地方裁判所ニ移ルモノトシ既ニ爲シタル裁判ハ第一審及第二審ノ區則ニ從ヒ各其ノ區裁判所又ハ地方裁判所之ヲ爲シタルモノト看做ス

第三十條　本令施行前統監府法務院又ハ韓國ノ控訴院ニ於テ受理シタル訴訟事件及非訟事件ハ現在ノ儘其ノ所在地ヲ管轄スル控訴院ニ移ルモノトス

統監府法務院ノ既ニ爲シタル裁判ハ高等法院、韓國ノ控訴院ノ既ニ爲シタル裁判ハ前項ノ控訴院之ヲ爲シタルモノト看做ス

本令施行前韓國ノ大審院ニ於テ受理シタル訴訟事件及非訟事件ハ現在ノ儘高等法院ニ移ルモノトシ既ニ爲シタル裁判ハ高等法院之ヲ爲シタルモノト看做ス

統監府裁判所司法事務取扱令

（明治四十二年十月勅令第二百三十七號）

朕統監府裁判所司法事務取扱令ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

統監府裁判所司法事務取扱令

第一章　總則

第一條　統監府裁判所ニ於ケル司法事務ノ取扱ニ關シテハ通常裁判所ニ於ケル例ニ依ル

第二條　司法事務ニ關シ司法大臣ニ屬スル職務ハ統監之ヲ行フ

第三條　執達吏ニ屬スル職務ハ統監府裁判所書記之ヲ行フ但シ裁判所又ハ檢事局ノ長ハ警察官吏其ノ他適當ト認ムル者ヲシテ之ヲ行ハシムルコトヲ得

第四條　辯護士ノ行フヘキ職務ハ韓國ノ辯護士亦之ヲ行フコトヲ得

第五條　裁判所ハ必要ナル場合ニ於テ辯護士ニ非サル者ヲ訴訟代理人又ハ辯護人ニ選任スルコトヲ得

第二章　民事訴訟手續

第六條　民事ノ當事者ハ辯護士ノアルトキト雖裁判所ノ許可ヲ得テ訴訟能力者ヲ代理人ト爲スコトヲ得

前項ノ許可ハ何時ニテモ之ヲ取消スコトヲ得

第七條　假住所ニ於テスル送達ハ之ヲ受クヘキ人ニ出會サルトキハ假住所ノ主人又ハ成長シタル同居ノ親族若ハ雇人ニ之ヲ爲スコトヲ得

第八條　書記裁判所内ニ於テ送達ヲ受クヘキ者ニ書類ヲ交付シ受取證ヲ差出サシメタルトキハ送達ヲ爲シタルト同一ノ效力ヲ生ス

第九條　訴訟關係人カ期日ニ出頭スヘキ旨ヲ記載シタル書面ヲ差出シタルトキハ期日呼出ヲ爲シ

タルト同一ノ效力ヲ生ス

第十條　期日ノ變更又ハ期間ノ伸長ハ當事者合意ノ場合ト雖相當ノ理由アルニ非サレハ之ヲ許サス

第十一條　受命判事又ハ受託判事ハ檢證ノ場合ニ於テ申立ニ依リ又ハ職權ヲ以テ裁判所ノ決定ヲ待タス檢證事項ニ關シ證人ヲ訊問シ又ハ鑑定ヲ命スルコトヲ得

第十二條　證人及鑑定人ハ之ヲ忌避スルコトヲ得ス

第十三條　判決ハ職權ヲ以テ之ヲ送達ス

判決ノ送達ハ其ノ正本ヲ交付シテ之ヲ爲ス

第十四條　再度ノ闕席判決ニ對シテハ故障ヲ申立ツルコトヲ得ス

第十五條　控訴ノ提起ハ控訴狀ヲ原裁判所ニ差出シテ之ヲ爲ス

第十六條　判然許スヘカラサル控訴又ハ判然法律上ノ方式ニ適セス若ハ其ノ期間ノ經過後ニ起シタル控訴ハ原裁判所決定ヲ以テ之ヲ却下ス此ノ決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

第十七條　前條ノ場合ヲ除クノ外控訴ノ提起アリタルトキハ書記ハ速ニ訴訟記錄ト共ニ控訴狀ヲ控訴裁判所ニ送致スヘシ

第十八條　控訴裁判所ハ事件ヲ原裁判所ニ差戻スヘキ場合ニ於テモ當事者合意ノ申立アルトキハ直ニ本案ノ辯論及判決ヲ爲スコトヲ得

第十九條　事件ノ移送又ハ差戻ノ判決ヲ受ケタル當事者カ其判決確定ノ日ヨリ六月內ニ移送又ハ差戻ヲ受ケタル裁判所ニ口頭辯論期日指定ノ申請ヲ爲ササルトキハ其ノ申請ヲ爲ス權ヲ失フ

第二十條　第十五條乃至第十七條ノ規定ハ上告ニ之ヲ準用ス

第二十一條　檢事ハ必要ト認ムルトキハ裁判所ノ通知ヲ求メ其ノ意見ヲ述フルコトヲ得

第二十二條　民事訴訟法第五編ノ規定ハ之ヲ適用セス

第三章　刑事訴訟手續

第二十三條　裁判所ハ官吏、公吏ノ作リタル書類ニシテ刑事訴訟法第二十條、第二十一條其ノ他同法規定ノ形式ニ瑕疵アルモノニ付テハ當該官吏、公吏ヲシテ之ヲ補正セシメ有效ナラシムルコトヲ得

第二十四條　刑事訴訟法第七十八條及第百四條ノ規定ニ依リ市町村長ノ立會ヲ要スル場合ニ於テハ相當ノ立會人アルヲ以テ足ル

第二十五條　檢事ハ急速ノ處分ヲ要スルモノト思料スルトキハ公訴提起前ニ限リ檢證、搜索、物件差押ヲ爲シ又ハ被告人、證人ヲ訊問シ若ハ鑑定ヲ命スル等豫審判事ニ屬スル處分ヲ爲スコトヲ得但シ拘留狀ヲ發シ罰金、科料及費用賠償ノ言渡ヲ爲シ又ハ宣誓ヲ爲サシムルコトヲ得ス

檢事ハ司法警察官ヲシテ前項ノ處分ヲ爲サシムルコトヲ得

第二十六條　裁判所又ハ豫審判事ハ必要ナル場合ニ於テハ司法警察官ヲシテ檢證、搜索、物件差押ヲ爲シ又ハ證人ヲ訊問シ若ハ鑑定ヲ命セシムルコトヲ得

前項ノ場合ニ於テハ司法警察官ハ罰金、科料及費用賠償ノ言渡ヲ爲シ又ハ宣誓ヲ爲サシムルコトヲ得ス

第二十七條　受命判事又ハ受託判事ハ檢證ノ場合ニ於テ必要アリト認ムルトキハ裁判所ノ決定ヲ待タス搜索、物件差押ヲ爲シ證人ヲ訊問シ又ハ鑑定ヲ命スルコトヲ得

第二十八條　裁判所ハ公判開廷前ト雖檢證、搜索、物件差押又ハ證人、鑑定人ノ呼出ヲ決定スルコ

トヲ得

第二十九條　刑事訴訟法第二百三十七條及第二百六十四條第三項ノ規定ハ死刑又ハ無期ノ懲役若ハ禁錮ニ該當スヘキ事件ニ限リ之ヲ適用ス

第三十條　裁判所ハ一年以下ノ懲役、禁錮又ハ三百圓以下ノ罰金ニ處スヘキモノト認メタル事件ニ於テ被告人カ其ノ罪ヲ自白シタルトキハ他ノ證憑ノ取調ヲ爲ササルコトヲ得

第三十一條　一年以下ノ懲役、禁錮又ハ三百圓以下ノ罰金ヲ言渡シタル判決ニ付テハ證據ニ關スル理由ヲ省略スルコトヲ得

前項ノ場合ニ於テ控訴ノ申立アリタルトキハ判決裁判所ハ理由書ヲ作成シ記錄ト共ニ之ヲ控訴裁判所ニ送致スヘシ

第三十二條　刑事訴訟法第二百六十九條ノ場合ヲ除クノ外第一審ノ訴訟手續カ法律ニ違ヒタルコトアリト雖判決ニ影響ヲ及ホササルトキハ控訴裁判所ハ控訴ヲ棄却スヘシ

第三十三條　故障、控訴、上告又ハ抗告ヲ爲スコトヲ得ヘキ者ハ期間内ト雖其ノ權利ヲ拋棄スルコトヲ得

第三十四條　辯護人ハ上訴ヲ爲スコトヲ得ス

附則

本令ハ明治四十二年十一月一日ヨリ之ヲ施行ス

韓國ニ於ケル裁判事務取扱規則ハ之ヲ廢止ス

區裁判所所在地在勤ノ統監府警視、警部、區裁判所檢事ノ職務取扱ノ件

（明治四十二年十月統監府令第二十八號）

區裁判所所在地ニ在勤スル統監府警視、警部ハ所轄地方裁判所檢事正ノ要求アリトキハ其ノ區裁判所檢事ノ職務ヲ取扱フヘシ

前項ノ職務ハ成ルヘク上席ノ者ニ於テ之ヲ取扱フヘシ

統監府裁判所及檢事局事務章程

（明治四十二年十月統監府令第三十三號）

統監府裁判所及檢事局事務章程左ノ通定ム

第一條　裁判所ノ長及檢事局ノ長事故アル場合ニ於ケル行政事務ノ代理ハ其ノ廳ノ判事及檢事中其ノ長ノ指定シタル者之ヲ爲ス

前項ノ規定ハ區裁判所上席ノ判事又ハ檢事事故アル場合ニ之ヲ準用ス

第二條　高等法院長ハ京城控訴院判事ナシテ高等法院判事ノ職務ヲ代理セシムルコトヲ得

第三條　控訴院長ハ其ノ院ノ判事及其ノ院所在地ノ地方裁判所判事ナシテ相互ニ其ノ職務ヲ代理セシムルコトヲ得

第四條　地方裁判所長ハ其ノ裁判所判事及其ノ管内ノ區裁判所判事ナシテ相互ニ其ノ職務ヲ代理セシムルコトヲ得

第五條　地方裁判所長ハ豫審判事事故アル場合ニ於テ其ノ裁判所又ハ所轄區裁判所ノ判事ニ豫審判事ノ職務ヲ代理セシムルコトヲ得

第六條　裁判ノ合議ハ裁判長之ヲ開キ且之ヲ整理ス

合議ハ之ヲ公行セス其ノ顚末竝ニ各判事ノ意見ニ付テハ嚴ニ祕密ヲ守ルコトヲ要ス

第七條　合議ハ過半數ノ意見ニ依リ之ヲ決ス

判事ノ意見三說以上ニ分レ各過半數ニ至ラサルトキハ過半數ニ至ルマテ被告ニ不利益ナル意見ヨリ順次利益ナル意見ニ合算ス

第八條　檢事局ノ長ハ其ノ局ノ檢事及其ノ管內ノ下級檢事局ノ檢事ヲシテ相互ニ其ノ職務ヲ代理セシムルコトヲ得

第九條　各裁判所ニ書記課ヲ置キ其ノ裁判所及檢事局ニ附屬セシム

第十條　高等法院及控訴院ノ書記長ハ各其ノ所屬ノ院長及檢事長ノ命ヲ承ケ書記課ノ事務ヲ指揮監督ス

第十一條　地方裁判所書記課ニ監督書記ヲ置ク

區裁判所書記課ニ二人以上ノ書記ヲ置キタルトキハ其ノ一人ヲ監督書記トス

監督書記ハ其ノ所屬地方裁判所長及檢事正之ヲ命ス

監督書記ヲ命シタルトキハ速ニ之ヲ統監ニ報告スヘシ

第十二條　地方裁判所監督書記ハ地方裁判所長及檢事正ノ命ヲ承ケ書記課ノ事務ヲ指揮監督ス

區裁判所監督書記ハ一人ノ判事檢事又ハ上席ノ判事檢事ノ命ヲ承ケ書記課ノ事務ヲ指揮監督ス

第十三條　裁判所及檢事局ノ長ハ其ノ裁判所及其ノ管內ノ下級裁判所ノ書記ヲシテ相互ニ其ノ職務ヲ代理セシムルコトヲ得

前項ノ規定ハ通譯官及通譯生ニ之ヲ準用ス

第十四條　裁判所及檢事局ノ長ハ其ノ總ノ豫算定額內ニ於テ雇員ヲ使用スルコトヲ得

雇員ハ書記ノ命ヲ承ケ寫字淨册ノ整頓其ノ他ノ事務ニ從フ

附則

本令ハ明治四十二年十一月一日ヨリ之ヲ施行ス

統監府裁判所及檢事局處務規程

（明治四十二年十月統監府訓令第二十六號）

統監府司法廳
統監府裁判所及檢事局

統監府裁判所及檢事局處務規程左ノ通定ム

第一條　裁判所又ハ檢事局ノ長ヨリ統監ニ請訓、具申又ハ報告ヲ爲スニハ別段ノ例規アルモノヲ除ク外其ノ監督上官ヲ經由スヘシ但シ緊急ノ場合ニ於テハ直ニ統監ニ請訓、具申又ハ報告ヲ爲シ同時ニ其ノ監督上官ニ報告スヘシ

第二條　裁判所及檢事局ノ長ト中央官廳在外國日本官廳及韓國中央官廳トノ間ニ往復スル文書ハ別段ノ例規アルモノヲ除ク外統監ヲ經由スヘシ

第三條　統監ニ差出シ又ハ統監ヲ經由スヘキ文書ハ總テ司法廳長官ヲ經由スヘシ

第四條　高等法院長ハ統監ノ名ヲ以テ其ノ院ノ判事ニ對シ例規ノ賜暇ヲ許否シ並除服出仕ヲ命スルコトヲ得高等法院檢事長ノ其ノ院ノ檢事ニ對スル亦同シ

第五條　控訴院長ハ統監ノ名ヲ以テ其ノ院ノ判事及其ノ管內ノ下級裁判所ノ判事ニ對シ例規ノ賜暇ヲ許否シ並除服出仕ヲ命スルコトヲ得控訴院檢事長ノ其ノ局及其ノ管內ノ下級檢事局ノ檢事ニ對スル亦同シ

第六條　高等法院長及高等法院檢事長、控訴院長及控訴院檢事長ハ統監ノ名ヲ以テ各其ノ院ノ書記長、通譯官、書記及通譯生ニ對シ例規ノ賜暇ヲ許否シ並除服出仕ヲ命スルコトヲ得

第七條　前三條ニ依リ據行ヲ爲シタル場合ハ其ノ長ヨリ速ニ之ヲ統監ニ報告スヘシ但シ書記及通譯生ニ對スル據行ニ付テハ此ノ限ニ在ラス

第八條　地方裁判所長及檢事正ハ統監ノ名ヲ以テ其ノ廳及其ノ管內ノ區裁判所ノ書記及通譯生ニ例規ノ賜暇ヲ許否シ並除服出仕ヲ命スルコトヲ得

第九條　裁判所及檢事局ニ出勤簿ヲ備置クヘシ

裁判所及檢事局ノ長ハ毎年一月及七月ノ兩度ニ之ヲ調査シ其ノ抄錄ヲ統監ニ進達スヘシ

第十條　裁判所檢事局ノ職員疾病、忌服其ノ他ノ事故ニ因リ缺勤スルトキハ各其ノ所屬廳ノ長官ニ屆書ヲ差出スヘシ

疾病七日以上ニ渉ルトキハ醫師ノ診斷書ヲ添附シ更ニ屆出ツヘシ

第十一條　裁判所及檢事局ノ職員訴訟事件又ハ非訟事件ニ付其ノ廳所在地外ニ出張セムトスルトキハ直近監督上官ノ承認ヲ受クヘシ但シ緊急ノ場合ニ於テハ出張ノ後其ノ旨ヲ報告スヘシ

前項ニ記載シタル以外ノ事由ニ因リ其ノ廳所在地外ニ出張セムトスルトキハ統監ノ認可ヲ受クヘシ

第十二條　裁判所及檢事局ノ長ハ其ノ廳ノ書記ニ宿直ノ勤務ヲ命スヘシ

第十三條　裁判所及檢事局ノ長其ノ廳又ハ書記課ノ執務細則ヲ設クルトキハ統監ノ認可ヲ受クヘシ但シ書記課ノ執務細則ハ裁判所及檢事局ノ長協議シテ之ヲ定ムヘシ

第十四條　地方裁判所檢事局又ハ其ノ管內ノ區裁判所檢事局ニ於テ左ノ事件ヲ受理シタルトキハ檢事正ハ速ニ之ヲ統監ニ報告スヘシ但シ支部ヲ設置シタル區裁判所檢事局ニ於テ受理シタル場合ハ其ノ檢事局ノ長ヨリ報告スルコトヲ得

一　刑法第二編第一章乃至第四章ノ犯罪

二　韓國刑法大全第四編第一章ノ犯罪

三　外國人ト共ニ犯シタル犯罪

四　一般又ハ地方ノ公安ニ重大ナル關係アル犯罪

五　前揭ノ外報告ヲ必要ト認ムル犯罪

第十五條　裁判所及檢事局ノ長ハ左ノ文書ニ署名捺印スヘシ

一　監督上官ニ差出スヘキ文書

二　中央官廳及地方廳、在外國日本官廳、韓國中央官廳及地方廳トノ往復文書

三　前揭ノ外重要ナル往復文書

檢事局ノ長ハ上訴、再審申立書ニ亦署名捺印スヘシ

第十六條　第一條、第二條、第九條、第十二條及第十五條ノ規定ハ區裁判所ノ一人ノ判事、檢事又ハ上席ノ判事、檢事ニ之ヲ準用ス

第二節　間島ニ於ケル特則

間島ニ於ケル領事官ノ裁判ニ關スル件

（明治四十三年四月法律第四十號）

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル間島ニ於ケル領事官ノ裁判ニ關スル法律ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條　間島ニ駐在スル帝國領事官ノ豫審ヲ爲シタル死刑、無期又ハ短期一年以上ノ懲役若ハ禁錮ニ該ル罪ノ公判ハ統監府地方裁判所之ヲ管轄ス

第二條　間島ニ駐在スル帝國領事官ノ管轄ニ屬スル刑事ニ關シ外務大臣ニ於テ必要アリト認ムルトキハ其ノ事件ヲ管轄スヘカラサルコトヲ當該領事官ニ命シ且被告人ヲ韓國ニ於ケル監獄ニ移送セシムルコトヲ得

第三條　前條ノ規定ニ依リ被告人ヲ韓國ニ於ケル監獄ニ移送スル場合ニ於テ統監ハ其ノ事件地方裁判所ノ權限ニ屬スヘキモノナルトキハ被告人ノ移送セラルル監獄所在地ヲ管轄スル統監府地方裁判所ノ檢事ヲシテ裁判管轄指定ノ申請ヲ爲シメ其ノ事件區裁判所ノ權限ニ屬スヘキモノナルトキハ被告人ノ移送セラルル監獄所在地ヲ管轄スル統監府地方裁判所ノ檢事ヲシテ裁判管轄指定ノ申請ヲ爲シメ其ノ地方裁判所ニ爲サシムルコトヲ得

前項ノ申請及裁判ニ關シテハ其ノ刑事訴訟法第三十三條ノ規定ヲ準用ス

第四條　地方裁判所ノ權限ニ屬スル事項ニ關シ間島ニ駐在スル帝國領事官ノ爲シタル裁判ニ對スル控訴又ハ抗告ハ統監府控訴院之ヲ管轄ス

區裁判所ノ權限ニ屬スル事項ニ關シ間島ニ駐在スル帝國領事官ノ爲シタル裁判ニ對スル控訴又ハ抗告ハ統監府地方裁判所之ヲ管轄ス

第五條　第二條及第四條ノ場合ニ於テ管轄權ヲ有スヘキ統監府裁判所ハ統監之ヲ定ム

附則

本法施行前受理シタル訴訟事件及非訟事件ニ關シテハ從前ノ例ニ依ル

第五章　滿洲及關東州ニ於ケル特則

滿洲ニ於ケル領事裁判ニ關スル件

（明治四十一年四月法律第五十二號）

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル滿洲ニ於ケル領事裁判ニ關スル法律ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條　明治三十二年法律第七十號第九條乃至第十二條ノ規定ハ滿洲ニ於ケル領事裁判ニ之ヲ適用セス

第二條　滿洲ニ於ケル領事官ノ豫審ヲ爲シタル重罪ノ公判ハ關東都督府地方法院之ヲ管轄ス

第三條　滿洲ニ駐在スル領事官ノ管轄ニ屬スル刑事ニ關シ國交上必要アルトキハ外務大臣ハ關東都督府地方法院ヲシテ其ノ裁判ヲ爲サシムルコトヲ得

第四條　滿洲ニ於ケル領事官ノ爲シタル裁判及前二條ニ依リ關東都督府地方法院ノ爲シタル裁判ニ對スル上訴ハ終審トシテ關東都督府高等法院之ヲ管轄ス

附則

本法施行ノ期日ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム（明治四十一年九月勅令第二百十一號ヲ以テ本法ノ施行期日ヲ同年十月一日ト指定シタリ）

本法施行前受理シタル訴訟事件及非訟事件ニ關シテハ總テ從前ノ例ニ依ル

〔參照〕明治三十二年法律第七十號ハ領事官ノ職務ニ關スル件ナリ

關東州裁判令（明治四十一年九月勅令第二百十二號）

朕關東州裁判令ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

關東州裁判令

第一條　關東州ニ於テハ關東都督府法院及關東都督府民政署長ヲシテ民事刑事ノ裁判ヲ掌ラシム

關東都督ハ必要ト認ムルトキハ民政支署長ヲシテ民政署長ニ屬スル裁判事務ヲ掌ラシムルヿヲ得

第二條　法院ハ關東都督ノ直屬トス

法院ヲ分チテ地方法院及高等法院トス

第三條　關東都督府民政署長ハ左ノ民事刑事ニ付始審ノ裁判ヲ爲ス

一　二百圓ヲ超過セサル金額又ハ價格三百圓ヲ超過セサル物ニ關スル民事事件

二　支那人ノ外ニ關係者ナキ前號以外ノ民事事件

三　拘留又ハ科料ノ刑ニ該ルヘキ罪

四　一年以下ノ懲役若ハ禁錮又ハ二百圓以下ノ罰金ノ刑ニ該ルヘキ行政諸規則違反ノ罪

五　裁判所構成法第十六條ノ一第一項第二號以下ニ掲ケタル支那人ノ罪

前項ノ外民政署長ハ勅令ノ定ムル所ニ依リ裁判事務ヲ取扱フ

第四條　民政署長又ハ民政支署長事故アルトキハ上席ノ官吏其ノ職務ヲ代理ス

第五條　地方法院ハ第三條以外ノ民事刑事ニ付始審ノ裁判ヲ爲ス

前項ノ外地方法院ハ勅令ノ定ムル所ニ依リ裁判事務ヲ取扱フ

第六條　高等法院ハ終審トシテ地方法院又ハ民政署長若ハ民政支署長ノ裁判ニ對スル上訴ニ付審ヲ爲ス

第七條　各法院ヲ通シテ判官專任六人ヲ置ク

判官ハ奏任トス但シ高等法院長タル判官ハ之ヲ勅任ト爲スコトヲ得

第八條　各法院ニ院長ヲ置ク上級判官ヲ以テ之ニ充ツ

院長ハ院內一般ノ事務ヲ指揮シ其ノ行政事務ヲ監督ス

高等法院ノ院長ハ地方法院ノ行政事務及民政署長ノ司法行政事務ヲ監督ス

院長事故アルトキハ次級判官其ノ職務ヲ代理ス

第九條　地方法院ハ判官單獨ニ審理裁判ス

第十條　高等法院ハ判官三人ノ合議ヲ以テ審理裁判シ上級判官ヲ其ノ裁判長トス

第十一條　各法院ヲ通シテ檢察官專任二人ヲ置ク

檢察官ハ奏任トス司法警察官ヲ指揮監督シ刑事訴追ヲ爲シ其ノ裁判ノ執行ヲ指揮監督ス

高等法院ノ檢察官ハ地方法院ノ檢察官及民政支署ニ於テ檢察事務ヲ行フ者ヲ指揮監督ス

地方法院ニ於テハ警視又ハ警部ヲシテ檢察官ノ職務ヲ執ラシムルコトヲ得

第十二條　各法院ヲ通シテ通譯官專任一人通譯生專任二人ヲ置ク

通譯官ハ奏任通譯生ハ判任トス通辯翻譯ニ從事ス

第十三條　各法院ヲ通シテ書記專任十一人ヲ置ク

書記ハ判任トス民事刑事ノ事理ニ關スル準備ヲ爲シ調書ヲ作ル及一切ノ訴訟記錄ヲ整理保存ス

書記ハ前項ノ外上官ノ指揮ヲ承ケ法院ニ於ケル諸般ノ事務ニ從事ス

附則

本令ハ明治四十一年十月一日ヨリ之ヲ施行ス

關東都督府法院令ハ之ヲ廢止ス

關東州裁判事務取扱令（明治四十一年九月勅令第二百十三號）

朕關東州裁判事務取扱令ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

關東州裁判事務取扱令

第一章　總則

第一條　民事刑事及非訴訟事件ニ關スル事項ハ左ノ法令ニ依ル

一法例

一民法

一明治三十五年法律第五十號

一明治三十七年法律第十七號

一明治三十二年法律第四十號

一明治三十三年法律第五十一號

一供託法

一明治三十二年法律第五十號

一明治三十三年法律第十三號

一明治三十三年勅令第四百九號

一商法

一明治三十三年法律第三十二號商法

一明治三十三年法律第十七號

一明治三十二年勅令第二百七十一號

一保險業法

一刑法

一刑法施行法

一爆發物取締罰則

一通貨及證券模造取締法

一軍機保護法

一海底電信保護萬國聯合條約罰則

一明治二十三年法律第三十四號

一明治二十三年法律第百一號

一明治三十八年法律第五十一號

一明治三十八年法律第六十六號

一民事訴訟法

一家資分散法
一人事訴訟手續法
一競賣法
一刑事訴訟法
一普通治罪法陸軍治罪法海軍治罪法交涉ノ件處分法
一外國裁判所ノ囑託ニ因ル共助法
一逃亡犯罪人引渡條例
一外國艦船乘組員ノ逮捕留置ニ關スル援助法
一不動產登記法
一明治三十九年法律第五十五號
一非訟事件手續法

第二條　支那人ノ外ニ關係者ナキ民事ニ關スル事項ハ當分ノ內從前ノ慣例ニ依ル但シ人事訴訟手續法ヲ除クノ外手續ニ關スル權利ニ付テハ當分ノ內從前ノ慣例ニ依ル

第三條　土地ニ關スル權利ニ付テハ當分ノ內從前ノ慣例ニ依ル

第四條　土地ニ關スル權利ニ付テハ當分ノ內登記ヲ爲サス

第五條　刑法第一編第四章ハ當分ノ內支那人ニ之ヲ適用セス

第六條　第一條ニ掲ケタル法令中主務大臣ノ職務ハ民事訴訟法第百五十二條ノ場合ヲ除クノ外關東都督、市町村長ノ職務ハ關東都督府民政署長又ハ民政支署長之ヲ行フ

第七條　外國裁判所ノ囑託ニ因ル共助法中區裁判所ノ職務ハ地方法院之ヲ行フ

第八條　競賣法中區裁判所ノ職務ハ民政署長之ヲ行フ

第九條　競賣ノ確定日附ニ付テハ民法施行法第四條及第五條ノ規定ニ依ル

第十條　本令ニ定ムル者ノ外必要ナル規定ハ關東都督之ヲ定ム

第二章　訴訟手續

第一節　通則

第十一條　法院ニ繫屬シタル事件ハ法院ノ事物ノ管轄ニ屬セサル場合ト雖管轄事件トシテ之ヲ裁判スベシ

第十二條　開廷ニ關シテハ裁判所構成法第百三條乃至第百十三條ノ規定ニ依ル

第十三條　忌避及回避ニ關スル規定ハ之ヲ適用セス但シ民事訴訟法第三十五條又ハ刑事訴訟法第四十條ノ規定ニ依リ除斥セラルベキ場合ハ此ノ限ニ在ラス

第十四條　法院ハ民政署長ニ訴訟書類ノ送達、證據調及令狀ノ執行ヲ囑託スルコトヲ得

民政署長ハ互ニ訴訟書類ノ送達、證據調、令狀及刑ノ執行並民事裁判ノ執行ヲ囑託スルコトヲ得

前三項ノ場合ニ於テハ費用ハ囑託ヲ受ケタル民政署ノ支辨トス

第十五條　法院又ハ裁判長カ職權ヲ以テ辯護士ヲ訴訟代理人又ハ辯護人ニ選定シ又ハ撰任スベキ場合ニ於テハ辯護士ニ非サル者ヲ以テ之ニ充ツルコトヲ得

第十六條　檢事及書記ノ職務ハ民政署又ハ民政支署ニ於テハ其ノ所屬官吏ヲシテ之ヲ行ハシム

第二節　民事訴訟手續

第十七條　民事訴訟手續ハ高等法院ニ於テハ民事訴訟法中控訴裁判所ニ關スル規定ニ依リ地方法院ニ於テハ同法中地方裁判所ニ關スル規定ニ依リ民政署ニ於テハ同法第三百八十二條乃至規定ヲ

除クノ外區裁判所ニ關スル規定ニ依ル但シ裁判所構成法中區裁判所ノ管轄ニ屬セシメタル事件ヲ地方法院ニ於テ取扱フ場合ニハ民事訴訟法中區裁判所ニ關スル規定ニ依ル

第十八條　辯護士ノアルトキト雖當事者ハ法院又ハ民政署長ノ許可ヲ得テ訴訟能力者ヲ以テ代理人ト爲スコトヲ得

前項ノ許可ハ何時ニテモ之ヲ取消スコトヲ得

第十九條　費用額確定ノ申請アリタル場合ニ於テ未タ判決ノ送達ナク且判決正本ノ作成ヲ遲延セシムル虞ナキトキハ費用額確定ノ決定ヲ判決及其ノ正本ニ附記スルコトヲ得此ノ場合ニ於テハ費用額ノ決定ニ付正本ノ作成及送達ノ手續ヲ爲サス申請人及相手方ニ確定シタル額ヲ通知シ且相手方ニ費用計算書ヲ送付スヘシ

費用額確定ノ申請ハ其ノ一部ヲ採用セサルトキハ前項ノ例ニ依ルコトヲ得ス

當事者カ判決ノ言渡前ニ費用計算書ヲ差出シタルトキハ費用額確定ノ申請ヲ爲スコトヲ要セス

此ノ場合ニ於テハ職權ヲ以テ相手方ニ付與スヘキ計算書ノ謄本ヲ作成スヘシ

第二十條　送達ハ之ヲ受クヘキ人ニ假住所ニ於テ出會ハサルトキハ假住所ノ主人又ハ成長シタル同居ノ親族若ハ雇人ニ之ヲ爲スコトヲ得

第二十一條　書記ノ職務ヲ行フ者其ノ所屬廳內ニ於テ送達ヲ受クヘキ者ニ書類ヲ交付シ受取證ヲ差出サシメタルトキハ送達アリタルト同一ノ效力ヲ生ス

第二十二條　期日ノ變更又ハ期間ノ伸長ハ當事者合意ノ場合ニ於テモ顯著ナル理由アルニ非サレハ之ヲ許サス

第二十三條　訴訟關係人カ期日ニ出頭スヘキ旨ヲ記載シタル書面ヲ差出シタルトキハ期日呼出アリタルト同一ノ效力ヲ生ス

第二十四條　合意上ノ訴訟手續ノ休止ハ申立ニ因リ顯著ナル理由アルトキニ限リ之ヲ許ス其ノ申立ハ書面ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ要ス

前項ノ申立ニ付テハ民事訴訟法第百七十一條第二項及第四項ノ規定ニ依ル合意上ノ休止ノ場合ニ於テ三月內ニ口頭辯論ノ期日指定ノ申立ヲ爲ササルトキハ本訴及反訴ヲ取下ケタルモノト看做ス兩度以上ノ休止ニシテ前後ヲ通算シテ三月ヲ超ユルトキ亦同シ

第二十五條　天災其ノ他避クヘカラサル事變ニ因ル場合ヲ除クノ外口頭辯論期日ニ當事者双方出頭セサルトキハ本訴及反訴ヲ取下ケタルモノト見做ス

第二十六條　民事訴訟法第百九十四條第一項ノ期間ハ之ヲ十四日トス

第二十七條　口頭辯論ハ書面ヲ以テ之ヲ準備スルコトヲ要セス

第二十八條　民政署長ハ口頭辯論ノ前後ヲ問ハス事件ノ關係ヲ明瞭ナラシムル爲訴訟狀又ハ準備書面ニ基キ必要ナル處分ヲ爲スコトヲ得

第二十九條　訴ハ何時ニテモ之ヲ取下クルコトヲ得但シ反訴アリタルトキハ被告ノ同意ヲ得ルコトヲ要ス

第三十條　訴ノ取下アリタルトキハ反訴ハ其ノ效力ヲ失フ但シ被告カ反訴ヲ繼續セシムル意思ヲ表示シテ取下ニ同意シタルトキハ此ノ限ニ在ラス

第三十一條　反訴ハ其ノ目的カ本訴ノ目的又ハ防禦ノ方法ト法律上牽連スルニ非サレハ之ヲ提起スルコトヲ得ス

第三十二條　當事者カ重大ナル過失ニ因リ又ハ訴訟ノ完結ヲ遲延セシムル意思ヲ以テ時機ニ後レ

テ提出シタル攻擊又ハ防禦ノ方法カ訴訟ノ完結ヲ遲延セシムヘキモノナルトキハ法院ハ申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ之ヲ却下スルコトヲ得

前項ノ規定ハ證據方法及證據抗辯ノ提出ニ付之ヲ準用ス

第三十三條　民政署長ハ口頭辯論ニ於テ爲シタル當事者ノ申立及陳述ニ付必要ト認メタルモノニ限リ調書ニ記載シテ之ヲ明確ニスヘシ

第三十四條　民事訴訟法第二百二十一條ノ場合ニ於テ和解調ヒタルトキハ其ノ和解ニ付テハ民事爭訟調停ニ關スル規定ヲ準用ス

第三十五條　民事訴訟法第二百五十五條ノ故障申立ノ期間ハ七日トス

關席判決ヲ爲ストキハ其ノ判決ニ對シ故障ヲ爲シ得ヘキコト及其ノ期間ヲ主文ニ附記スヘシ

第三十六條　判決ニ於テ作爲ノ履行ヲ命スル場合ニ於テハ原告ノ申立ニ因リ一定ノ期間內ニ履行ヲ爲ササルトキハ賠償金ヲ支拂フヘキ旨ヲ言渡スコトヲ得

第三十七條　判決ハ職權ヲ以テ之ヲ送達ス

判決ノ送達ハ其ノ正本ヲ交付シテ之ヲ爲ス

第三十八條　再度ノ關席判決ニ對シテハ故障ヲ申ヘツルコトヲ得ス

第三十九條　關東州裁判令第三條第二號ニ掲ケタル民事裁判ノ手續ニ關シテハ民事訴訟法第二百六十六條乃至第二百七十二條ノ規定ニ依ル

前項ノ場合ニ於テ民政署長必要ト認ムルトキハ所屬官吏ヲシテ準備手續ヲ爲サシムルコトヲ得

第四十條　民政署長ハ所屬官吏ヲシテ證據調ヲ爲サシムルコトヲ得

第四十一條　前二條ニ依リ準備手續又ハ證據調ヲ命セラレタル者ハ受命判事ト同一ノ權ヲ有ス但

シ罰金及費用賠償ノ言渡ヲ爲シ又ハ宣誓ヲ爲サシムルコトヲ得ス

前二號ノ場合ニ於テハ書記ハ立會ヲ要セス

第四十二條　證據調ノ申請及其ノ決定ハ口頭辯論前ト雖モ之ヲ爲スコトヲ得

第四十三條　證據決定中一部ノ證據調ニ依リ結果ヲ得タルトキハ他ノ證據調ヲ省略スル決定ヲ爲スコトヲ得

第四十四條　受命判官又ハ受託判官ハ檢證ノ場合ニ於テ職權ヲ以テ又ハ申立ニ因リ法院ノ決定ヲ俟タス檢證事項ニ關シ證人ヲ訊問シ又ハ鑑定ヲ命スルコトヲ得

第四十五條　證人ノ呼出狀ニハ訊問事項ヲ表示スルコトヲ要セス

第四十六條　證人及鑑定人ハ之ヲ忌避スルコトヲ得ス

第四十七條　證人鑑定人又ハ通事僞證ノ罪ヲ犯シタルモノト思料シタルトキハ法院又ハ民政署長ハ勾引狀ヲ發シ總兼判官ニ送致シ又ハ直ニ裁判ヲ爲スコトヲ得

第四十八條　民政署長囑託ニ因リ證據調ヲ爲ス場合ニ於テハ受託判事ト同一ノ權ヲ有ス

第四十九條　證據保全ノ申立ハ訴ノ提起前ニ於テハ訊問ヲ受クヘキ者ノ居所又ハ檢證スヘキ物ノ所在地ヲ管轄スル民政署長ニ之ヲ爲スコトヲ得

第五十條　支拂命令ハ職權ヲ以テ之ヲ債務者ニ送達スヘシ

第五十一條　督促手續ニ關スル規定ハ當事者ノ雙方又ハ一方カ支那人ナル場合ニハ當分ノ內之ヲ適用セス

第五十二條　控訴期間ハ十四日トス

第五十三條　判決言渡ノ際當事者雙方在廷シタル場合ニ限リ控訴期間ハ其ノ言渡ノ日ヨリ之ヲ起

算ス

前項ノ場合ニ於テ控訴期間ハ判決言渡ノ際之ヲ當事者ニ告知スヘシ

本條ノ場合ニ於テハ判決ハ申立ニ因リ之ヲ送達ス

第五十四條　判決言渡ノ際當事者雙方在廷シタル場合ニ於テ其ノ言渡後當事者雙方ガ控訴ヲ拋棄ヲ爲シタルトキハ控訴期間內ト雖其ノ判決確定ス此ノ場合ニ於テハ其ノ旨ヲ調書ニ記載スヘシ

第五十五條　民事訴訟法第四百二十二條ノ場合ニ於テ當事者合意ノ申立アルトキハ高等法院ハ直ニ本案ノ辯論及裁判ヲ爲スコトヲ得

第五十六條　控訴ノ提起ハ訴狀ヲ原判決ヲ爲シタル法院又ハ民政署長ニ差出シテ之ヲ爲ス

控訴ノ提起アリタルトキハ書記ノ職務ヲ行フ者ハ七日內ニ訴訟記錄ト共ニ控訴狀ヲ高等法院ニ送付スヘシ

第五十七條　執行裁判所ノ職務ハ民政署長之ヲ行フ

第五十八條　民事訴訟法第五百十四條第二項ノ訴ハ地方法院之ヲ管轄ス

第五十九條　民事訴訟法第五百四十九條、第五百六十一條第三項及第六百三十五條ノ訴ハ民政署長ノ管轄ニ屬セサルモノナルトキハ地方法院之ヲ管轄ス

第六十條　第十九條ノ規定ニ從ヒ判決ニ附記シタル訴訟費用確定決定ニ依ル强制執行ハ執行力アル判決正本ニ基キ之ヲ爲ス

第六十一條　假差押ノ申請ニ關スル裁判ハ本案ノ管轄法院若ハ民政署長又ハ假差押ノ目的物ノ所在地ヲ管轄スル民政署長ノ管轄トス

第六十二條　假差押ノ申請及其ノ取消ノ申立ニ付テノ裁判ハ決定ヲ以テ之ヲ爲ス此ノ裁判ハ口頭

辯論ヲ經スシテ之ヲ爲スコトヲ得

假差押決定ニ對シテハ抗告ノミヲ爲スコトヲ得其ノ取消決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

前二項ノ規定ハ假處分ニ之ヲ準用ス

第六十三條　民事訴訟法第七百六十一條ノ場合ニ於テ區裁判所ノ管轄ニ屬スルモノハ民政署長之ヲ管轄ス

第六十四條　公示催告手續ハ民政署長之ヲ管轄ス

第六十五條　民事訴訟手續法中區裁判所又ハ地方裁判所ノ管轄ニ屬スル事項ハ地方法院之ヲ管轄ス但シ同法第五十五條第一項及第六十六條第一項ノ訴ハ高等法院之ヲ管轄ス

第六十六條　人事訴訟ニ關シテハ口頭辯論ノ前後ヲ問ハス民政署長ハ事件ノ關係ヲ明瞭ナラシムル爲必要ナル處分ヲ爲スコトヲ得

第三節　刑事訴訟手續

第六十七條　刑事訴訟手續ハ高等法院ニ於テハ刑事訴訟法中控訴裁判所ニ關スル規定ニ依リ地方法院ニ於テハ同法中地方裁判所ニ關スル規定ニ依リ民政署ニ於テハ同法中區裁判所ニ關スル規定ニ依ル但シ裁判所構成法中區裁判所ノ管轄ニ屬セシメタル事件ヲ地方法院ニ於テ取扱フ場合ニハ刑事訴訟法中區裁判所ニ關スル規定ニ依ル

第六十八條　關東州裁判令第三條第五號ニ依リ民政署長ノ管轄ニ屬スヘキ刑事事件ニシテ地方法院ノ管轄ニ屬スヘキ事件ト關聯スルモノハ地方法院之ヲ管轄ス

第六十九條　關東州裁判令第三條第五號ニ掲ケタル罪ニ關シテハ裁判所構成法第十六條ノ一第二項及第十六條ノ二ノ規定ニ依ル

第七十條　官吏、公吏ノ作ルヘキ書類ニシテ刑事訴訟法第二十條、第二十一條其ノ他同法規定ノ形式ニ瑕疵アルモノニ付テハ當該吏員ヲシテ之ヲ補正セシメ有效ナラシムルコトヲ得

第七十一條　民政署長及憲兵隊長ハ其ノ管轄區域内ニ於テ司法警察官トシテ犯罪捜索ニ付地方法院檢察官ト同一ノ權ヲ有ス

左ニ掲クル者ハ地方法院檢察官ノ補佐トシテ其ノ指揮ヲ受ケ司法警察官トシテ犯罪ヲ捜索シ

一　警視、警部

二　憲兵將校、準士官、下士

三　民政支署長

第七十二條　檢事ノ職務ヲ行フ者ハ現行犯ニ非スト雖捜索ノ結果被告事件急速ノ處分ヲ要スルモノト思料シタルトキハ公訴ノ提起前ニ限リ拘引狀ヲ發シ又ハ司法警察官ヲシテ之ヲ發セシムルコトヲ得

前項ノ場合ニ於テ禁錮以上ノ刑ニ該ルモノト思料シタルトキハ檢事ノ職務ヲ行フ者ハ拘留狀ヲ發シ檢證、捜索、差押ヲ爲シ證人ヲ訊問シ若ハ鑑定ヲ命シ又ハ司法警察官ヲシテ之ヲ爲サシムルコトヲ得但シ宣誓ヲ爲サシメ又ハ罰金若クハ科料及費用賠償ノ言渡ヲ爲スコトヲ得ス

第七十三條　檢察官ハ被告事件ノ輕重難易ニ從ヒ豫審ヲ求メ又ハ直ニ訴ヲ爲スヘシ

第七十四條　民政署長ニ於テハ豫審ヲ須キスト雖モ刑事訴訟法第七十八條第一項及第百四條第二項中市町村長ノ立會ニ關スル規定ハ之

ヲ適用セス但シ此ノ場合ニ於テハ立會人二名アルヲ要ス

第七十六條　豫審判官ハ被告人ノ訊問、鑑定、檢證、捜索、差押ノ處分ヲ民政署長ニ囑託スルコトヲ得

前項ニ依リ囑託ヲ受ケタル民政署長ハ受託判事ト同一ノ權ヲ有ス

第七十七條　檢事ノ職務ヲ行フ者又ハ司法警察官ハ刑事訴訟法第百四十四條、第百四十六條及第四百十七條ノ場合ニ於テ犯所ニ臨檢スルノ必要アリト認メタルトキハ臨檢ヲ爲サスシテ豫審判官ニ屬スル處分ヲ爲スコトヲ得

第七十八條　法院ハ法院所在地外ニ於テ證據蒐集ヲ爲スヘキ場合ニ於テ司法警察官ニ檢證、捜索又ハ差押ノ處分ヲ爲サシメ證人ノ訊問又ハ鑑定ヲ命スルコトヲ得

前項ノ場合ニ於テ司法警察官ハ罰金若ハ科料及費用賠償ノ言渡ヲ爲シ又ハ宣誓ヲ爲サシムルコトヲ得ス

第七十九條　豫審判官ハ被告事件其ノ法院ノ事物ノ管轄ニ屬セサル場合ト雖法院ノ公判ニ付スルノ言渡ヲ爲スヘシ但シ被告人拘留ヲ受ケタル場合ニ於テ罰金又ハ拘留若ハ科料ノ刑ニ該ルヘキ者ナリトト思料シタルトキハ釋放ノ言渡ヲ爲スヘシ

第八十條　民政署長ハ被告人ノ呼出、拘引及拘留狀檢證、捜索及差押ニ關シテハ豫審判事ト同一ノ權ヲ有ス

第八十一條　民政署長ハ檢證、捜索又ハ差押ノ處分ヲ司法警察官ニ命スルコトヲ得

前項ノ規定ニ依リ處分ヲ命セラレタル者臨檢捜索ノ場所ニ於テ必要アリト認ムルトキハ證人ヲ訊問シ又ハ鑑定ヲ命スルコトヲ得

前二項ノ場合ニ於テ司法警察官ハ前條ノ規定ニ依リ民政署長ニ屬スル職權ヲ行フ但シ書記ノ立會ヲ要セス又宣誓ヲ爲サシメ又ハ罰金若ハ科料及費用賠償ノ言渡ヲ爲スコトヲ得ス

第八十二條　民政署長拘留狀ヲ發シタル場合ニ於テハ被告人ハ之ヲ民政署ニ拘置スルコトヲ得

第八十三條　刑事訴訟法第二百十五條ノ規定ハ民政署長ノ裁判ニ之ヲ適用セス

第八十四條　法院又ハ民政署長ハ公判開廷前ト雖檢證、捜索、差押ヲ爲シ證人ヲ訊問シ又ハ鑑定ヲ命スルコトヲ得此ノ場合ニ於テハ檢事ノ職務ヲ行フ者其ノ他訴訟關係人ノ立會ヲ要セス

法院ハ公判開廷ノ前後ヲ問ハス前項ノ處分ヲ民政署長ニ囑託スルコトヲ得

第八十五條　受命判官又ハ受託民政署長ハ臨檢ヲ爲シタル場合ニ於テ必要アリト認ムルトキハ法院ノ決定ヲ俟タス捜索、差押ヲ爲シ被告人、證人ヲ訊問シ又ハ鑑定ヲ命スルコトヲ得

第八十六條　被告人、證人又ハ鑑定人ヨリ期日ニ出頭スヘキ受書ヲ差出サシメ又ハ口頭ヲ以テ次回ノ出頭ヲ命シタルトキハ召喚狀又ハ呼出狀ヲ送達シタルト同一ノ効力ヲ生ス但シ口頭ヲ以テ出頭ヲ命シタル場合ニ於テハ其ノ旨ヲ調書又ハ公判始末書ニ記載スヘシ

第八十七條　刑事訴訟法第二百三十七條及第二百六十四條第三項ノ規定ハ之ヲ適用セス但シ法院ハ被告人又ハ被告事件ノ模樣ニ因リ職權ヲ以テ辯護人ヲ附スルコトヲ得

第八十八條　刑事訴訟法第三百四十一條ノ規定ハ之ヲ適用セス

第八十九條　民政署ニ於テハ證據ト爲ス書類ハ當事者異議ナキ場合ニ限リ其ノ要旨ヲ告ケテ朗讀ニ代フルコトヲ得

第九十條　法院ハ豫審ヲ經タル事件ニシテ之ヲ必要トスルトキハ豫審判官ニ送付スルノ決定ヲ爲スコトヲ得

第九十一條　辯論終結ノ後ハ被告人出廷セスト雖對席判決トシテ言渡スヘシ

第九十二條　罰金以下ノ刑ニ該ルヘキ被告人呼出狀ヲ受取リ期日受取書ヲ差出シ又ハ口頭ニテ期日出頭ヲ命セラレタルモ本人又ハ代人出頭セサル爲闕席判決ヲ受ケタルトキハ故障ヲ申立ルコトヲ得ス

第九十三條　前二條ノ場合ニ於テハ判決書ニ控訴期間ヲ記載シ職權ヲ以テ其ノ正本ヲ送達スヘシ控訴期間ハ判決正本ノ送達アリタル日ヨリ之ヲ起算ス

控訴期間ノ記載ナキトキハ更ニ其ノ通知アル迄控訴期間ノ經過ヲ停止ス

第九十四條　法院ニ於テ一年以下ノ懲役若ハ禁錮又ハ二百圓以下ノ罰金ヲ言渡シタル判決又ハ民政署長ノ言渡シタル判決ニ付テハ證據ニ關スル理由ノ明示ヲ省畧スルコトヲ得

第九十五條　拘留、科料又ハ一月以下ノ懲役若ハ禁錮又ハ二十圓以下ノ罰金ノ刑ニ處スヘキ事件ニ於テ民政署長ハ被告人ヲ呼出スノ必要ナシト認メタルトキハ直ニ其ノ判決ノ正本ヲ被告人ニ送達スルコトヲ得

第九十六條　前條ノ場合ニ於テ被告人ハ判決ノ送達後三日ノ期間內ニ口頭又ハ書面ヲ以テ故障ヲ申立ツルコトヲ得

故障ノ申立アリタルトキハ民政署長ハ直ニ又ハ期日ヲ定メテ公判ヲ開始スヘシ

公判開始ノ期日ニ被告人又ハ其ノ代人出頭セサルトキハ故障ハ其ノ效力ヲ失フ

第九十七條　拘留、科料又ハ一月以下ノ懲役若ハ禁錮又ハ二十圓以下ノ罰金ノ刑ニ處スヘキ犯罪ニ付テハ公判始末書ヲ省畧スルコトヲ得

第九十八條　民政署長ノ判決ニ對スル控訴ノ期間ハ三日トス

前二項ノ場合ニ於テ司法警察官ハ前條ノ規定ニ依リ民政署長ニ屬スル職權ヲ行フ但シ書記ノ立會ヲ要セス又宣誓ヲ爲サシメ又ハ罰金若ハ科料及費用賠償ノ言渡ヲ爲スコトヲ得ス

第八十二條　民政署長拘留狀ヲ發シタル場合ニ於テハ被告人ハ之ヲ民政署ニ拘置スルコトヲ得

第八十三條　刑事訴訟法第二百十五條ノ規定ハ民政署長ノ裁判ニ之ヲ適用セス

第八十四條　法院又ハ民政署長ハ公判開廷前ト雖檢證、搜索、差押ヲ爲シ證人ヲ訊問シ又ハ鑑定ヲ命スルコトヲ得此ノ場合ニ於テハ檢事ノ職務ヲ行フ者其ノ他訴訟關係人ノ立會ヲ要セス

法院ハ公判開廷ノ前後ヲ問ハス前項ノ處分ヲ民政署長ニ囑託スルコトヲ得

第八十五條　受命判官又ハ受託民政署長ハ臨檢ヲ爲シタル場合ニ於テ必要アリト認ムルトキハ法院ノ決定ヲ俟タス搜索、差押ヲ爲シ被告人、證人ヲ訊問シ又ハ鑑定ヲ命スルコトヲ得

第八十六條　被告人、證人又ハ鑑定人ヨリ期日ニ出頭スヘキ受書ヲ差出サシメ又ハ口頭ヲ以テ次回ノ出頭ヲ命シタルトキハ召喚狀又ハ呼出狀ヲ送達シタルト同一ノ効力ヲ生ス但シ口頭ヲ以テ出頭ヲ命シタル場合ニ於テハ其ノ旨ヲ調書又ハ公判始末書ニ記載スヘシ

第八十七條　刑事訴訟法第二百三十七條及第二百六十四條第三項ノ規定ハ之ヲ適用セス但シ法院ハ被告人又ハ被告事件ノ模樣ニ因リ職權ヲ以テ辯護人ヲ附スルコトヲ得

第八十八條　刑事訴訟法第二百四十一條ノ規定ハ之ヲ適用セス

第八十九條　民政署ニ於テハ證據ト爲ス書類ハ當事者異議ナキ場合ニ限リ其ノ要旨ヲ告ケテ朗讀ニ代フルコトヲ得

第九十條　法院ハ豫審ヲ經タル事件ニシテ之ヲ必要トスルトキハ豫審判官ニ送付スルノ決定ヲ爲スコトヲ得

第九十一條　辯論終結ノ後ハ被告人出廷セスト雖對席判決トシテ言渡スヘシ

第九十二條　罰金以下ノ刑ニ該ルヘキ被告人呼出狀ヲ受取リ期日受取書ヲ差出シ又ハ口頭ニテ期日出頭ヲ命セラレタルモ本人又ハ代人出頭セサル爲闕席判決ヲ受ケタルトキハ故障ヲ申立ルコトヲ得ス

第九十三條　前二條ノ場合ニ於テハ判決書ニ控訴期間ヲ記載シ職權ヲ以テ其ノ正本ヲ送達スヘシ

控訴期間ハ判決正本ノ送達アリタル日ヨリ之ヲ起算ス

控訴期間ノ記載ナキトキハ更ニ其ノ通知アル迄控訴期間ノ經過ヲ停止ス

第九十四條　法院ニ於テ一年以下ノ懲役若ハ禁錮又ハ二百圓以下ノ罰金ヲ言渡シタル判決又ハ民政署長ノ言渡シタル判決ニ付テハ證據ニ關スル理由ノ明示ヲ省畧スルコトヲ得

第九十五條　拘留、科料又ハ一月以下ノ懲役若ハ禁錮又ハ二十圓以下ノ罰金ノ刑ニ處スヘキ事件ニ於テ民政署長ハ被告人ヲ呼出スヲ必要ナシト認メタルトキハ直ニ其ノ判決ノ正本ヲ被告人ニ送達スルコトヲ得

第九十六條　前條ノ場合ニ於テ被告人ハ判決ノ送達後三日ノ期間內ニ口頭又ハ書面ヲ以テ故障ヲ申立ツルコトヲ得

故障ノ申立アリタルトキハ民政署長ハ直ニ又ハ期日ヲ定メテ公判ヲ開始スヘシ

公判開始ノ期日ニ被告人又ハ其ノ代人出頭セサルトキハ故障ハ其ノ效力ヲ失フ

第九十七條　拘留、科料又ハ一月以下ノ懲役若ハ禁錮又ハ二十圓以下ノ罰金ノ刑ニ處スヘキ犯罪ニ付テハ公判始末書ヲ省畧スルコトヲ得

第九十八條　民政署長ノ判決ニ對スル控訴ノ期間ハ三日トス

前項ノ期間ハ判決言渡アリタル日又ハ判決正本ノ送達アリタル日ヨリ之ヲ起算ス

第九十九條　控訴提起權ハ之ヲ拋棄スルコトヲ得

第百條　控訴ハ其ノ裁判アル迄何時ニテモ之ヲ取下クルコトヲ得

第百一條　控訴提起權ノ拋棄ハ原判決ヲ爲シタル法院又ハ民政署長ニ之ヲ爲スヘシ

控訴ノ取下ハ控訴法院ニ之ヲ爲スヘシ

第百二條　控訴提起權ノ拋棄及控訴ノ取下ハ書面ヲ以テ之ヲ爲スヘシ但シ公判廷ニ於テハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得此ノ場合ニ於テハ其ノ申立ヲ調書ニ記載スヘシ

第百三條　控訴提起權ヲ拋棄シ又ハ控訴ヲ取下ケタルトキハ控訴ノ提起期間内ト雖裁判確定ス

第百四條　辯護人ハ被告人ノ同意ヲ得スシテ控訴ヲ爲スコトヲ得ス

第百五條　刑事訴訟法第二百六十九條ノ場合ヲ除クノ外訴訟手續法律ニ違ヒタルコトアリト雖裁判ニ影響ヲ及ホササルトキハ之ヲ以テ控訴ノ理由ト爲スコトヲ得ス

第百六條　控訴提起權喪失後ニ爲シタル控訴申立ハ決定ヲ以テ之ヲ棄却スヘシ此ノ決定ニ對シテハ抗告ヲ爲スコトヲ得

第百七條　再審ノ訴及非常上告ニ關シテハ高等法院ヲ以テ上告裁判所トス

高等法院ハ再審ノ訴ニシテ其ノ原由アルコトヲ認メタルトキハ原判決ヲ破毀シ直ニ其ノ事件ノ公訴及私訴ニ付判決ヲ爲スコトヲ得

第百八條　差押物件ノ還付ヲ受クヘキ者ノ所在不明ノ爲又ハ其ノ他ノ事由ニ因リ其ノ物件ヲ還付スルコト能ハサル場合ニ於テハ檢事ノ職務ヲ行フ者ハ其ノ旨ヲ公示スヘシ公示シタル日ヨリ六月内ニ還付ノ請求ナキトキハ其ノ物件ハ國庫ニ歸屬ス

前項ノ期間内ト雖價値ナキ物件ハ之ヲ廢棄シ保管ニ不便ナル物件ハ之ヲ公賣シテ其ノ代金ヲ保管スルコトヲ得

第百九條　檢事ノ職務ヲ行フ者ハ私訴ノ審判ニ立會ハサルコトヲ得

第三章　民事爭訟調停

第百十條　民事爭訟調停ノ申請ハ被申請人ノ居住地ヲ管轄スル民政署ニ書面ヲ以テ之ヲ爲スヘシ

但シ不動産ノ爭訟ニ付テハ其ノ所在地ヲ管轄スル民政署ニ申請スヘシ

第百十一條　民政署長ハ前條ノ申請アリタルトキハ期日ヲ定メ當事者雙方ヲ呼出スヘシ

前項ノ場合ニ於テ被申請人他ノ民政署管内ニ移住シタルトキハ事件ヲ其ノ管轄民政署ニ移送スルコトヲ得

第百十二條　調停ニハ代理人ヲ用ウルコトヲ得ス但シ民政署長ノ許可ヲ受ケ親族又ハ雇人ヲ以テ代理セシムルハ此ノ限ニ在ラス

第百十三條　調停成立シタルトキハ調書ヲ以テ左ノ事項ヲ明確ニスヘシ

一　當事者及代理人ノ氏名、身分、職業、住所

二　申請人請求ノ要旨

三　被申請人答辯ノ要旨

四　調停ノ成立事項及履行ノ期日

第百十四條　調停調書ノ原本ニハ年月日ヲ記載シ當事者ナシテ署名捺印セシメ民政署長署名捺印シ且署印ヲ捺捺スヘシ

第百十五條　當事者ハ調停調書ノ謄本ノ下付ヲ請求スルコトヲ得

第百十六條　調停ノ成立シタル爭訟ト同一事件ニ付テハ訴訟ヲ提起スルコトヲ得ス

第百十七條　調停ノ申請人指定ノ期日ニ正當ノ理由ナクシテ出頭セサルトキハ之ヲ取下ケタルモノト看做ス

破申請人期日ニ出頭セサルトキハ更ニ期日ヲ定メテ之ヲ呼出スヘシ再度ノ呼出期日ニ仍出頭セサル場合ト雖調停ノ成立スル見込アルトキハ民政署長ハ更ニ之ヲ呼出スコトヲ得

第百十八條　調停ノ申請ハ時效ヲ中斷ス

調停ノ成立セサルトキハ二月內ニ訴ヲ提起スルニ非サレハ時效中斷ノ效力ヲ生セス

第百十九條　調停調書ハ所有權以外ノ權利ノ登記ニ關シテハ不動產登記法第百二十八條、第百三十條及第百三十二條ニ定メタル登記ヲ命スル裁判ト看做ス

第百二十條　調停ノ執行ニ關シテハ民事訴訟法第五百五十九條第四號ニ揭ケタル債務名義ニ因ル强制執行ニ關スル規定ヲ準用ス

第百二十一條　調停ノ執行ヲ爲ス場合ニ於テハ調停調書ノ送達ヲ爲スコトヲ要セス

債務者ノ一般ノ承繼人ニ對シ執行ヲ爲ス場合ニ於テハ其ノ執行前調停調書ノ謄本ヲ送達スルコトヲ要ス

第百二十二條　民政署長ハ調停ノ成立事項ニ關スル犯罪行爲ニ付公訴ノ提起アリタルトキハ其ノ事件ノ完結迄執行處分ヲ停止スヘシ

第百二十三條　書類ノ送達ニ付テハ本令中訴訟書類ノ送達ニ關スル規定ヲ準用ス

第百二十四條　調停ニ關スル費用ハ當事者各自ノ負擔トス但シ書類ノ送達及執行ノ費用ハ債務者ノ負擔トス

前項但書ノ費用ハ債權ノ執行ト同時ニ之ヲ取立ツヘシ

第百二十五條　調停ノ執行ニ關シテハ民政署長互ニ共助ヲ爲スヘシ

第四章　非訟事件

第百二十六條　非訟事件ハ民政署長之ヲ取扱フ但シ不動產登記、法人及夫婦財產契約登記並商業登記ハ所屬官吏ナシテ之ヲ取扱ハシムルコトヲ得

第百二十七條　非訟事件手續法第百二十六條及第二百六條ノ規定ニ依リ地方裁判所ノ管轄ニ屬スルモノハ地方法院之ヲ管轄ス

第百二十八條　破產事件ハ地方法院之ヲ管轄ス

第五章　公證

第百二十九條　民事ニ關スル公正證書ノ作成ハ當事者ノ申請ニ因リ當分ノ內民政署長之ヲ取扱フ

第百三十條　本章ニ依リ作成シタル公正證書ハ完全ノ證據ニシテ且民事訴訟法第五百五十九條第五號但書ノ作成要件ヲ具備シタルモノハ同號債務名義ト同一ノ規定ニ從ヒ强制執行ヲ爲スコトヲ得但シ僞造ノ公訴提起アリタルトキハ其ノ執行ヲ停止スルコトヲ得

民事訴訟ニ關シ僞造ノ申立アリタル場合ニ於テハ民事訴訟法第五百條ノ規定ニ依ル

第百三十一條　公正證書ノ作成ニ關シテハ公證人法第四章ニ依ル但シ同章中地方裁判所長ノ職務ハ民政署長又ハ民政支署長之ヲ行フ

第百三十二條　公證官吏ノ職務執行ニ關シ不服アル者ハ高等法院ニ抗告スルコトヲ得

前項ノ抗告アリタルトキハ公證官吏ハ其ノ事件ノ處分ヲ停止スヘシ

抗告ニ關シテハ民事訴訟法ニ依ル

第百三十三條　第百三十條ニ依リ强制執行ヲ爲ス場合ニ於テハ公正證書ノ謄本ヲ送達スルコトヲ要セス

債務者ノ一般ノ承繼人ニ對シ强制執行ヲ爲ス場合ニ於テハ其ノ執行前公正證書ノ謄本ヲ送達スルコトヲ要ス

第百三十四條　公證官吏其ノ職務執行ニ付申請人其ノ他ノ者ニ損害ヲ加ヘタルトキハ其ノ損害カ公證官吏ノ故意又ハ重大ナル過失ニ因リテ生シタル場合ニ限リ之ヲ賠償スル責ニ任ス

第百三十五條　公正證書作成費用及作成ノ爲出張シタル公證官吏ノ旅費日當ハ申請人ノ負擔トス其ノ數額ハ關東都督之ヲ定ム

第百三十六條　公正證書ノ原本其ノ附屬書類及法令ニ依リ公證官吏之調製シ殆ル帳簿ハ事變ヲ避クル爲ニスル場合及法院、豫審判官、民政署長又ハ民政支署長ノ命令又ハ囑託アルニ非サレハ他ニ持出スコトヲ得ス

第百三十七條　公證官吏事故アルトキハ所屬官吏ヲシテ其ノ職務ヲ代理セシムルコトヲ得

第百三十八條　法令中公證人ノ職務ニ關スルモノハ公證官吏ヲシテ之ヲ行ハシム

第百三十九條　私書證書ニ確定日附ヲ附スルコトヲ請求ハ公證官吏ニ之ヲ爲スヘシ

第六章　執達

第百四十條　訴訟ニ關スル書類ノ送達、告知、催告、裁判ノ執行、動產不動產ノ任意競賣其ノ他ノ法令ニ依リ執達吏ノ職務ニ屬セシメタルモノハ民政署所屬官吏ヲシテ之ヲ取扱ハシム

民政支署長ハ民政署長ノ職務ヲ擧ル場合ニ於テハ前項ノ職務ハ其ノ所屬官吏ヲシテ之ヲ取扱ハシム

民政署長及民政支署長ハ巡査其ノ他適當ト思料スル者ヲシテ臨時執達吏ノ職務ヲ取扱ハシムルコトヲ得

前各項ニ依リ執達吏ノ職務ヲ行フ者ハ證票ヲ携帶スヘシ

附　則

第百四十一條　本令ハ明治四十一年十月一日ヨリ之ヲ施行ス

關東州刑罰令、關東州民事審理規則及關東州刑事審理規則ハ之ヲ廢止ス

第百四十二條　本令施行前地方法院ニ於テ爲シタル登記、公證及確定日附ハ本令ニ依リタルモノト同一ノ效力ヲ有ス

〔參照〕明治三十五年法律第五十號ハ年齡計算ニ關スル件、同三十七年法律第十七號ハ記名ノ國債ヲ目的トスル質權ノ設定ニ關スル件、同三十二年法律第四十號ハ失火ノ責任ニ關スル件、同三十三年法律第九十一號ハ救育所ニ在ル孤兒ノ職務ニ關スル件、同三十二年法律第五十號ハ外國人ノ署名捺印及無資力證明ニ關スル件、同三十三年法律第十三號ハ遺言ノ確認ニ關スル件、同三十三年勅令第四百九號ハ相續人曠缺ノ場合ニ於テ國庫ニ歸屬シタル財產引渡ニ關スル件、同三十三年法律第十七號ハ商法中署名スヘキ場合ニ關スル件、同三十二年勅令第二百七十一號ハ小商人ノ範圍ニ關スル件、同二十二年法律第三十四號ハ決鬪罪處分法、同二十三年法律第百一號ハ商法ニ從ヒ破產ノ宣告ヲ受ケタル者ニ關スル件、同三十八年法律第五十一號ハ臺灣銀行ニ於テ發行スル銀行券ノ僞造變造等ニ關スル件、同三十八年法律第六十六號ハ外國ニ於テ流通スル貨幣紙幣銀行券僞造變造等ニ關スル件、又同三

十九年法律第五十五號ハ債務者ニ代位スル債權者ノ登記申請ニ關スル件ナリ

第二編　裁判所位置及管轄區域

第一章　內地

裁判所位置及管轄區域　（明治二十三年八月法律第六十二號）

朕裁判所位置及管轄區域改定ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム此法律ハ裁判所構成法實施ノ日ヨリ効力ヲ有ス

裁判所位置及管轄區域別表ノ通改定ス但新置裁判所開廳ノ期日ハ司法大臣之ヲ定ム

（裁判所位置及管轄區域表ハ之ヲ略ス）

地方裁判所支部及其管轄表　（明治二十三年八月司法省令第三號）

明治二十三年（二月）法律第六號裁判所構成法第三十一條ニ依リ地方裁判所支部及其管轄左表甲乙號ノ通相定メ甲號支部ニ於テハ重罪公判及ヒ民事第二審ヲ除ク外地方裁判所ノ裁判權ニ屬スル事務、乙號支部ニ於テハ豫審ヲ要スルモノヲ除ク外、地方裁判所ノ裁判權ニ屬スル刑事第一審ノ事務ヲ取扱ハシム但本令ハ明治二十三年十一月ヨリ實施ス

（表ハ甲乙共之ヲ略ス）

地方裁判所甲號支部ノ刑事第二審ノ事務取扱廢止　（明治二十四年九月司法省令第九號）

地方裁判所甲號支部ニ於テハ自今刑事第二審ノ事務取扱ヲ廢止ス

裁判所管轄ニ關スル件　（明治二十九年四月法律第八十八號）

朕帝國議會ノ協賛ヲ經タル裁判所管轄ニ關スル法律ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條　東京地方裁判所管內京橋區裁判所、芝區裁判所、麹町區裁判所、下谷區裁判所、本所區裁判所ヲ廢シ更ニ東京區裁判所ヲ設置シ從前各區裁判所ノ管轄區域ヲ以テ東京區裁判所ノ管轄トス

第二條　東京區裁判所開廳ノ期日ハ司法大臣之ヲ定ム但シ東京區裁判所開廳マテハ仍從前ノ各區裁判所ヲシテ之ヲ管轄セシム

裁判所設立廢止及管轄區域變更ニ關スル件　（明治三十二年二月法律第二十號）

朕帝國議會ノ協賛ヲ經タル裁判所設立廢止及管轄區域變更ニ關スル法律ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條　東京地方裁判所管內伊豆國新島本村ニ新島區裁判所ヲ置キ同國八丈島大賀郷ニハ八丈島區裁判所ヲ置ク

同地方裁判所管內小笠原島ノ內父島大村ニ父島區裁判所ヲ置ク

第二條　那覇地方裁判所管內琉球國宮古郡西里村ニ宮古區裁判所ヲ置キ同國八重山郡大濱間切ニ

八重山區裁判所ヲ置ク

第三條　大阪地方裁判所管內天王寺區裁判所ヲ廢止ス

第四條　岡山地方裁判所管內津山區裁判所管轄播磨國佐用郡石井村ヲ神戸地方裁判所管內龍野區裁判所ノ管轄ニ編入ス但シ此ノ法律施行前ニ於テ津山裁判所ノ爲シタル裁判ニ對スル上訴ハ岡山地方裁判所ノ管轄トス

第五條　新置區裁判所開廳ノ期日ハ司法大臣之ヲ定ム但シ新置區裁判所ノ管轄ニ屬スヘキ事件ハ其ノ開廳マテ舊管轄ノ區裁判所又ハ島吏ヲシテ之ヲ取扱ハシム

第六條　裁判所位置及管轄區域表中東京、前橋、大阪、神戸、岐阜、熊本、鹿兒島、那覇ノ各地方裁判所管內ニ於ケル區裁判所管轄中左表ノ通改定ス

（裁判所位置及管轄區域表ハ之ヲ略ス）

同上（明治二十九年三月法律第六十一號）

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル裁判所ノ設立及位置竝管轄區域ノ變更ニ關スル法律ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條　横濱地方裁判所管內八王寺區裁判所ヲ東京地方裁判所ノ管轄トス但シ此ノ法律施行前ニ於テ八王寺區裁判所ノ爲シタル裁判ニ對スル上訴ハ横濱地方裁判所ノ管轄トス

第二條　札幌地方裁判所管內北見國宗谷郡稚內村ニ稚內區裁判所ヲ置ク

札幌地方裁判所管內幌泉區裁判所ヲ日高國浦河郡浦河村ニ移シ浦河區裁判所ト改稱ス

稚內區裁判所及浦河區裁判所開廳ノ期日ハ司法大臣之ヲ定ム但シ稚內區裁判所ノ管轄ニ屬スヘキ事件ハ其開廳マテハ仍增毛區裁判所ヲシテ管轄セシム

第三條　裁判所位置及管轄區域表中東京、横濱、水戸、浦和、前橋、長野、新潟、奈良、福井、和歌山、高松、名古屋、廣島、山口、福島、山形、盛岡、秋田、札幌ノ各地方裁判所管內ニ於ケル區裁判所管轄中左表ノ通改定ス

（裁判所位置及管轄區域ハ之ヲ略ス）

裁判所管轄區域變更ニ關スル件（明治三十八年三月法律第六十一號）

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル裁判所管轄區域變更ニ關スル法律ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

裁判所位置及管轄區域表中靜岡地方裁判所管內藤枝區裁判所管轄遠江國榛原郡ヲ同地方裁判所管內掛川區裁判所ノ管轄ニ變更ス

附則

本法ハ明治三十八年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

本法施行前藤枝區裁判所ニ於テ受理シタル事件ハ同區裁判所之ヲ裁判ス

同上（明治四十一年三月法律第三十三號）

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル裁判所管轄區域變更ニ關スル法律ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

明治三十三年法律第六十二號裁判所位置及管轄區域表中名古屋地方裁判所管內西尾區裁判所管轄三河國碧海郡安城町大字福釜、赤松、古井、同國同郡依佐美村大字高棚及同國幡豆郡農坂村大字逆

川、桐山、上六栗ヲ同地方裁判所管內岡崎區裁判所ノ管轄ニ、同地方裁判所管內岡崎區裁判所管轄同國碧海郡櫻井村大字川島、村高ヲ同地方裁判所管內西尾區裁判所ノ管轄ニ變更ス

附　則

本法ハ明治四十一年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

本法施行前四尾區裁判所又ハ岡崎區裁判所ニ於テ受理シタル事件ハ其ノ各區裁判所之ヲ裁判ス

同　上（明治四十一年三月法律第三十二號）

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル裁判所管轄區域變更ニ關スル法律ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

明治二十三年法律第六十二號裁判所位置及管轄區域表中長野地方裁判所管內上田區裁判所管轄信濃國更級郡更級村、八幡村、桑原村及稻荷山町ヲ同地方裁判所管內長野區裁判所ノ管轄ニ變更ス

附　則

本法ハ明治四十一年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

本法施行前上田區裁判所ニ於テ受理シタル事件ハ同區裁判所之ヲ裁判ス

裁判所管轄區域變更ニ關スル件（明治四十三年四月法律第四十七號）

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル裁判所管轄區域變更ニ關スル法律ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

裁判所位置及管轄區域表中左ノ通改正ス

福島地方裁判所管內郡山區裁判所ノ項、同平區裁判所ノ項及同若松區裁判所ノ項ヲ左ノ如ク改ム

郡山	岩代	安積郡
	磐城	田村郡
平	磐城	石城郡　雙葉郡
若松	岩代	若松市　北會津郡　耶麻郡　大沼郡　河沼郡

附　則

本法ハ明治四十三年七月一日ヨリ之ヲ施行ス

本法施行前平區裁判所又ハ若松區裁判所ニ於テ受理シタル事件ハ其ノ各區裁判所之ヲ裁判ス

裁判所管轄區域ノ變更（明治二十八年三月法律第二十一號）

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル裁判所管轄區域變更ノ法律ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

明治二十三年法律第六十二號裁判所位置及管轄區域表中大阪控訴院管轄伊豫國ヲ廣島控訴院ノ管轄ニ變更シ又廣島控訴院管轄因幡伯耆ノ國ヲ大阪控訴院ノ管轄ニ變更ス

此ノ法律ハ明治二十八年四月一日ヨリ施行ス

但シ明治二十八年三月三十一日以前ニ係ル松山地方裁判所及鳥取地方裁判所ノ裁判ニ對スル上訴ハ各從前ノ控訴院ヲシテ管轄セシム

裁判所管轄區域變更ニ關スル件（明治三十八年三月法律第四十九號）

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル裁判所管轄區域變更ニ關スル法律ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

明治二十三年法律第六十二號裁判所位置及管轄區域表中大阪控訴院管轄若狭、越前、加賀、能登、越中ノ國ヲ名古屋控訴院管轄ニ、備前、備中、美作、因幡、伯耆ノ國ヲ廣島控訴院ノ管轄ニ變更ス

附則

本法ハ明治三十八年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

明治三十八年三月十一日以前ニ於テ岡山、鳥取、福井、金澤、及富山ノ各地方裁判所ノ爲シタル裁判ニ對スル上訴ハ大阪控訴院之ヲ管轄ス

同上（明治三十八年三月法律第六十號）

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル裁判所管轄區域變更ニ關スル法律ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

明治二十三年法律第六十二號裁判所位置及管轄區域表中函館控訴院管轄陸奥ノ國ヲ宮城控訴院ノ管轄ニ變更ス

附則

本法ハ明治三十八年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

明治三十八年三月三十一日以前ニ於テ青森地方裁判所ノ爲シタル裁判ニ對スル上訴ハ函館控訴院ノ之ヲ管轄ス

那覇地方裁判所同區裁判所設置

（明治二十四年十二月法律第五號）

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル那覇地方裁判所及那覇區裁判設置法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

長崎控訴院管内那覇ニ那覇地方裁判所及那覇區裁判所ヲ置キ沖縄縣管内ヲ管轄セシム

第二章　臺灣

臺灣地方法院及出張所設立其名稱位置管轄區域

（明治三十一年七月臺灣總督府令第五十六號）

明治三十一年律令第十六號臺灣總督府法院條例第二條ニ依リ地方法院及出張所ヲ設立シ其名稱位置管轄區域左表ノ通相定ム但臺北地方法院宜蘭出張所臺南地方法院鳳山出張所臺南地方法院澎湖出張所ニ於テハ登記事務ノミヲ取扱フ（明治四十二年十月臺灣總督府令第七十七號ヲ以テ管轄表中ニ改正ヲ加フ）

臺灣總督府地方法院及出張所名稱位置管轄區域表

名稱	位置	管轄區域
臺北地方法院	臺北	臺北廳、桃園廳、新竹廳、宜蘭廳、臺東廳、花蓮港廳各管下一圓
臺北地方法院新竹出張所	新竹	臺北地方法院管轄ノ内宜蘭廳、臺東廳、花蓮港廳各管下一圓
臺北地方法院宜蘭出張所	宜蘭	臺北地方法院管轄ノ内宜蘭廳管下一圓
臺中地方法院	彰化	臺中廳、南投廳阿緱廳各管下一圓

臺南地方法院	臺南	嘉義廳、臺南廳、阿緱廳、澎湖廳各管下一圓
臺南地方法院嘉義出張所	嘉義	臺南地方法院管轄ノ內臺南廳管下蔴豆、店仔口、嘉義、打狗、鹽水港、僕仔脚ノ六辨務署管內一圓
臺南地方法院鳳山出張所	鳳山	臺南地方法院管轄ノ內臺南廳管下鳳山、阿公店、阿猴、湖州庄、東港、恒春ノ六辨務署管內一圓及臺東廳管下一圓
臺南地方法院澎湖出張所	・・・	澎湖廳管下一圓

本令施行前臺北地方法院臺中出張所ニ於テ受理シタル事件ハ臺中地方法院ニ於テ管轄ス（同上法令ハ本令管轄表中ニ改正ヲ加フルト共ニ更ニ本項及以下六項ノ規定ヲ立テタリ）

本令施行前臺北地方法院新竹出張所ニ於テ受理シタル事件ハ臺北地方法院ニ繫屬ス

本令施行前臺南地方法院嘉義出張所ニ於テ受理シタル事件ハ臺南地方法院ニ繫屬ス

本令施行前臺南地方法院ニ於テ受理シタル臺東廳、花蓮港廳管內ノ事件ニシテ未タ判決ヲ經サルモノハ仍臺南地方法院ニ於テ管轄ス

本令施行前臺北地方法院新竹出張所ニ於テ受理シタル臺中廳管下大甲支廳管內ノ事件ニシテ未タ判決ヲ經サルモノハ仍臺北地方法院ニ於テ管轄ス

本令施行前臺南地方法院嘉義出張所ニ於テ受理シタル南投廳管下林圯埔支廳管內ノ事件ニシテ未タ判決ヲ經サルモノハ仍臺南地方法院ニ於テ管轄ス

本令施行前臺北地方法院ニ於テ受理シタル宜蘭廳管下坪林尾支廳管內ノ事件ニシテ未タ判決ヲ經サルモノハ仍臺北地方法院ニ於テ管轄ス

第三章　韓國

統監府裁判所設置ノ件

（明治四十二年十月統監府令第二十八號）

統監府裁判所設置ノ件左ノ通定ム

統監府裁判所設置ノ件

統監府裁判所ヲ設置シ其ノ名稱、位置及管轄區域ヲ別表ノ通定ム

各裁判所開廳ノ期日ハ更ニ之ヲ告示ス

附則

本令ハ明治四十二年十一月一日ヨリ之ヲ施行ス

別表

統監府裁判所ノ名稱、位置及管轄區域表

裁判所ノ名稱及位置			管轄區域	
高等法院	控訴院	地方裁判所	區裁判所	道名	府郡名
高等法院（漢城府）	京城（同上）	京城（同上）	京城（同上）	京畿道	漢城府
公州			公州（懷德郡）	忠淸南道	楊州、高陽、永平、抱川、加平、開城、長湍、坡州、交河、豐德、連川、麻田、積城、朔寧、驪州、陰竹、利川、陽智、陽平、安城、楊城、竹山、原州、橫城、洪川、公州、定山、燕岐、懷德、鎭嶺、連山

大邱	大邱	大邱	大邱
海州	咸興		
大松禁黃新瑞平延海楚江寧（德源府）元甲北咸堤陰忠永報清天牙沔瑞洪保鴻（恩津郡）江景			
邱禾寧州溪興山安州山界邊）山山青興川城州同恩州安山川山州寧山）			
慶尙北道	黃海道	咸鏡南道	北道忠淸
大邱、漆谷、慶山、慈仁、淸道	松禾、長淵、殷栗、載寧、安岳、信川、黃州、鳳山、新溪、谷山、瑞興、遂安、金川、兎山、平山、延安、白川、海州、瓮津、楚山、碧潼、渭原、江界、慈城、厚昌、寧邊、泰川、雲山、熙川	德源府、安邊、文川、甲山、三水、北青、利原、端川、咸興、定平、長津、洪原、堤川、陰城、槐山、永春、丹陽	忠州、淸風、延豐、永同、沃川、黃磵、報恩、懷仁、青山、淸州、鎭川、淸安、文義、天安、平澤、稷山、水川、全義、牙山、新昌、溫陽、淸津、德山、瑞山、海美、泰安、洪州、禮山、大興、青陽、結城、鴻山、扶餘、林川、韓山、舒川、庇仁、保寧、藍浦、鰲川（內於青島ヲ除ク）、鰲川ノ內於青島

平壤	平壤	平壤	平壤
平壤興慶會城鏡（富寧郡）津城寧津永平蔚江通鐵金春江仁金水同釜盈慶永義靑安榮尙金（東萊府）星州			
慶尙南道	江原道	咸鏡北道	平安南道
星州、高靈、玄風、金山、知禮、開寧、善山、仁同、尙州、咸昌、聞慶、龍宮、榮川、豐基、順興、奉化、安東、醴泉、禮安、青松、眞寶、英陽、義城、義興、軍威、北安、永川、新寧、河陽、慶州、延日、興海、長鬐、盈德、寧淸、淸河、東萊府、梁山、欅張、爵島	水原、始興、果川、廣州、龍仁、振威、南陽、安山、仁川府、金浦、陽川、富平、通津、江華、喬桐、春川、華川、楊口、鐵蹄、金城、金化、淮陽、蔚珍、平海、三陟、江陵、襄陽、杆城、鐵原、欽谷、高城、平昌、旌善、寧越、永興、高原、富寧、茂山	明川、鏡城、鏡城津、吉州、會寧、鐘城、穩城、慶興、慶源、中和、順安、祥原、平壤	

光州	鎭南浦（三和府）	三和府、龍岡、江西、甑山
	安州（順川）	安州、龍川、永柔、价川
	順德（順川）	順川、寧遠、孟山
	成川（順川）	成川、江東、陽德
	新義州（義州府）	義州府ノ內古城面、光城面、古邑面、枇峴面、津留面、威化面、咸遠鐵山ノ內西林面、站面（內新義州區裁判所所轄地域ヲ除ク）朔州、昌城、龍川府、鐵山（內西林面、站面ヲ除ク）
	宣川	宣川、龜城
	定州	定州、郭山、嘉山、博川
	蔚山	蔚山、彥陽
	宣川	宣川、龜城
	定州	定州、郭山、嘉山、博川
	蔚山	蔚山、彥陽
	密陽	密陽、靈山、昌寧
	馬山（昌原府）	昌原府、咸安
	金海	金海
	晉州	晉州、泗川、丹城、宜寧
	陝川	陝川、草溪、三嘉
	居昌	居昌、安義、咸陽、山淸
	河東	河東、昆陽、南海
	龍南	龍南、固城、巨濟
	光州	光州、長城、潭陽、昌平、同福
全羅南道	谷城	谷城、求禮
	羅州	羅州、南平、綾州
	木浦（務安府）	務安府、智島
	靈光	靈光、咸平

	海南	海南、莞島、珍島
	長興	長興、康津、靈巖、寶城
	順天	順天、光陽、麗水、突山、興陽
	全州	全州、濟州、大靜、旌義
	錦山	錦山、金溝、金堤、益山、礦山、高山
	鎭安	鎭安、長水
	全州	全州、沃溝府、萬頃、臨陂、咸悅、龍安
全羅北道	群山（沃溝府）	群山、珍山、瀧潭、茂朱
	古阜	古阜、扶安、泰仁、井邑
	興德	興德、高敞、茂長
	南興	南興、淳昌、任實、雲峯
	古阜（德原府）	古阜、扶安、泰仁、井邑
	興德	興德、高敞、茂長
	南興	南興、淳昌、任實、雲峯

備考　裁判所ノ名稱ノ府郡名ト同一ナルモノハ位置ノ府郡名ヲ略シ又管轄區域ノ府郡名欄ニハ郡字ヲ略ス

統監府地方裁判所支部設置ノ件

（明治四十二年十月統監府令第二十九號）

統監府地方裁判所支部設置ノ件左ノ通定ム

地方裁判所設置ノ件

仁川、咸川、淸州、元山、淸津、新義州、晉州、木浦及全州ノ區裁判所ニ所屬地方裁判所ノ支部ヲ設置ス支部ハ別表ニ定メタル所管區裁判所ノ管轄區域內ノ事件ニ付地方裁判所ノ職務ヲ行フ

支部開廳ノ期日ハ更ニ之ヲ告示ス

附　則

本令ハ明治四十二年十一月一日ヨリ之ヲ施行ス

別表

地方裁判所支部管轄表

支部ノ名稱	所管區裁判所
京城地方裁判所仁川支部	仁川區裁判所
	金浦區裁判所
	江華區裁判所
京城地方裁判所春川支部	春川區裁判所
	金城區裁判所
公州地方裁判所清州支部	清州區裁判所
	報恩區裁判所
	永同區裁判所
	忠州區裁判所
	陰城區裁判所
	堤川區裁判所
咸興地方裁判所元山支部	元山區裁判所
	永興區裁判所
	淸津區裁判所
咸興地方裁判所淸津支部	鏡城區裁判所
	城津區裁判所
	會寧區裁判所
	慶興區裁判所
平壤地方裁判所新義州支部	新義州區裁判所
	義州區裁判所
	龍川區裁判所
	宣川區裁判所
	定州區裁判所
	寧邊區裁判所
	鐵原區裁判所
	通川區裁判所
	江陵區裁判所
	蔚珍區裁判所
	平昌區裁判所
	原州區裁判所
	江界區裁判所
	楚山區裁判所

釜山地方裁判所晉州支部	晉州區裁判所
	陜川區裁判所
	居昌區裁判所
	河東區裁判所
	龍南區裁判所
光州地方裁判所木浦支部	木浦區裁判所
	海南區裁判所
	長興區裁判所
	順天區裁判所
	濟州區裁判所
光州地方裁判所全州支部	全州區裁判所
	鎭安區裁判所
	錦山區裁判所
	群山區裁判所
	古阜區裁判所
	興德區裁判所
	南原區裁判所

未開廳區裁判所事務取扱ニ關スル件

（明治四十二年十月統監府令第三十號）

統監府未開廳區裁判所事務取扱ニ關スル件左ノ通定ム

未開廳區裁判所事務取扱ニ關スル件

別表上欄ニ記載シタル區裁判所ニ屬スル裁判事務ハ其ノ裁判所ノ開廳ニ至ル迄下欄ニ記載シタル區裁判所ニ於テ之ヲ取扱フ

附則

本令ハ明治四十二年十一月一日ヨリ之ヲ施行ス

別表

未開廳區裁判所	漢川區裁判所	事務取扱區裁判所	開城區裁判所
	金浦區裁判所		仁川區裁判所
	鐵原區裁判所		金城區裁判所
	平昌區裁判所		原州區裁判所
	保寧區裁判所		鴻山區裁判所
	瑞山區裁判所		洪州區裁判所
	沔川區裁判所		洪州區裁判所
	牙山區裁判所		天安區裁判所
	報恩區裁判所		清川區裁判所
	陰城區裁判所		忠州區裁判所
	甲山區裁判所		北青區裁判所
	順川區裁判所		安州區裁判所

第四章 樺太

樺太地方裁判所及同管內二區裁判所設置ニ關スル件

（明治四十年三月法律第二十八號）

朕帝國議會ノ協賛ヲ經テ樺太地方裁判所及同管內二區裁判所設置ニ關スル法律ヲ裁可シ茲ニ之

未開廳區裁判所	延安區裁判所	事務取扱區裁判所	海州區裁判所
	平山區裁判所		瑞興區裁判所
	新溪區裁判所		瑞興區裁判所
	星州區裁判所		大邱區裁判所
	青松區裁判所		安東區裁判所
	陜川區裁判所		晉州區裁判所
	谷城區裁判所		光州區裁判所
	靈光區裁判所		木浦區裁判所
	海南區裁判所		長興區裁判所
	鎭安區裁判所		全州區裁判所
	興德區裁判所		古阜區裁判所

ヲ公布セシム

第一條 樺太島「ウラジミロフカ」ニ樺太地方裁判所及ウラジミロフカ區裁判所ヲ置キ同島「マウカ」ニマウカ區裁判所ヲ置ク

第二條 裁判所位置及管轄區域表中函館控訴院ノ部「根室地方裁判所」欄ノ次ニ左ノ一欄ヲ加フ

樺太	ウラジミロフカ	樺太	本島南端「シラヌシ」岬ヨリ「メノコ」山「ウインザス」山「ベルニセット」山「スベンベルグ」山「エスツル」山ヲ連繫スル山脈ヲ趁ヒ國境ニ至ル一線ヲ境界トシ其ノ以東海豹島
	マウカ	樺太	本島南端「シラヌシ」岬ヨリ「メノコ」山「ウインザス」山「ベルニセット」山「スベンベルグ」山「エスツル」山ヲ連繫スル山脈ヲ趁ヒ國境ニ至ル一線ヲ境界トシ其ノ以西海馬島

附則

本法ハ明治四十年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

本法施行前從前ノ規定ニ依リ舊管轄廳ニ於テ受理シタル事件ハ現在ノ儘相當ノ裁判所ニ移ルモノトス既ニ爲シタル處分言渡ハ管轄裁判所ノ爲シタル確定裁判ト看做シ既ニ成立シタル勸解ハ管轄裁判所ニ於テ爲シタル和解ト看做ス

樺太地方裁判所管內マウカ區裁判所開廳

（明治四十年四月司法省告示第二十六號）

樺太地方裁判所管內マウカ區裁判所本月一日開廳セリ

第五章 關東州

關東都督府高等法院並關東都督府地方法院及同出張所ノ名稱位置管轄區域（明治三十九年九月關東都督府令第六號）

關東都督府高等法院並關東都督府地方法院及同出張所ノ名稱位置管轄區域左ノ通相定ム

本令ハ發布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

關東都督府高等法院並關東都督府地方法院及同出張所ノ名稱、位置、管轄區域

名稱	位置	管轄區域
關東都督府高等法院	旅順	旅順民政署管轄區域內一圓
關東都督府地方法院	旅順	旅順民政署管轄區域內一圓
關東都督府地方法院大連出張所	大連市街	大連民政署管轄區域內一圓
關東都督府地方法院金州出張所	金州城內	金州民政署管轄區域內一圓

第三編 職員

第一章 通則

第二節 登用

第一款 判事檢事登用試驗

判事檢事登用試驗規則（明治二十四年司法省令第三號）

判事檢事登用試驗規則左ノ通相定ム

判事檢事登用試驗規則

第一章 試驗委員

第一條 判事檢事登用試驗委員ハ委員長一名委員數名ヲ以テ之ヲ組織ス

第二條 判事檢事登用試驗委員長及委員ハ大審院控訴院ノ判事檢事司法省高等官ノ中ヨリ試驗學行每ニ司法大臣之ヲ命ス但必要アルトキハ他ノ官廳高等官ニ試驗委員ヲ囑託スルコトアルヘシ（明治二十九年司法省令第五十二號ヲ以テ全條改正）

試驗委員附屬ノ書記ハ司法屬又ハ裁判書記ノ中ヨリ試驗學行每ニ司法大臣之ヲ命ス

第三條 判事檢事登用試驗委員長ハ委員ヲ監督シ試驗ニ關スル一切ノ事務ヲ總理ス

第四條 判事檢事登用試驗委員長及委員ニハ二百圓以內ノ手當ヲ給シ試驗委員附屬ノ書記ニハ三拾圓以內ノ手當ヲ給ス（同上）

第二章 受驗資格

第五條 判事檢事登用試驗ヲ受クルコトヲ得ル者ハ成年以上ノ男子ニシテ左ニ記載シタル者ニ限ル（明治三十一年司法省令第十六號及同三十八年四月同省々令第十三號ヲ以テ本條改正）

一 官立學校及專門學校令ニ依ル公立又ハ私立ノ學校（別科ヲ除ク）ニ於テ三學年以上法律學科ヲ修メ卒業證書ヲ有スル者

二 司法大臣ニ於テ指定シタル公立又ハ私立ノ學校ニ於テ三學年以上法律學科ヲ修メ卒業證書

二 ヲ有スル者

三 司法大臣ニ於テ相當ト認メタル外國ノ大學校又ハ之ト同等ナル學校ニ於テ法律學科ヲ修メ卒業證書ヲ有スル者

前項第二號ハ明治四十年七月三十一日以後卒業スル者ニハ之ヲ適用セス

第六條 裁判所構成法第六十六條ニ該ル者ハ試驗ヲ受クルコトヲ得ス

第三章 第一回試驗

第七條 第一回試驗ハ司法省ニ於テ之ヲ行フ試驗ノ期日ハ試驗委員長之ヲ定メ官報ヲ以テ公告ス

第八條 試驗志願書ハ其志願書ニ左ノ證書ヲ添ヘ之ヲ試驗委員長ニ差出スヘシ（明治二十六年司法省令第十六號ヲ以テ全條改正）

一 履歷書

二 身分年齡及兵役ニ關スル證明書

三 第五條ニ定メタル要件ノ證明書

試驗志願者ハ試驗手數料トシテ金拾圓ヲ納ムヘシ但其手數料ハ登記印紙ヲ用ヰ之ヲ志願書ニ貼附スヘシ

手數料ハ志願書ヲ取上ケ又ハ試驗ヲ受ケサルトキト雖モ之ヲ還附セス

第九條 試驗ノ二 試驗ヲ分チテ豫備試驗及本試驗トシ尙身體檢査ヲ行フ（明治三十八年四月司法省令第十三號ヲ以テ本條ヲ新置シ同四十二年六月同省令第十二號ヲ以テ尙ホ改正ヲ加フ）

第十條 豫備試驗ハ受驗者ノ本試驗ヲ受クルニ相當ナル普通ノ學識ヲ試驗スルヲ以テ目的トス（明治三十八年司法省令第十三號ヲ以テ本條ヲ新置ス）

第八條ノ四 豫備試驗ハ左ノ科目ニ付キ之ヲ施行ス（同上）

一 論文

二 外國語

外國語ハ英語、佛語及獨語ノ中ニ就テ一種ヲ選ハシム

第八條ノ五 試驗委員豫備試驗ノ答案ヲ調査シタル後本試驗ヲ爲スニ足ルヘキモノト認メタルトキハ本試驗ノ爲メ志願者ヲ呼出スヘシ（同上）

第八條ノ六 豫備試驗ノ方法ハ試驗委員長之ヲ定ム（同上）

第九條 本試驗ハ受驗者ノ專門ノ學識ヲ試驗スルヲ以テ目的トシ筆記口述ノ二樣トス（同上法令ヲ以テ本條ヲ改正ス）

第十條 筆記試驗ハ憲法民法商法刑法民事訴訟法刑事訴訟法行政法國際公法國際私法ノ各科目ニ就キ之ヲ施行ス（明治二十九年司法省令第五十二號ヲ以テ本條改正）

第十一條 試驗委員筆記答案ヲ調査シタル後口述試驗ヲ爲スニ足ルヘキモノト認メタルトキハ口述試驗及身體檢査ノ爲メ志願者ヲ呼出スヘシ（明治四十二年司法省令第十二號ヲ以テ全條改正）

第十二條 口述試驗ハ民法商法刑法民事訴訟法刑事訴訟法ノ中少クトモ三科目ニ就キ之ヲ施行ス

第十三條 受驗者ノ及第落第及及第者ノ優劣ハ筆記試驗口述試驗ノ成績ニ對スル委員過半數ノ意見ニ從テ之ヲ決ス

及第落第ニ付テノ意見數相半スルトキハ落第ト看做スヘシ

身體檢査ニ合格セサル者ハ前二項ノ規定ニ拘ラス落第トス（同上法令ニテ本項ヲ新置ス）

第十四條 志願者口述試驗又ハ身體檢査ニ闕席シタルトキハ試驗ハ成立タサルモノトス（同法令

ニテ條中改正)

第十五條　試驗委員長ハ及第者ノ氏名及其試驗ノ成績ヲ司法大臣ニ報告スヘシ

第十六條　帝國大學法律科卒業生ニシテ司法官ノ任用ヲ望ム者ハ第八條ノ規程ヲ準用シ志願書ヲ司法大臣ニ差出スヘシ

第四章　實地修習

第十七條　試補ハ區裁判所及地方裁判所竝其檢事局ニ於テ一名若ハ數名ノ判事又ハ檢事ニ附屬シテ事務ヲ修習スヘシ

第十八條　修習事務直接ノ指揮監督ハ地方裁判所長之ヲ爲ス檢事ノ事務ヲ修習スルトキハ檢事正之ヲ爲ス

裁判所長若ハ檢事正ハ毎年末ニ試補ノ職務上及職務外ノ行狀竝執務ニ關ル成績ノ證明書ヲ作リ控訴院長檢事長ヲ經由シテ之ヲ司法大臣ニ差出スヘシ

第十九條　試補ハ修習目錄ヲ作リ其取扱ヒタル事件ヲ記載スヘシ

此目錄ハ毎月直接指揮監督者ニ差出シ檢閲ヲ受クヘシ

第二十條　試補ノ疾病又ハ兵役履行ノ爲メ修習ヲ缺キタル日數一箇年六箇月間二箇月以内ハ修習日數ニ算入ス(同法令ニテ條中改正)

賜暇其他ノ原因ニ由リ修習ヲ缺キタル日數一箇年六月間一箇月以内亦同シ

第一項第二項ノ場合併起スルトキハ通計シテ二箇月以内ニ非サレハ算入スルコトヲ得ス

第二十一條　試補ノ直接指揮監督者ハ試補職務上ノ義務ヲ怠リ又ハ職務上若ハ職務外ニ於テ其身分ニ適セサル行狀アルトキハ之ヲ諭告スヘシ此場合ニ於テハ指揮監督者ハ諭告ヲ爲シタルコト

ヲ試補ノ履歴ニ記入スヘシ

第二十二條　試補職務上若ハ職務外ノ行狀其職務ヲ執ルニ不適當ナルカ又ハ其修習ノ進歩不十分ニシテ第二回試驗ニ及第ノ見込ナキトキハ直接指揮監督者ハ控訴院長檢事長ヲ經由シテ之ヲ司法大臣ニ報告スヘシ

司法大臣前項ノ報告ヲ受ケタルトキハ試補ヲ免スルコトアルヘシ

第五章　第二回試驗

第二十三條　第二回試驗ハ控訴院ニ於テ之ヲ行フ試驗ノ場所ハ司法大臣之ヲ定メ試驗ノ期日ハ試驗委員長之ヲ定ム

第二十四條　試補第二回試驗ヲ受クルニハ直接指揮監督者ヲ經由シテ志願書ヲ司法大臣ニ差出スヘシ

志願書ニハ修習目錄ト陸海軍ノ現役ヲ終ヘ又ハ之ヲ免セラレタルコトヲ證明スル書面トヲ添フヘシ

第二十五條　司法大臣ハ第二回試驗ヲ受クヘキ試補ノ氏名ヲ試驗委員長ニ通知シ試驗ヲ行ハシム

第二十六條　第二回試驗ハ受驗者ノ實務ニ習熟シタルヤ否ヲ試驗スルヲ以テ主タル目的トシ筆記口述ノ二樣トス

第二十七條　試驗委員ハ試補ニ筆記試驗ノ爲メ二件以上ノ訴訟記錄ヲ附與スヘシ

第二十八條　受驗者ハ附與セラレタル訴訟記錄ニ基キ事實及理由ヲ詳示シタル判決案ヲ答案トシテ差出スヘシ

答案ハ二十日ノ期間内ニ之ヲ差出スヘシ若シ此期間内ニ答案ヲ差出ササルトキハ試驗ハ成立セ

サルモノトス

第二十九條　口述試驗ハ第十條ニ掲ケタル科目ノ中少クトモ三科目ニ就キ之ヲ施行ス（明治二十九年司法省令第五十號ヲ以テ本項改正）

又訴訟記錄ニ就キ問ヲ發シ之ニ答ヘシムヘシ其記錄ハ試驗期日ノ三日前ニ之ヲ附與ス

第三十條　左ノ場合ニ於テハ司法大臣ハ試驗委員長ノ報告ニ因リ試補ヲ免ス

一　第二回試驗ニ及第セサルトキ

二　第二回試驗ノ成立タサルトキ

第三十一條　前條第二ノ場合ニ於テ試補已ムヲ得サル事故アリシコトヲ證明シ試驗委員之ヲ正當ト認メタルトキハ其旨ヲ司法大臣ニ報告スヘシ

司法大臣前項ノ報告ヲ受ケタルトキハ其試補ニ一回ヲ限リ次期ノ試驗マテ引續キ修習ヲ爲サシムルコトアルヘシ

第三十二條　第一回試驗ニ關ル第十一條及第十三條乃至第十五條ノ規程ハ第二回試驗ニモ亦之ヲ適用ス

判事檢事登用試驗科目ニ關スル件

（明治四十二年四月司法省令第三號）

明治四十二年同四十三年ニ施行スヘキ判事檢事登用第一回試驗及辯護士試驗ニ於テハ外國語ノ試驗ハ之ヲ行ハス

判事檢事登用試驗規則第五條ニ依ル私立學校ノ指定

判事檢事登用試驗規則第五條ニ依リ私立學校ヲ指定スルコト左ノ如シ（明治三十五年司法省告示第七十三號、第八十七號及同三十八年同省令第四十九號ヲ以テ本告示中改正ス）

關西法律學校	中央大學
日本法律學校	獨逸學協會學校
早稲田大學	慶應義塾
明治法律學校	法政大學

同上

（明治三十四年七月司法省告示第四十二號）

私立京都法政學校

右判事檢事登用試驗規則第十五條ニ依リ指定ス

第二款　裁判所書記登用試驗

裁判所書記登用試驗規則

（明治二十四年五月司法省令第四號）

裁判所書記登用試驗規則左ノ通相定ム

裁判所書記登用試驗規則

第一章　試驗

第一條　裁判所書記登用試驗ハ文官試驗ニ關ル勅令ノ外本則ノ規程ニ從フ

第二條　試驗ハ各控訴院又ハ地方裁判所ニ於テ之ヲ行フ（三〇年司法省令第二二號ニテ改正）

第三條　試驗委員ハ控訴院判事檢事書記長又ハ其管内地方裁判所ノ判事檢事ノ中ヨリ司法大臣之

ヲ命ス

試驗委員長ハ委員中官等最モ高キ者ヲ以テ之ニ充ツ

第四條　試驗ハ作文筆寫書取算術簿記ノ外民法商法刑法民事訴訟法刑事訴訟法ノ中ニ就キ之ヲ施行ス

第五條　試驗委員長ハ受驗者ノ申立アルトキハ地方裁判所ニ於テ筆記試驗ヲ受ケシムルコトヲ得

此場合ニ於テ試驗問題ノ答案ハ其裁判所ノ官吏監督シテ之ヲ作ラシム

第六條　試驗委員筆記答案ヲ調査シタル後口述試驗ヲ爲スニ足ルヘキモノト認メタルトキハ口述試驗ノ爲メ受驗者ヲ呼出スヘシ

第七條　受驗者口述試驗ニ闕席シタルトキハ試驗ハ成立タサルモノトス

第八條　試驗ニ及第シタル者ニハ試驗委員長及試驗委員ノ連署シタル及第證書ヲ授與ス

第九條　試驗委員長ハ及第者ノ氏名其試驗ノ成績ヲ司法大臣ニ報告スヘシ

第二章　實地修習

第十條　試驗ニ及第シタル者ハ裁判所書記見習ヲ命セラルルコトヲ得

裁判所書記見習ハ區裁判所及地方裁判所竝其檢事局ニ於テ實地修習ヲ爲スヘシ

第十一條　實地修習ノ順序ハ控訴院長檢事長協議シテ之ヲ定ム

第十二條　實地修習ノ指揮監督ハ地方裁判所長若クハ檢事正又ハ區裁判所ノ一人ノ判事若ハ監督判事若ハ檢事之ヲ成ス

指揮監督者ハ修習ノ事務ヲ直接ニ指示スヘキ官吏ヲ定ムヘシ

第十三條　裁判所書記見習職務上ノ義務ヲ怠リ又ハ職務上若ハ職務外ニ於テ其身分ニ適セサル行

狀アルトキハ指揮監督者之ヲ諭告スヘシ

第十四條　裁判所書記見習職務上若ハ職務外ノ行狀其職務ヲ執ルニ不適當ナルカ又ハ其修習ノ進歩不十分ナリト認ムルトキハ指揮監督者ハ控訴院長檢事長ニ之ヲ報告スヘシ

第十五條　指揮監督者ハ裁判所書記見習其指揮監督ニ係ル修習ヲ終リタルトキハ修習ニ關ル證明書ヲ作リ修習ノ成績竝職務上及職務外ノ行狀ヲ記載シテ之ヲ控訴院長檢事長ニ差出スヘシ

若シ行狀ニ就キ諭告シタルコトアルトキハ其旨ヲ證明書ニ附記スヘシ

控訴院長檢事長ハ證明書ニ意見ヲ附シ之ヲ司法大臣ニ差出スヘシ

第十六條　本章ノ規定ハ試驗ヲ經スシテ裁判所書記見習トナリタル者ノ實地修習ニモ亦之ヲ適用ス

裁判所書記登用試驗及第證書雛形

（明治三十一年司法省訓令第二號）

裁判所書記登用試驗及第證書雛形左ノ通相定ム

（雛）

試驗成績優劣ノ順序ニ依ル

第　號　　氏　　名

裁判所書記登用試驗ニ及第シタルコトヲ證ス

年　月　日

裁判所書記登用試驗委員長

官位勳等　氏　名　印

（形）

裁判所書記登用試驗委員　官位勳等　氏名　印
官位勳等　氏名　印
官位勳等　氏名　印

裁判所書記試驗手數料納付ノ件

（明治三十年司法省令第十六號）

裁判所書記試驗手數料ハ「登記」印紙ヲ用ヒ試驗志願書ニ貼附スヘシ但志願書ヲ取下ク又ハ試驗ヲ受ケサルトキト雖モ之ヲ還附セス

第二節　官等給與及定員

判事檢事官等俸給令

（明治三十二年四月勅令第百五十三號）

朕判事檢事官等俸給令ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム（明治三十六年勅令第四百十號、同三十五年同令第九十三號、同三十六年同令第九十五號、同三十八年同令第百十七號及第二百三號、同四十年同令第七十九號、同四十二年同令第百三十二號、同四十三年同令第九十號ヲ以テ本令中ニ改正ヲ加フ）

第一條　判事檢事ノ官等ハ高等官二等乃至八等トシ其ノ年俸ハ別表ニ依ル

第二條　判事檢事ノ各職ニ付ハ員ヲ定ムルコト左ノ如シ

大審院ハ院長一人部長三人判事二十五人ヲ以テ定員トス

大審院檢事局ハ檢事總長一人檢事七人ヲ以テ定員トス

控訴院ハ院長七人部長二十一人判事百十八人ヲ以テ定員トス

控訴院檢事局ハ檢事長七人檢事二十九人ヲ以テ定員トス

地方裁判所ハ所長五十人部長七十人判事二百九十三人ヲ以テ定員トス

地方裁判所檢事局ハ檢事正五十人檢事九十二人ヲ以テ定員トス

區裁判所ハ判事六百五十九人ヲ以テ定員トス

區裁判所檢事局ハ檢事二百三十二人ヲ以テ定員トス

第三條　判事檢事ノ各職ニ付其ノ俸給ヲ定ムルコト左ノ如シ

大審院

長	勅任四級俸
部長	勅任三級俸
判事	奏任三級俸乃至勅任四級俸

大審院檢事局

檢事總長	勅任二級俸
檢事	奏任三級俸乃至勅任三級俸

控訴院

長	東京　勅任二級俸 大阪　勅任二級俸 其ノ他勅任三級俸
部長	奏任四級俸乃至奏任二級俸
判事	奏任七級俸乃至奏任四級俸

控訴院檢事局

檢事長　東京大阪勅任三級俸又ハ勅任二級俸
其ノ他勅任四級俸又ハ勅任三級俸

檢事　奏任七級俸乃至奏任一級俸

地方裁判所

長　東京大阪奏任一級俸乃至勅任四級俸
京都、横濱、神戸、長崎、函館、新潟、仙臺、名古屋、廣島、熊本、福岡、札幌、樺太、奏任三級俸乃至勅任五級俸
其ノ他奏任四級俸乃至奏任一級俸

部長　奏任七級俸乃至奏任三級俸

判事　豫審判事奏任十級俸乃至奏任四級俸
其ノ他奏任十級俸乃至奏任六級俸

地方裁判所檢事局

檢事正　東京大阪奏任一級俸乃至勅任四級俸
京都、横濱、神戸、長崎、函館、新潟、仙臺、名古屋、廣島、熊本、福岡、札幌、樺太、奏任三級俸乃至勅任五級俸
其ノ他奏任四級俸乃至奏任一級俸

檢事　奏任十級俸乃至奏任三級俸

區裁判所

判事　司法大臣ノ指定シタル區裁判所ノ監督判事奏任八級俸乃至奏任四級俸
其ノ他奏任十級俸乃至奏任六級俸

區裁判所檢事局

檢事　司法大臣ノ指定シタル區裁判所ノ上席檢事奏任八級俸乃至奏任四級俸
其ノ他奏任十級俸乃至奏任六級俸

東京及大阪控訴院ノ部長及檢事ハ各一人ヲ限リ勅任ヲ經テ五級俸ヲ給スルコトヲ得

東京及大阪地方裁判所ノ部長及檢事ハ各一人ヲ限リ奏任二級俸ヲ給スルコトヲ得

東京及大阪地方裁判所ノ豫審判事ニハ各一人ヲ限リ奏任三級俸ヲ給スルコトヲ得

東京及大阪區裁判所ノ監督判事及上席檢事ニハ奏任二級俸以下ヲ給スルコトヲ得

司法大臣ノ指定シタル地方裁判所支部ノ豫審判事ニハ奏任五級俸ヲ給スルコトヲ得

前項ノ外、樺太ニ在職スル地方裁判所內區裁判所ノ判事檢事ニハ三級俸迄ヲ給スルコトヲ得

第四條　勅任五級俸以下ノ俸給ヲ受クヘキ地方裁判所長、檢事正又ハ區裁判所監督判事、上席檢事ニシテ其ノ職ノ最高俸給ヲ受ケ五年以上ニ至リ功績アル者ニハ勅任官ニ在リテハ五百圓以內奏任官ニ在リテハ三百圓以內ノ加俸ヲ給スルコトヲ得

第五條　（削除）

第六條　（削除）

第七條　豫備判事及豫備檢事ニハ六百圓以內ノ年俸ヲ給ス

第八條　司法官試補ハ奏任ノ待遇トス

司法官試補ニハ五百圓以內ノ年俸ヲ給スルコトヲ得

第九條　判事檢事各職ノ進級ハ拔擢ヲ以テ之ヲ行フ

第十條　判事檢事ノ裁判所內ニ於ケル席次ハ官等ニ依リ官等同シキ者ハ俸給ノ多寡ニ依リ俸給同

シキ者ハ俸給下賜辭令ノ日附ニ依ル

附則

第十一條 本令施行ノ際別ニ辭令ヲ交付セサル者ハ現ニ受クル俸給額相當ノ俸給ヲ給セラルルモノトス

第十二條 明治二十七年(二月十四日)勅令第十七號判事檢事官等俸給令ハ本令施行ノ日ヨリ廢止ス

別表

判事檢事俸給表

勅任					奏任									
一級	二級	三級	四級	五級	一級	二級	三級	四級	五級	六級	七級	八級	九級	十級
五千圓	四千圓	三千五百圓	三千圓	二千五百圓	二千五百圓	二千二百圓	二千圓	千八百圓	千六百圓	千四百圓	千二百圓	千圓	九百圓	八百圓

本令ニ改正ヲ施セル明治四十二年勅令第九十號ノ附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

本令施行ノ際別ニ辭令書ヲ交付セサル者ハ現ニ受クル俸給額相當ノ俸給ヲ給セラルルモノトス

同上法令ニ依ル地方裁判所支部ノ指定

(明治四十二年五月司法省令第十一號)

判事檢事官等俸給令第三條第六項ニ依リ左ノ地方裁判所支部ヲ指定ス

水戸地方裁判所土浦支部　宇都宮地方裁判所栃木支部
浦和地方裁判所熊谷支部　前橋地方裁判所高崎支部
靜岡地方裁判所濱松支部　長野地方裁判所松本支部
新潟地方裁判所長岡支部　新潟地方裁判所高田支部
京都地方裁判所宮津支部　神戸地方裁判所姫路支部
名古屋地方裁判所岡崎支部　富山地方裁判所高岡支部
廣島地方裁判所尾道支部　山口地方裁判所赤間關支部
岡山地方裁判所津山支部　鳥取地方裁判所米子支部
長崎地方裁判所佐世保支部　福岡地方裁判所久留米支部
福岡地方裁判所小倉支部　大分地方裁判所中津支部
仙臺地方裁判所古川支部　福島地方裁判所若松支部
盛岡地方裁判所磐井支部　秋田地方裁判所横手支部
青森地方裁判所弘前支部　札幌地方裁判所小樽支部

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

同 區裁判所ノ指定

(明治四十二年五月司法省令第九號)

判事檢事官等俸給令第三條第一項ニ依リ左ノ區裁判所ヲ指定ス

東京區裁判所　横濱區裁判所　土浦區裁判所

栃木區裁判所　濱松區裁判所　高田新潟地區裁判所　大阪區裁判所　名古屋區裁判所　廣島區裁判所　赤間關區裁判所　長崎區裁判所　久留米區裁判所　熊本區裁判所　若松區裁判所　弘前區裁判所　小樽區裁判所

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

熊谷區裁判所　松本區裁判所　京都區裁判所　神戸區裁判所　岡崎區裁判所　吳區裁判所　津山區裁判所　佐世保區裁判所　小倉區裁判所　仙臺區裁判所　磐井區裁判所　札幌區裁判所　ウラジミロフカ區裁判所　マウカ區裁判所　高崎區裁判所　長岡區裁判所　宮津區裁判所　姫路區裁判所　高岡區裁判所　尾道區裁判所　米子區裁判所　福岡地方管內區裁判所　中津區裁判所　古川區裁判所　横手區裁判所　旭川區裁判所

島嶼在勤ノ判事檢事裁判所書記及雇員ニ手當給與

（明治三十三年勅令第七十七號）

朕交通至難ノ島嶼ニ設置シタル裁判所及檢事局並區裁判所出張所ニ在勤スル判事、檢事、裁判所書記、雇員ニ手當給與ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

交通至難ノ島嶼ニ設置シタル裁判所、檢事局、區裁判所出張所及監獄ニ在勤スル判事、檢事、裁判所書記、監獄書記、看守長、看守、雇員ニハ別表定ムル所ニ依リ月手當ヲ給スルコトヲ得其ノ場所及給與細則ハ司法大臣之ヲ定ム（明治三十四年勅令第九十一號ヲ以テ令中及別表中ニ改正ヲ加フ）

附則

本法ハ明治三十三年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

別表

判事	檢事	裁判所書記	監獄書記	看守	雇員
十圓以內	十圓以內	六圓以內	六圓以內	五圓以內	五圓以內

同上法令ニ關スル細則

（明治三十三年四月司法省令第十三號）

明治三十三年勅令第七十七號ニ據リ月手當ヲ給與スヘキ場所及給與細則左ノ通リ相定ム

第二條　月手當島嶼在勤給與者細則

第一條　月手當ハ別表ニ據リ左ノ島嶼ニ在勤スルモノニ之ヲ給與ス

千島國　國後島　擇捉島　伊豆國　大島　新島　神津島　三宅島　八丈島　青ケ島　琉球國　宮古島　八重山島　小笠原島　父島　母島

新ニ赴任ノモノハ任所ヘ到達ノ翌日ヨリ支給ス

第三條　前條ノ外手當支給ニ關シテハ各俸給支給ノ例ニ依ル

別表（明治三十四年五月司法省令第八號ヲ以テ本表中裁判所書記ノ次ヘ三欄ヲ追加ス）

判事	檢事	裁判所書記	監獄書記	看守長	看守	雇員
拾圓	拾圓	六圓	六圓	六圓	五圓	五圓

大審院及控訴院書記長官等ノ件

（明治二十七年二月勅令第十八號）

朕裁判所書記長ノ官等ニ關スル件ヲ裁可シ玆ニ之ヲ公布セシム

大審院書記長ノ官等ハ高等官五等以下、控訴院書記長ノ官等ハ高等官六等以下トス

裁判所書記長書記定員及俸給令

（明治二十六年十月勅令第百七十七號）

朕裁判所書記長書記定員及俸給令ヲ裁可シ玆ニ之ヲ公布セシム（明治二十九年勅令第三百三十六號、同三十二年同第八十號、同三十五年同第九十四號、同三十六年同第二百二十六號、同三十八年同第百十八號、同三十九年同第八十五號、同四十年同第八十號及同四十一年同第百三十三號ヲ以テ本令中ニ改正ヲ加フ）

裁判所書記長書記定員及俸給令

第一條　裁判所書記長ハ奏任トス

裁判所書記ハ判任トス

第二條　裁判所書記長及書記ノ各職ニ付人員及俸給ヲ限定スルコト左ノ如シ

大審院

書記長　一人

年俸千二百圓又ハ千圓

裁判所書記　十三人

一級俸乃至八級俸

大審院檢事局

裁判所書記　三人

一級俸乃至八級俸

控訴院

書記長　七人

東京、大阪年俸千圓又ハ九百圓

其他年俸八百圓又ハ七百圓

裁判所書記　七十六人

一級俸乃至九級俸

控訴院檢事局

裁判所書記　十八人

一級俸乃至九級俸

地方裁判所

裁判所書記　五百十一人
三級俸乃至十級俸
地方裁判所檢事局
裁判所書記　百六十人
二級俸乃至十級俸
區裁判所及區裁判所檢事局
裁判所書記　三千九百九十一人
三級俸乃至十級俸又ハ月俸十二圓
前項書記定員ハ其ノ總定員ヲ超過セサル限リ其ノ俸給豫算定額內ニ於テ各裁判所及檢事局ノ間ニ彼是增減スルコトヲ得

附　則

第三條　本令ハ明治二十六年十一月十日ヨリ施行ス
明治二十四年勅令第百三十五號ハ本令施行ノ日ヨリ廢止ス

第三節　懲戒

判事懲戒法（明治二十三年八月法律第六十八號）

朕判事懲戒法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一章　總　則

第一條　凡ソ判事ヲ懲戒スルハ左ノ場合ニ於テ懲戒裁判所ノ裁判ヲ以テスヘシ
第一　職務上ノ義務ニ違背シ又ハ職務ヲ怠リタルトキ
第二　官職上ノ威嚴又ハ信用ヲ失フヘキ所爲アリタルトキ

第二章　懲　罰

第二條　懲罰ハ左ノ如シ
第一　譴責
第二　減俸
第三　轉所
第四　停職
第五　免職

第三條　前條何レノ懲罰ヲ適用スヘキヤ否ハ所犯ノ輕重ニ從ヒ懲戒裁判所之ヲ定ムヘシ
懲戒裁判所ハ懲罰ノ適用ヲ定ムルニ當リ平生ノ行狀ヲ斟酌スルコトヲ得

第四條　減俸ハ一月以上一年以下年俸月割額ノ三分ノ一以內ヲ減ス

第五條　轉所ハ他ノ裁判所若ハ他ノ職ニ轉セシム但シ情狀ニ因リ減俸ヲ併セ科スルコトヲ得

第六條　停職ハ三月以上一年以下ノ職務ノ執行ヲ停止ス
停職中ハ俸給ヲ給セス

第七條　免職ノ言渡ヲ受ケタル者ハ現任ノ官ヲ失ヒ及恩給ヲ受クルノ權ヲ失フ

第三章　懲戒裁判所

第八條　懲戒裁判所ハ各控訴院及大審院ニ之ヲ置ク

第九條　控訴院ニ於ケル懲戒裁判所ハ控訴院長ヲ加ヘ其ノ院ノ判事五人ヲ以テ組立テ院長ヲ以テ長トス

大審院ニ於ケル懲戒裁判所ハ大審院長ヲ加ヘ其ノ院ノ判事七人ヲ以テ組立テ院長ヲ以テ長トス

第十條　控訴院長及大審院長ハ毎年部長ト協議シ前以テ懲戒裁判所ノ判事ヲ定メ並ニ裁判所長判事差支アルトキノ代理順序ヲ定ム

第十一條　懲戒裁判所ハ判事ノ忌避ニ付テハ「治罪法」ノ規定ヲ準用ス

第十二條　控訴院ニ於ケル懲戒裁判所ノ檢事ノ職務ハ檢事長之ヲ行ヒ大審院ニ於ケル懲戒裁判所ノ檢事ノ職務ハ檢事總長之ヲ行フ

第十三條　控訴院ニ於ケル懲戒裁判所長ハ其ノ院ノ裁判所書記ノ中ヨリ懲戒裁判所ノ書記ヲ命シ大審院ニ於ケル懲戒裁判所長ハ其ノ院ノ裁判所書記ノ中ヨリ懲戒裁判所ノ書記ヲ命ス

第十四條　控訴院ニ於ケル懲戒裁判所ハ院長及部長ヲ除ノ外其ノ院ノ判事及其ノ管轄區域內ノ總テノ下級裁判所ノ判事ニ對スル懲戒事件ヲ管轄ス

第十五條　大審院ニ於ケル懲戒裁判所ハ左ノ事件ヲ管轄ス

第一　第一審ニシテ終審トシテ大審院ノ判事、控訴院長及控訴院部長ニ對スル懲戒事件

第二　控訴院ニ於ケル懲戒裁判所ノ裁判ニ對スル抗告及訴訟

第十六條　懲戒裁判所ノ管轄ハ所犯ノ地ニ拘ラス裁判手續開始ノトキ判事ノ奉職スル裁判所ニ依テ定マルモノトス

第四章　裁判手續

第十七條　懲戒裁判所ハ檢事ノ申立ニ依リ又ハ職權ヲ以テ懲戒裁判ヲ開始スヘキヤ否ヲ決定ス但

シ職權ヲ以テスル場合ニ於テハ檢事ノ意見ヲ聽クヘシ

第十八條　檢事ハ裁判手續ノ開始ヲ拒ミタル懲戒裁判所ノ決定ニ對シテハ七日ノ期間內ニ抗告裁判所ニ抗告ヲ爲スコトヲ得

第十九條　抗告裁判所ハ檢事ノ意見ヲ聽キタル後抗告ヲ裁判ス若シ抗告ヲ正當ナリト認メタルトキハ裁判手續開始ノ決定ヲ爲シ管轄懲戒裁判所ヲシテ其ノ後ノ手續ヲ爲サシムヘシ

第二十條　開始決定ニハ懲戒スヘキ所爲及證據ヲ開示スヘシ

第二十一條　開始決定ハ檢事及被告ニ送達スヘシ

第二十二條　懲戒裁判所ニ於テ下調ヲ必要ナリト決定スルトキハ懲戒裁判所長ハ懲戒裁判ヲ開始シタル院ノ判事若ハ管轄區域內ノ地方裁判所ノ判事ニ下調ヲ命スヘシ

第二十三條　下調ノ命ヲ受ケタル判事ハ必要ナル證據ヲ集取スヘシ

受命判事ハ被告ヲ呼出シテ事實ヲ陳述セシムルコトヲ得

被告ハ代理人ヲシテ代理セシムルコトヲ得

證人ハ「治罪法」ノ規程ニ從ヒ之ヲ訊問スヘシ

第二十四條　受命判事ハ證人訊問其ノ他證據集取ヲ他ノ裁判所ノ判事ニ囑託スルコトヲ得

第二十五條　受命判事ハ下調結了ノ後調書及一切ノ證據ヲ懲戒裁判所長ニ差出シ裁判長ハ二十四時內ニ檢事ニ之ヲ送付スヘシ

第二十六條　檢事ハ三日內ニ意見ヲ付シ記錄ヲ懲戒裁判所長ニ還付スヘシ

第二十七條　懲戒裁判所ノ下調ヲ了分ナリト思料スルトキハ口頭辯論ヲ爲スノ決定ヲ爲シ又ハ免斷ノ判決ヲ爲スヘシ

免訴ノ理由ナキモ現時裁判ニ著手スルコトヲ得サルトキハ訴追停止ノ決定ヲ爲スヘシ

第二十八條　前條ノ裁判ハ檢事及被告ニ送達スヘシ

第二十九條　懲戒裁判所長ハ口頭辯論ノ期日ヲ定メ被告ヲ呼出スヘシ

第三十條　辯論ハ之ヲ公行セス

第三十一條　口頭辯論ハ裁判所書記開始決定ヲ朗讀スルヲ以テ始マルモノトス

裁判長ハ先ツ被告ヲ審訊シ以テ證據調ヲ爲シ檢事及被告ヲシテ證據ノ結果ニ付辯論ヲ爲サシメ被告ニ最終ノ發言ヲ許スヘシ

第三十二條　懲戒裁判所ハ被告若ハ檢事ノ申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ更ニ證據ヲ提出セシムルコトヲ適當ナリトスルトキハ之カ爲必要ナル命令ヲ發シ且辯論ヲ他日ニ延期スルコトヲ得

第三十三條　被告ハ他人ヲシテ辯護セシメ又ハ代理人ヲ用ヰルコトヲ得

第三十四條　懲戒裁判所ハ事件ノ辯論既ニ十分ナリトスルトキハ之ヲ終結シ評議判決スヘシ

第三十五條　判決ハ即時ニ之ヲ言渡ス若シ即時ニ之ヲ言渡スコト能ハサルトキハ七日內ニ判決ヲ被告及檢事ニ送達スヘシ

第三十六條　被告又ハ代理人辯論期日ニ出頭セスト雖判決ヲ言渡スコトヲ得

第三十七條　評議及言渡ニ關シテハ裁判所構成法ノ規定ニ從ヒ證據ノ判斷ニ關シテハ「治罪法」ノ規定ニ從フ

第三十八條　被告及檢事ハ十四日ノ期間內ニ控訴申立ヲ爲スコトヲ得但シ其ノ期間ハ判決言渡ヨリ起算ス若シ被告出頭セサルトキハ判決ノ送達アリタルヨリ起算ス

第三十九條　控訴ノ申立ハ判決ヲ受ケタル懲戒裁判所ニ之ヲ爲スヘシ

控訴ハ控訴ノ申立ヲ爲シタルヨリ十四日ノ期間內ニ之ヲ差出スヘシ

第四十條　懲戒裁判所ハ控訴ノ申立及控訴狀ノ謄本ヲ對手人ニ送達スヘシ

第四十一條　懲戒裁判所ハ前條ノ期間經過シタル後其ノ書類ヲ控訴裁判所ニ送付スヘシ

控訴裁判所長ハ口頭辯論ノ期日ヲ定メ被告ヲ呼出スヘシ

第四十二條　控訴裁判所ハ第一審ニ於テ申出テサル證據ヲ提出シタルトキハ之ヲ取調フヘシ若シ第一審ニ於テ訊問シタル證人ノ再訊問ヲ申立テタルトキハ其ノ重要ノ點ニ於テ陳述ヲ異ニシ又ハ新ナル重要ノ事實ヲ證言セントスル推測十分ナルトキニ限リ之ヲ許ス

職權ヲ以テスル訊問ハ何時ニテモ之ヲ爲スコトヲ得

第四十三條　第二審ニ於ケル裁判手續ハ第三十條乃至第三十七條ノ規定ヲ適用ス

第四十四條　控訴ノ理由ナシトスルトキハ判決ヲ以テ之ヲ棄却シ其ノ費用ヲ控訴人ニ負擔セシムヘシ

控訴ヲ理由アリトスルトキハ第一審判決言渡ヲ取消シ控訴裁判所更ニ判決ヲ爲シ且其ノ費用ニ付裁判ヲ爲スヘシ

控訴完結ノ後其ノ記錄ハ第二審ニ於テ爲シタル判決ノ認證アル謄本ト共ニ原裁判所ニ之ヲ還付スヘシ

第四十五條　調書ノ調製期間ノ計算及書類ノ送達ニ付テハ「治罪法」ノ規定ニ從フ

懲戒裁判手續ノ費用ハ刑事裁判費用ニ關ル規程ニ從フ

第四十六條　懲戒裁判所ノ裁判ハ確定ノ後ニ非サレハ之ヲ執行スルコトヲ得ス

第四十七條　懲戒裁判確定シタルトキハ懲戒裁判所長ハ司法大臣ニ事件ノ情況ヲ報告シ且判決ノ

謄本ヲ差出スヘシ

第四十八條　懲戒裁判所減俸罰所若ハ停職ノ裁判ヲ言渡シタルトキハ司法大臣其ノ執行ノ手續ヲ爲ス

第五章　職務停止

第四十九條　判事ハ左ノ場合ニ於テハ當然職務ヲ停止セラルルモノトス

第一　刑事裁判手續ニ於テ拘留セラレタルトキ

第二　刑事裁判ニ依テ官職ノ喪失ニ該ル刑ノ言渡ヲ受ケタルトキ

第三　懲戒裁判ニ依テ免職ノ言渡ヲ受ケタルトキ

第五十條　刑事裁判ニ依テ拘留ノ刑ノ確定裁判ヲ受ケタルトキハ其ノ刑期ノ終ルマテ當然職務ヲ停止セラルルモノトス

第五十一條　懲戒裁判所ハ懲戒事件ノ轉所停職若ハ免職ニ該當スヘモノト思料スルトキハ何時ニテモ職權ヲ以テ又ハ檢事ノ申立ニ因リ懲戒裁判手續結了ニ至ルマテ被告ノ職務ヲ停止スルコトヲ決定スルヲ得但シ職權ヲ以テ決定ヲ爲ストキハ檢事ノ意見ヲ聽クヘシ

刑事裁判手續中何レノ場合ニ於テモ懲戒裁判所ハ其ノ手續結了ニ至ルマテ被告ノ職務ヲ停止スルコトヲ決定スルヲ得

第五十二條　懲戒裁判所ノ決定ニ因リ又ハ當然職務ヲ停止セラレタル後其ノ判事ノ爲シタル職務上ノ行爲ハ無効トス

第五十三條　被告ハ職務停止ノ決定ニ對シ上訴ヲ爲スコトヲ得ス

第六章　懲戒裁判手續ト刑事裁判手續トノ關係

第五十四條　刑事裁判手續中ハ同事件ニ付被告ニ對シ懲戒裁判手續ヲ開始スルコトヲ得ス

懲戒裁判所ニ於テ判決ノ言渡前同事件ニ付被告ニ對シ刑事訴追ノ始マリタルトキハ其ノ事件ノ判決ヲ終ルマテ懲戒裁判手續ヲ停止スヘシ

第五十五條　刑事裁判ニ依テ法律ニ觸レサルニ因リ免訴又ハ無罪ノ言渡ヲ受ケタルトキト雖同一ノ所爲ニ付懲戒裁判手續ニ於テ仍ホ訴追スルヲ妨ケス

刑事裁判ニ依テ官職ノ喪失ヲ起ササル刑ノ言渡ヲ受ケタルトキ懲戒裁判手續ニ於テ仍ホ訴追スルコトヲ得

第七章　補則

第五十六條　懲戒スヘキ所爲ハ本法實施前ニ關スルモノト雖本法ニ從ヒ之ヲ訴追ス

第五十七條　此法律ハ明治二十三年十一月一日ヨリ施行ス

第四節　雜則

地方裁判所支部ノ判事檢事及區裁判所監督判事補職ノ件

（明治二十四年八月司法省訓令第五號）

地方裁判所支部ノ事務ヲ取扱フヘキ判事檢事及區裁判所監督判事補職等ノ件ニ付左ノ通リ相定ム

一　地方裁判所ノ支部ヲ置ク區裁判所ノ判事又ハ檢事ヲ地方裁判所判事又ハ檢事ニ兼補シタル處自今地方裁判所判事又ハ檢事ニ兼補スルヲ止メ區裁判所ノ判事又ハ檢事ハ當然地方裁判所支部

ノ事務ヲ取扱フベキモノトス

二 區裁判所監督判事モ亦補職スルモノヲ止メ自今特ニ之ヲ命スルモノトス

但現在ノ監督判事ハ別ニ辭令書ヲ用ヒス其區裁判所判事ニ補シ其職ノ監督ヲ命シタルモノトス

外國政府ニ聘用セラレタル判事ニ關スル件

（明治三十九年十月勅令第二百八十一號）

朕外國政府ニ聘用セラレタル判事檢事ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

在職判事檢事ニシテ許可ヲ受ケ外國政府ニ聘用セラレタル者ハ聘用中及其ノ聘用ノ終リタル後關員ナキ間之ヲ定員外トス

前項ノ判事檢事ニ對シ必要アルトキハ特ニ在職者ニ關スル規定ヲ適用スルコトヲ得

前二項ノ場合ニ於テハ俸給ハ之ヲ停止シ旅費ハ之ヲ支給セス

判事試補ニ書記ノ事務ヲ取扱ハシムル件

（明治二十三年三月司法省訓令第百五十八號）

「始審裁判所長」又ハ「治安裁判所」上席判事ハ其廳詰判事試補ニ書記ノ事務ヲ取扱ハシムルコト事務練習上必要ナリト認ムルトキハ之ヲシテ一時書記ノ事務ヲ取扱ハシムルコトヲ得

第二章 臺灣ニ於ケル特則

臺灣總督府法院職員官等俸給及定員

（明治四十三年三月勅令第百六十七號）

朕臺灣總督府法院職員官等俸給及定員令改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム御名御璽

臺灣總督府法院職員官等俸給及定員令（明治二十三年勅令第二百六十號）ニ左ノ條ヲ追加シ第二條ノ二ヲ第二條ノ三トシ第二條ノ二ヲ左ノ如シ

第一條 臺灣總督府法院判官檢察官ノ各職ニ付其ノ專任定員官等及俸給ヲ定ムルコト左ノ如シ

覆審法院長 一人 奏任 一級俸乃至三級俸

覆審法院部長 一人 奏任 一級俸乃至六級俸

覆審法院判官 五人 奏任 三級俸乃至八級俸

覆審法院檢察官長 一人 勅任 一級俸

覆審法院檢察官四十二人以内 奏任 一級俸乃至五級俸

地方法院長 三人 奏任 一級俸乃至六級俸

地方法院判官 十四人 奏任 五級俸以下（但シ内二人ヲ三級俸又ハ四級俸ト爲スコトヲ得）

地方法院檢察官長 三人 奏任 二級俸乃至七級俸

地方法院檢察官 五人 奏任 五級俸以下（但シ内一人ヲ三級俸又ハ四級俸ト爲スコトヲ得）

第二條 書記長、書記、通譯ノ定員ハ左ノ如シ

書記長 一人

書記 百六十四人

通譯 專任 百六十九人

第三條 判官檢察官ノ法院内ニ於ケル席次ハ官等ニ依リ、官等相等シキ者ハ俸給ノ多寡ニ依リ、俸給相等シキ者ハ俸給下賜辭令ノ日附ニ依ル

附則

本令ハ明治四十三年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

臺灣總督府覆審法院書記長特別任用ノ件

（明治四十一年四月勅令第百五號）

朕樞密顧問ノ諮詢ヲ經テ臺灣總督府覆審法院書記長特別任用ノ件ヲ裁可シ玆ニ之ヲ公布セシム

臺灣總督府覆審法院書記長ハ臺灣總督府法院書記又ハ司法事務ニ從事スル臺灣總督府屬ニシテ五年以上其ノ職ニ在リ現ニ判任官三級俸以上ノ俸給ヲ受クル者ヨリ文官高等試驗委員ノ銓衡ヲ經テ之ヲ任用スルコトヲ得

附則

本令ハ公布ノ日（明治四十一年四月二十七日）ヨリ之ヲ施行ス

臺灣總督府法院判官檢察官及書記ノ服制ニ關スル件

（明治三十三年七月勅令第三百二十四號）

朕臺灣總督府法院判官檢察官及書記ノ服制ニ關スル件ヲ裁可シ玆ニ之ヲ公布セシム

第一條　臺灣總督府法院判官檢察官及書記ハ公開シタル法廷ニ於テ一定ノ制服ヲ著ス

第二條　判官檢察官及書記ノ制服ハ明治二十三年勅令第二百六十號ニ依ル但シ覆審法院判官及檢察官ハ控訴院判事及檢事ノ制服地方法院判官及檢察官ハ地方裁判所區裁判所判事及檢事ノ制服ヲ著スヘシ

附則

本令ノ施行期日ハ臺灣總督之ヲ定ム（明治三十二年七月臺灣總督府令第六十號ヲ以テ本令ノ施行期日ハ同年十一月一日ト定ム）

臺灣總督府法院判官懲戒令

（明治三十一年七月律令第十八號）

臺灣總督府評議會ノ議決ヲ經タル臺灣總督府法院判官懲戒令勅裁ヲ得テ玆ニ之ヲ發布ス

臺灣總督府法院判官懲戒令

第一條　臺灣總督府法院判官ニシテ職務上ノ義務ニ違背シタルトキ又ハ官職上ノ威信ヲ失フヘキ所爲アリタルトキハ之ヲ懲戒ス

懲戒ハ懲戒委員會ノ決議ヲ以テスヘシ

第二條　懲罰ハ左ノ如シ

一　譴責

二　罰俸

三　免官

第三條　懲戒委員會ハ各所犯ノ輕重ニ從ヒ前條中何レノ懲罰ヲ適用スヘキヤヲ定ム

懲戒委員會懲罰ノ適用ヲ定メタル日ヨリ平生ノ行狀ヲ斟酌スルヲ得ル

第四條　罰俸ハ一月以上一年以下俸給月額三分ノ一以內ヲ減スル率ヲ以テ之ヲ減ス

第五條　懲戒委員ハ委員長一人委員四人及豫備委員三人トス臺灣總督府法院判官ノ中ニ就キ毎年

懲戒委員ハ臺灣總督之ヲ命ス

委員長の覆審法院長ヲ以テ之ニ充ツ

第五條　委員長事故アルトキハ委員中上席判官之ヲ代理ス三人ヲ滿タサル場合ハ中ニ豫備委員ヲ補充ス豫備委員ハ委員中事故アルトキ代理委員ヲ其代理ノ順序ハ委員長豫メ之ヲ定ム

第六條　懲戒委員長ハ臺灣總督府法院書記ヲ中台湾懲戒委員會書記ヲ命ス

第七條　懲戒委員ノ忌避回避ニ付テハ刑事裁判ニ關スル規程ヲ準用ス

第八條　懲戒委員會ハ臺灣總督ノ申立ニ依リ之ヲ開始ス但覆審法院檢察官長ノ意見ヲ聽クヘシ

第九條　懲戒委員會ニ於テ下調ヲ必要ナリト決定スルトキハ委員長ハ委員ノ一人又ハ數人ニ下調ヲ命スヘシ

第十條　下調ノ命ヲ受ケタル委員ハ必要ナル證據ヲ集取シ且被告ヲ呼出シテ事實ヲ陳述セシムルコトヲ得

委員會ハ其選ヲ以テ之ヲ定ム

證人ハ刑事裁判ニ關スル手續ニ依リ之ヲ訊問スヘシ

第十一條　下調ノ命ヲ受ケタル委員ハ證據ノ集取ヲ便宜地ノ法院判官ニ囑託スルコトヲ得

第十二條　懲戒委員會ハ懲戒スヘキ理由ナシト認ムルトキハ直ニ免訴ノ決定ヲ爲スヘシ

第十三條　懲戒委員會ハ懲戒スヘキ理由アリト認ムルトキハ懲戒スヘキ所爲及證據ヲ被告ニ示シ期日ヲ定メテ之ニ對スル辯明書ヲ差出サシムヘシ

前項ニ依リ被告辯明書ヲ差出シタルトキハ懲戒委員會ハ一件書類ニ就キ評議決定スヘシ

第十四條　決定書ハ出日以内ニ被告ニ送達スヘシ

第十五條　懲戒委員會ノ決定アリタルトキハ委員長ハ決定書ノ謄本ヲ添ヘテ臺灣總督ニ報告スヘシ

臺灣總督ハ前項ノ報告ニ依リ其執行ノ手續ヲ爲スヘシ

第十六條　職務停止及懲戒裁判手續刑事裁判手續ノ規定ヲ準用スヘシ

第十七條　懲戒手續ノ費用ニ付テハ刑事裁判ノ費用ニ關スル規定ヲ準用ス

第十八條　本令施行ノ爲必要ナル規程ハ臺灣總督之ヲ定ム

第一節附則

第十九條　本令ハ發布ノ日ヨリ施行ス

第二十條　本令ハ本令施行前ニ於ケル所爲ニ適用ス

第三章　韓國ニ於ケル特則

第一節　任用分限

統監府判事及檢事ノ任用ニ關スル件

（明治四十二年十月勅令第二百五十五號）

朕樞密顧問ノ諮詢ヲ經テ統監府判事及檢事ノ任用ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

統監府判事及統監府檢事ハ裁判所構成法ニ依リ判事檢事又ハ司法官試補タル資格ヲ有スル者ノ中ヨリ之ヲ任用ス

統監府判事ノ職ニ在ル者ハ統監府檢事ノ職ニ在ル者ハ統監府判事ニ任用スルコトヲ得（明治四十三年三月勅令第百七十七號ヲ以テ本項ヲ追加ス）

附則

本令ハ明治四十三年十一月一日ヨリ之ヲ施行ス

本令施行ノ際韓國ノ判事又ハ檢事ノ職ニ在ル者ハ本令施行ノ際ニ限リ特ニ之ヲ統監府判事又ハ統監府檢事ニ任用スルコトヲ得

三年以上裁判所、統監府法務院若ハ統監府裁判所ノ書記ノ職ニ在リ法律事務ニ從事シタル者ハ本令施行後二年間ヲ限リ統監ノ定ムル所ニ依リ試驗ヲ經テ特ニ之ヲ統監府判事又ハ統監府檢事ニ任用スルコトヲ得

前項ノ在職年數ハ裁判所、統監府法務院、統監府裁判所及理事廳ニ在職シタル期間ヲ通算ス

統監府判事統監府檢事特別任用試驗規則

（明治四十三年四月統監府令第十五號）

統監府判事、統監府檢事特別任用試驗規則ハ明治四十二年勅令第二百五十五號附則第三項ニ統監府判事、統監府檢事特別任用試驗規則ノ通改ム

第一條　統監府判事、統監府檢事特別任用試驗ハ掲ケタル資格アル者ニ就キ之ヲ行フ

第二條　左ノ各號ノ一ニ該當スル者ハ試驗ヲ受クルコトヲ得ス

一　懲役、禁錮又ハ舊刑法ノ禁錮以上ノ刑ニ處セラレタル者

二　破産者ハ家資分散ノ宣告ヲ受ケ復權セサル者

第三條　統監府判事、統監府檢事特別任用試驗ハ統監府判事、統監府檢事特別任用試驗委員之ヲ行フ

第四條　試驗ノ期日及場所ハ統監府司法廳長官之ヲ定メ官報及統監府公報ヲ以テ之ヲ公告ス

第五條　試驗委員ハ十人以内トシ中一人ヲ委員長トス

第六條　委員長及委員ハ統監府司法廳高等官及統監府判事又ハ統監府檢事ノ中ヨリ試驗學行毎ニ統監之ヲ命ス

試驗委員附屬ノ書記ハ統監府司法廳屬又ハ統監府裁判所書記ノ中ヨリ試驗學行毎ニ統監府司法廳長官之ヲ命ス

第七條　委員長ハ試驗ニ關スル一切ノ事務ヲ管理ス

第八條　試驗志願者ハ志願書ニ左ノ書面ヲ添ヘ之ヲ試驗委員長ニ差出スヘシ

一　履歷書

二　受驗資格ニ關スル證明書

第九條　試驗志願者ハ手數料トシテ金十圓ヲ納ムヘシ但シ其ノ手數料ハ收入印紙ヲ用ヰ之ヲ志願書ニ貼付スヘシ

手數料ハ志願書ヲ取下ケ又ハ試驗ヲ受ケサルトキト雖之ヲ還付セス

第十條　試驗ヲ受ケムトスル者ニハ先ツ身體檢査ヲ行ヒ其ノ合格者ニ就キ學術試驗ヲ行フ

第十一條　學術試驗ハ筆記、口述ノ二種トス

口述試驗ハ筆記試驗ニ合格シタル者ニ限リ之ヲ行フ

第十二條　筆記試驗ハ憲法、民法、商法、刑法、民事訴訟法、刑事訴訟法、行政法及國際法ノ各科目ニ就キ之ヲ行フ

日進試驗ハ前項ノ科目中三科目以上ニ就キ之ヲ行フ

第十三條　試驗合格者ノ氏名ハ官報及統監府公報ニ以テ之ヲ公告スルハ特ニ之ヲ統監府判事

第十四條　委員長ハ試驗ハ結果ヲ統監ニ報告スベシ

第十五條　委員長、委員及附屬ノ書記ニハ手當ヲ給ス

第十六條　附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

統監府裁判所及統監府監獄ノ職員タル韓國人ノ任用ニ關スル件

（明治四十二年十月勅令第二百五十九號）

分限及給與ニ關スル件

陛樞密顧問ノ諮詢ヲ經テ統監府裁判所及統監府監獄ノ職員タル韓國人ノ任用分限及給與ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條　帝國大學、專門學校又ハ韓國ノ官立學校ニ於テ三學年以上法律學科ヲ修メタル韓國人ハ文官高等試驗委員ノ銓衡ヲ經テ特ニ之ヲ統監府判事又ハ統監府檢事ニ任用スルコトヲ得

統監府判事ハ職ニ在ル者ハ統監府檢事ニ、統監府檢事ノ職ニ在ル者ハ統監府判事ニ任用スルコトヲ得（明治四十三年三月勅令第百七十八號ヲ以テ本項ヲ追加ス）

第二條　韓國ノ法規ニ依リ一級ノ判任文官タル資格ヲ有スル韓國人ハ文官普通試驗委員ノ銓衡ヲ經テ特ニ之ヲ統監府裁判所書記又ハ統監府看守長ニ任用スルコトヲ得

第三條　韓國人タル官吏ニ關シテハ文官分限令及滿韓在勤文官加俸令ヲ適用セス

第四條　韓國人タル官吏ニ對スル給與ハ別表ニ依ル（明治四十三年三月勅令第百六十四號ヲ以テ本項ヲ追加シ同年四月一日ヨリ施行ス）

第五條　韓國人タル官吏ノ旅費ニ關スル規則ハ統監之ヲ定ム

附則

本令ハ明治四十二年十一月一日ヨリ之ヲ施行ス

本令施行ノ際韓國法部ノ勅任官又ハ奏任官タル韓國人ハ本令施行ノ際ニ限リ特ニ之ヲ統監府判事又ハ統監府檢事ニ任用スルコトヲ得

（別表）

高等官年俸表

一級	二級	三級	四級	五級	六級	七級	八級	九級	十級	十一級
三千圓	千八百圓	千六百圓	千四百圓	千二百圓	千圓	九百圓	八百圓	七百圓	六百圓	五百圓

判任官月俸表

一級	二級	三級	四級	五級	六級	七級	八級	九級	十級
五十圓	四十五圓	四十圓	三十五圓	三十圓	二十五圓	二十圓	十五圓	十二圓	十圓

統監府裁判所書記長及統監府裁判所書記特別任用令

朕樞密顧問ノ諮詢ヲ經テ統監府裁判所書記長及統監府裁判所書記特別任用令ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

（明治四十二年十月勅令第二百五十七號）

統監府裁判所書記長及統監府裁判所書記特別任用令

第一條　統監府裁判所、統監府法務院若ハ統監府裁判所ニ於テ書記ノ職ニ在リタル者又ハ五年以上理事廳屬ノ職ニ在リ法律事務ニ從事シタル者ニシテ現ニ判任官三級俸以上ノ俸給ヲ受クル者ノ中ヨリ文官高等試驗委員ノ銓衡ヲ經テ之ヲ任用スルコトヲ得

前項ノ在職年數ハ裁判所、統監府法務院、統監府裁判所及理事廳ニ在職シタル期間ヲ通算ス

第二條　統監府裁判所書記ハ現ニ裁判所書記ノ職ニ在ル者ノ中ヨリ之ヲ任用スルコトヲ得

附則

本令ハ明治四十二年十月一日ヨリ之ヲ施行ス

本令施行ノ際韓國ノ裁判所書記長ノ職ニ在ル者ハ之ヲ統監府裁判所書記長ニ、韓國ノ裁判所書記又ハ法部主事ノ職ニ在ル者ハ之ヲ統監府裁判所書記ニ本令施行ノ際ニ限リ之ヲ任用スルコトヲ得

本令ハ明治四十二年十月一日ヨリ之ヲ施行ス

第二節　官等給與

統監府判事及統監府檢事官等給與令

（明治四十二年十月勅令第二百四十七號）

朕統監府判事及統監府檢事官等給與令ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

統監府判事及統監府檢事官等給與令

第一條　（明治四十三年三月勅令第百六十三號ヲ以テ本條ヲ削ル）

第二條　判事及檢事ノ官等及本俸ハ左ノ區分ニ依ル（同上法令ヲ以テ令中改正）

高等法院	長	勅任
		一級俸
	部長	勅任
		二級俸又ハ三級俸
	判事	奏任
		一級俸乃至五級俸
高等法院檢事局	檢事長	勅任
		一級俸
	檢事	奏任
		一級俸乃至五級俸
控訴院	長	勅任
		二級俸又ハ三級俸
	部長	奏任
		一級俸乃至六級俸
	判事	奏任
		三級俸乃至九級俸
控訴院檢事局	檢事長	勅任
		三級俸又ハ三級俸
	檢事	奏任
		一級俸乃至九級俸
地方裁判所	長	奏任
		一級俸乃至五級俸

部長　奏任　三級俸乃至九級俸
判事　奏任　三級俸乃至十級俸
地方裁判所檢事局
檢事正　奏任　二級俸乃至五級俸
檢事　奏任　四級俸乃至十級俸
區裁判所
判事　奏任　三級俸乃至十級俸
檢事　奏任　三級俸乃至十級俸

高等法院判事ノ內二人ハ勅任ト爲スコトヲ得其ノ本俸ハ三級俸トス
高等法院檢事ノ內一人ハ勅任ト爲スコトヲ得其ノ本俸ハ二級俸又ハ三級俸トス
京城控訴院ノ部長及檢事ハ各一人ヲ限リ勅任ト爲スコトヲ得其ノ本俸ハ三級俸トス
地方裁判所ノ內三所ヲ限リ其ノ所長及檢事正ハ勅任ト爲スコトヲ得其ノ本俸ハ三級俸トス
第三條　高等法院長、高等法院檢事長、控訴院長及控訴院檢事長ハ統監上奏シテ之ヲ補シ其ノ他ノ各職ハ統監之ヲ補ス

第四條　統監府及理事廳職員給與令第七條ノ規定ハ統監府判事及統監府檢事ニ之ヲ準用ス
第二條　附則
本令ハ明治四十二年十一月一日ヨリ之ヲ施行ス

（別表）

勅任

奏任

一級	二級	三級	四級	五級	六級	七級	八級	九級	十級	十一級	十二級
四千圓	三千五百圓	三千圓	二千六百圓	二千四百圓	二千二百圓	二千圓	千八百圓	千六百圓	千四百圓	千二百圓	千圓

統監府裁判所判事檢事ニ高等官俸給令第七條ノ規定ヲ適用セサルノ件

（明治四十二年十月勅令第二百五十二號）

朕樞密顧問ノ諮詢ヲ經テ統監府裁判所判事檢事ニ高等官官等俸給令第七條ノ規定ヲ適用セサルノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

統監府裁判所令施行ノ際韓國ノ裁判所判事檢事又ハ法部ノ勅任官若ハ奏任官ノ職ニ在ル者ヨリ統監府判事及ハ統監府檢事ニ任セラルル者ニ付テハ高等官官等俸給令第七條ノ規定ニ依ラサルコトヲ得

附則　本令ハ明治四十二年十一月一日ヨリ之ヲ施行ス

統監府裁判所書記長同通譯官同書記同通譯生及統監

府監獄職員官等給與令

（明治四十二年十月勅令第二百四十八號）

朕統監府裁判所書記長、統監府裁判所通譯官、統監府裁判所書記、統監府裁判所通譯生及統監府監獄職員官等給與令ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

統監府裁判所書記長、統監府裁判所通譯官、統監府裁判所書記、統監府裁判所通譯生及統監府監獄職員官等給與令

第一條　統監府典獄、統監府裁判所書記長及統監府裁判所通譯官奏任官等ハ高等官五等乃至八等トシ其ノ本俸ハ統監府及理事廳職員給與令中奏任文官本俸第三號表ニ依ル但シ控訴院書記長ノ官等ハ高等官六等乃至八等トス

第二條　統監府及理事廳職員給與令第七條ノ規定ハ統監府裁判所書記長、統監府裁判所通譯官、統監府裁判所書記、統監府裁判所通譯生及統監府監獄職員ニ之ヲ準用ス

附則

本令ハ明治四十二年十一月一日ヨリ之ヲ施行ス

統監府司法廳同裁判所及同監獄ノ職員手當ニ關スル件

（明治四十二年十月勅令第二百五十號）

朕統監府司法廳統監府裁判所及統監府監獄ノ職員手當ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

統監府裁判所令施行ノ際韓國ノ法部、裁判所又ハ監獄ノ職員タル者ヲ統監府司法廳、統監府裁判所

又ハ統監府監獄ノ職員ニ任用シタル場合ニ於テ其ノ受クヘキ本俸及加俸ノ總額カ任用ノ際韓國政府ヨリ受ケタル本俸及手當ノ總額ヨリ少キモノニ付テハ明治四十五年三月限リ手當ヲ以テ其ノ差額ヲ支給スルコトヲ得

附則

本令ハ明治四十二年十一月一日ヨリ之ヲ施行ス

第四章　關東州ニ於ケル特則

關東都督府法院判官及檢察官任用令

（明治三十九年七月勅令第二百一號）

朕樞密顧問ニ諮詢ヲ經テ關東都督府法院判官及檢察官任用令ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

關東都督府法院判官及檢察官ハ裁判所構成法ニ依リ判事又ハ檢事タル資格ヲ有スル者ノ中ヨリ之ヲ任用ス

附則

本令ハ明治三十九年九月一日ヨリ之ヲ施行ス

第四編　執達吏

（明治二十三年十一月一日法律第九號）

第一章　通則

執達吏規則

（明治二十三年七月法律第五十一號）

朕執達吏規則ヲ裁可シ之ヲ公布セシム此法律ハ明治二十三年十一月一日ヨリ施行スヘキコトヲ命ス

執達吏規則

第一條　執達吏ハ區裁判所ニ屬シ法律ニ從ヒ訴訟ニ關スル書類ヲ送達シ及裁判ヲ執行スルモノトス

第二條　執達吏ハ當事者ヲ委任ニ依リ左ノ事務ヲ取扱フコトヲ得

第一　書類物品ノ送達ヲ爲スコト

第二　罰金料科過料ヲ徵收シ及沒收物品ヲ取上ケ若クハ賣却スルコト

第三　令狀ノ執行ヲ爲スコト

第四條　執達吏ハ所屬區裁判所ノ一人ノ判事若クハ監督判事ノ監督ヲ受ク

他ノ判事又ハ檢事ニシテ職務上事務ヲ命シタルトキハ其事務ニ限リ執達吏ニ對シ監督權ヲ有ス

第五條　執達吏ハ所屬區裁判所所在地ニ住居ヲ定ムヘシ但地方裁判所長ノ許可ヲ得タルトキハ其區裁判所管轄內ニ限リ他ノ地ニ住居ヲ定ムルコトヲ得

第六條　執達吏ハ所屬區裁判所所在地ニ役場ヲ設クヘシ

第七條　一區裁判所ニ數名ノ執達吏アルトキハ裁判所及檢事局ノ命令ニ依ル事務ト裁判所書記ヲ經テ委任スヘキ事務トヲ各執達吏ニ分配スヘシ此分配ハ成ルヘク土地ノ區域ニ從フヘシ

事務分配ハ每司法年度終ニ於テ區裁判所ノ一人ノ判事若クハ監督判事前以テ之ヲ定ム

執達吏ノ爲シタル事務ハ事務分配ニ其事務他ノ執達吏ニ屬シタリトノ事實ノミニ因リ其效力ヲ失フコトナシ

第八條　執達吏ハ左ノ場合ニ於テハ其職務ノ施行ヨリ除斥セラルヘシ

第一　自己又ハ其婦カ當事者若クハ被害者タル場合ニ於テハ其一方若クハ雙方又ハ被害者ト共同權利者共同義務者若クハ償還義務者タルノ關係ヲ有スルトキ

第二　自己又ハ其婦カ當事者ノ一方若クハ雙方又ハ被害者又ハ其配偶者ト親族ナルトキ但婚姻ニ付テハ婚姻ノ解除シタルトキト雖亦同シ

第三　自己カ同一ノ事件ニ付證人若クハ鑑定人ト爲リテ訊問ヲ受クルトキ又ハ法律上代理人ト爲ルノ權利ヲ有スルトキ若クハ之ヲ有シタルトキ

第九條　執達吏ハ民事訴訟ニ付テ其婦又ハ自己若クハ其婦ノ親族ヲ爲ニスル訴訟代理人及補佐人ト爲シテ法廷ニ出ルコトヲ得但婚姻ニ付テハ婚姻ノ解除シタルトキト雖亦同シ

第十條　執達吏ハ其職務ヲ行フヘキ命令若クハ委任ヲ受ケタル場合ノ外自己ノ責任ヲ以テ左ニ掲クル者ニ其ヲ得ス

第十一條　執達吏ハ特別ノ命令若クハ委任ヲ受ケタル場合ノ外自己ノ責任ヲ以テ左ニ掲クル者ニ

第臨時其職務ヲ執行ヲ委任スルヿヲ得[illegible]

第一 執達吏ノ登用試驗ニ及第シタル者

第二 執達吏ノ職務修習者ニシテ三箇月以上其職務ヲ修習シタル者

第三 裁判所書記ノ登用試驗ニ及第シタル者

第四 裁判所ノ一人ノ判事若クハ監督判事ニ於テ臨時執達吏ノ職務ヲ行フニ適當ト認メタル者

第十二條 執達吏正當ノ理由アリテ其職務ヲ行フコトヲ得サルトキ又ハ之ヲ委任スルコトヲ得サルトキ命令ヲ爲シタル裁判所及檢事局又ハ委任ヲ爲シタル本人ニ通知スルカト能ハサルトキ又ハ急速ノ處分ヲ要スルトキハ其旨ヲ區裁判所ノ一人ノ判事若クハ監督判事ハ申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ第十一條ニ掲クル者ニ執達吏ノ職務ヲ行ハシムルコトヲ得

第十三條 前條ノ場合其他執達吏差支アルトキハ區裁判所ノ一人ノ判事若クハ監督判事ハ申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ第十一條ニ掲クル者ニ執達吏ノ職務ヲ行ハシムルコトヲ得

第十四條 執達吏ハ一定ノ制服ヲ著スヘシ

臨時職務執行ノ委任ヲ受ケタル者ハ區裁判所ヨリ交付スヘキ鑑札ヲ携帶スヘシ

第十五條 執達吏ハ裁判所書記ヲ經タルトキ若ハ其ヲ問ハス委任ヲ受ケ職務ヲ行フニ付テハ定規ノ手數料ヲ受ケ及立替金ノ辨濟ヲ受ク[illegible]

執達吏ハ定規ノ手數料ヲ增減シ又ハ手數料及立替金ノ外報酬ヲ受クルコトヲ得ス

第十六條 執達吏第三條ニ掲クル職務ヲ行フニ付テハ立替金ノ外手數料ヲ受クルコトヲ得ス但罰金ハ科料ハ追徵金及公訴ニ關スル訴訟費用ノ裁判ノ執行ニ付テハ前條ノ例ニ依ル（明治四十二年三月法律第三號ヲ以テ但書ヲ追加ス）

第十七條 執達吏第十一條ノ場合ニ於テ臨時職務執行ノ委任ヲ爲シタルトキハ其委任ヲ受ケタル者ニ報酬トシテ手數料十分ノ三以上ヲ支給スヘシ

第十八條 第十三條ノ場合ニ於テ臨時執達吏ノ職務ヲ行ヒタル者ハ其職務ニ付定メタル手數料ヲ受ケ及立替金ノ辨濟ヲ受ク[illegible]

第十九條 執達吏一年間ニ收入セシ手數料百八十圓ニ充タサルトキハ國庫ヨリ其不足額ヲ支給ス

第二十條 執達吏死亡シタルトキ又ハ停職免職若クハ拘留セラレタルトキハ區裁判所ノ一人ノ判事若クハ監督判事ハ左ノ處分ヲ爲スヘシ

第一 官印帳簿其他職務ニ關スル書類ヲ區裁判所ニ差出サシムルコト

第二 執達吏職務上保管シタル物品及書類ヲ保全ニ必要ノ手續ヲ爲スコト

第三 第十一條ノ執達吏ハ官吏恩給法ニ照シ恩給ヲ受ク其恩給年額ハ第十九條ニ定メタル金額ヲ俸給額ト看做シテ算定スヘシ

第二十二條 執達吏ハ此規則ニ依ルノ外總テ一般官吏ノ例ニ依ル

附則 [illegible]

第二十三條 執達吏ヲ置カサル間ハ區裁判所書記執達吏ノ職務ヲ行フ此場合ニ於テハ自己ノ責任ヲ以テ第十一條ニ掲クル者及ヒ自己ノ適當ト思量スル者ニ臨時其職務ノ執行ヲ委任スルヿヲ得

第裁判所書記前項ノ委任ヲ爲シタルトキハ委任ヲ受ケタル者ニ執達吏ノ職務ニ付定メタル手數料[illegible]十分ノ七以上ヲ支給スヘシ

執達吏登用規則

（明治二十三年八月司法省令第三號）

[illegible]

明治三十三年(二月)法律第六號裁判所構成法第九十五條及第九十九條ニ依リ執達吏登用規則左ノ通相定ム

執達吏登用規則

第一條 執達吏ニ任セラルルニハ左ノ諸件ヲ具備スルコトヲ要ス

第一 年齢滿二十五歲以上ナルコト

第二 陸海軍ニ現役ヲ終ヘ又之ヲ免セラレタルコト

第三 身體健全ナルコト

第四 家計ヲ整理シタルコト

第五 品行方正ナルコト

第六 試驗ニ及第シタルコト

第二條 左ニ掲クル者ハ執達吏ニ任セラルルコトヲ得ス

第一 重罪ニ犯シタル者但國事犯ニ在テハ復權シタル者ハ此限ニ非ス

第二 定役ニ服スヘキ輕罪ニ犯シタル者

第三 身代限ノ處分ヲ受ケ負債ノ義務ヲ免加ハサル者

第四 懲戒ノ處分ニ由リ免職セラレタル者八十日ニ滿ツルモノ其ノ區別ヲ問ハス

第三條 執達吏ハ職務ヲ受ケントスル者ハ少クトモ六箇月間區裁判所ニ於テ主トシテ執達吏ノ職務ヲ修習スル傍之ニ書記ヲ職務ヲ修習スルコトヲ要ス

職務ヲ修習ヲ爲サ者ハ職務上ニ秘密ヲ漏洩スヘカラス

第四條 職務修習ヲ願フ者ハ願書ニ戸籍謄本及履歷書ヲ添付シ之ヲ控訴院長ニ出ス其詳

可ヲ受クヘシ

第五條 職務修習ハ許可ヲ爲シタル日ヨリ控訴院長ハ修習者ノ屬スヘキ區裁判所ヲ指定スヘシ

區裁判所ハ二人ノ判事若ハ監督判事ハ授業ヲ擔當スヘキ執達吏及裁判所書記ヲ選定シ職務ノ訓導ヲ爲サシムヘシ

第六條 控訴院長ハ修習者ノ行狀執達吏ト不適當ナリト認ムルトキハ其修習ヲ止ムルコトヲ得

第七條 職務修習者試驗ヲ受ケントスルニハ第一條第二乃至第五ノ諸件ヲ具備シタルコト及第二條ノ諸件ニ關レサルコトヲ證明シ並修習ノ日數ヲ記入シタル願書ヲ區裁判所ノ一人ノ判事若ハ監督判事ヲ經由シテ控訴院長ニ差出ス

區裁判所ハ二人ノ判事若ハ監督判事ハ前項願書ニ意見ヲ付スヘシ

控訴院長ハ書類ヲ調査シ試驗ノ許否ヲ定ムヘシ

第八條 試驗ハ地方裁判所ニ於テ毎年一回之ヲ行フ

第九條 試驗委員長及試驗委員ハ地方裁判所及區裁判所ノ判事檢事ノ中ヨリ試驗擧行毎ニ司法大臣之ヲ命ス

第十條 控訴院長ハ試驗ヲ受クヘキ修習者ノ名簿ヲ試驗委員長ニ送付スヘシ

前項ノ送付アリタルトキハ試驗委員長ハ試驗期日ヲ定メ之ヲ修習者ニ告知スヘシ

第十一條 試驗ハ筆記口述ノ二樣トス

口述試驗ハ筆記試驗ニ及第シタル者ニ之ヲ行フ

第十二條 試驗ハ左ノ科目ニ就キ之ヲ行フ

第一　民事訴訟法及治罪法ノ申書類送達ニ關ル規程
第二　執達吏ニ關ル諸規則
第三　算術（加減乘除分數比例）
第四　識書筆寫

第十三條　筆記試驗問題ノ答案ハ裁判所ノ官吏監督シテ之ヲ作ラシメ試驗委員長ハ受驗者ノ中立アルトキハ區裁判所ニ於テ筆記試驗問題ノ答案ヲ作ラシムルコトヲ得

第十四條　受驗者ノ及第落第及及第者ノ優劣ハ筆記試驗口述試驗ノ成績ニ對スル委員過半數ノ意見ニ從テ之ヲ決ス

及第落第ニ付テノ意見相半スルトキハ落第ト看做スヘシ

第十五條　試驗ニ及第シタル者ニハ試驗委員長及試驗委員ノ連署シタル及第證書ヲ授與ス

第十六條　試驗ニ落第シタル者ハ更ニ三箇月以上修習ヲ爲スニ非サレハ再ヒ試驗ヲ受クルコトヲ得ス

第十七條　不正ノ方法ヲ以テ及第ヲ企テタル者ハ再ヒ試驗ヲ受クルコトヲ得ス其及第シタル者ハ及第ノ效ナキモノトス

第十八條　試驗委員ハ試驗ノ問題及成績ヲ記錄ニ記載スヘシ

第十九條　試驗委員長ハ及第者ノ氏名及其試驗成績ヲ控訴院長ニ報告スヘシ

第二十條　左ニ掲クル者ハ試驗ヲ要セス執達吏ニ任セラルルコトヲ得

第一　官立府縣立中學校又ハ之ト同等ナル官立府縣立學校司法省法學校又ハ帝國大學ノ監督ヲ受ケタル習私立法學校及文部大臣ノ認可ヲ經タル學則ニ依リ法律學ヲ教授スル私立學校ノ卒業證書ヲ有スル者

第二　裁判所書記登用試驗ニ及第シタル者

第三　判任官以上ノ職ヲ現ニ奉シ又ハ曾テ奉シタル者

第四　陸軍下士ニシテ文官奉職ヲ請願スルコトヲ得ル者

第二十一條　第三條乃至第六條ノ規程ハ前條ニ掲ケタル者ニモ亦之ヲ適用ス

前條第四ニ該ル者ハ職務修習ノ願書ニ修習ヲ爲サントスル區裁判所ヲ記載シ陸軍大臣ヲ經由シテ司法大臣ニ差出スヘシ司法大臣ハ願書ヲ管轄控訴院長ニ送付スヘシ

區裁判所書記ハ職務修習ヲ要セス執達吏ニ任セラルルコトヲ得（明治二十四年司法省令第六號ヲ以テ本項ヲ追加ス）

第二十二條　試驗及第者及第二十條ニ掲ケタル者ニシテ職務修習ヲ終リタル者竝ニ區裁判所書記ニシテ轉任スル者ノ任補ハ執達吏ノ缺員アルヲ待テ控訴院長之ヲ擬行ス（同上法令ニテ本條改正）

第二十三條　執達吏ニ任セラレタル者ハ任補ノ日ヨリ三十日內ニ保證金ヲ管轄地方裁判所ニ納ムヘシ若シ其期間內ニ保證書ヲ差出ササルトキハ職務ヲ罷免ス

保證金ハ五百圓以下ニ於テ土地ノ情況ニ從ヒ控訴院長之ヲ定ム

若シ日本銀行株券ヲ以テ之ニ代ユルコトヲ得（明治三十七年二月司法省令第二號及三十九年四月同省令第四號ヲ以テ本項ヲ改ム）

第二十四條　執達吏保證金ヲ納メタルトキハ裁判所ハ證印ヲ交付スヘシ

執達吏ハ官印ノ交付ヲ得タル後ニ非サレハ職務ヲ行フコトヲ得ス

[illegible]行フコトヲ得ス

第二十五條 本則實施ノ際ハ職務修習ヲ要セス試驗及任補ヲ行フコトヲ得

執達吏懲戒令（明治四十一年六月勅令第百五十三號）

朕執達吏懲戒令ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

執達吏懲戒令

第一條 執達吏ノ懲戒ニ付テハ本令ニ定ムルモノヲ除クノ外文官懲戒令中判任官ニ關スル規定ヲ準用ス

第二條 懲戒ハ左ノ三種トス

一 免職

二 三月以下ノ停職

三 譴責

第三條 免職及停職ハ文官普通懲戒委員會ノ議決ニ依リ司法大臣之ヲ行フ

譴責ハ司法大臣之ヲ行フ

附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

執達吏手數料規則（明治二十三年七月法律第五十二號）

朕執達吏手數料規則ヲ裁可シ之ヲ公布セシム此法律ハ明治二十三年十一月一日ヨリ施行スヘキコト

トヲ命スル[illegible] 六十錢

執達吏手數料規則

第一條 執達吏ハ此規則ニ從ヒ手數料ヲ受ク[illegible]

第二條 書類送達ノ手數料ハ一通ニ付五錢トス[illegible]

第三條 有體動產及未タ土地ヨリ離レサル果實並爲替證券其他裏書ヲ以テ移轉スルコトヲ得ル證券ノ差押、假差押ニ付テハ左ノ區別ニ從フ[illegible]

執行スヘキ債權額	手數料
貳拾圓マテ	參拾錢
五拾圓マテ	五拾錢
百圓マテ	七拾五錢
貳百五拾圓マテ	壹圓
五百圓マテ	壹圓貳拾五錢
千圓マテ	壹圓五拾錢

[illegible]千圓ヲ超ユル[illegible]

若シ執務三時間以上ニ渉ルトキハ一時間毎ニ本條ニ定メタル手數料ノ十分ノ三ヲ加フ但其執務一時間ニ滿タサルモ一時間ト看做シテ算定ス[illegible]

第四條 執達吏差押假差押ヲ爲スヘキ場所ニ臨ムト雖差押フヘキ物ナキトキ又ハ差押フヘキ物ヲ換價スルモ強制執行ノ費用ヲ償フテ剩餘ヲ得ル見込ナキトキハ前條ニ定メタル手數料ノ半額ヲ受ク[illegible]

第五條　民事訴訟法第五百五十六條第二項、第五百八十六條第二項、第六百十五條ノ場合及既ニ差押、假差押ニ著手シタル執達吏ノ死亡若クハ其他ノ理由ニ依リ委任ノ消滅シタルトキ物ヲ換價シ又ハ爲其委任ヲ引受ケタル場合ニ於テハ執達吏ハ第三條ニ定メタル手數料ノ半額ヲ受ク

第六條　特定ノ動産又ハ代替物ノ一定ノ數量ヲ債務者ヨリ取上ケ之ヲ債權者ニ引渡ス場合ニ於テハ其手數料ハ五拾錢トス若シ執務一時間以上ニ渉ルトキハ一時間毎ニ拾五錢ヲ加フ但執務一時間ニ滿タサルモ一時間ト看做シテ算定ス

前項ノ場合モ於テ執達吏其場所ニ臨ムト雖引渡スヘキ物ナキトキハ前項ニ定メタル手數料ノ半額ヲ受ク

第七條　民事訴訟法第七百三十一條第一項ノ場合ニ於テハ執務三時間以内ハ手數料ヲ拾錢トス若シ其執務三時間以上ニ渉ルトキハ一時間毎ニ拾五錢ヲ加フ但其執務一時間ニ滿タサルモ一時間ト看做シテ算定ス

前項ノ場合ニ於テ執達吏其場所ニ臨ムト雖船舶アラサルトキハ前項ニ定メタル手數料ノ半額ヲ受ク

第八條　民事訴訟法第六百四十三條第三項ニ依リ不動産ノ取調ヲ爲ス場合ニ於テハ第三條ニ定メタル區別ニ從ヒ其手數料ヲ受ク

第九條　動産、不動産及船舶ノ競賣ヲ付テノ手數料ハ左ノ區別ニ從フ但競賣ニ依リ得タル金額執行スヘキ債權額ヲ超過スルトキハ其債權額ヲ以テ競賣金額ト見做ス

競賣金額	手數料
貳拾圓マテ	六十錢

五拾圓マテ	壹圓
壹百圓マテ	壹圓五拾錢
貳百五拾圓マテ	貳圓
五百圓マテ	貳圓五拾錢
千圓マテ	四圓

以上千圓毎ニ壹圓ヲ加フ

任意競賣ニ付テモ亦前項ニ同シ

第十條　執達吏執行爲ヲ爲スヘキ場所ニ臨マサル以前ニ民事訴訟法第五百五十條ニ依リ又ハ委任ノ消滅ニ依リ强制執行ヲ止メタルトキ又ハ支拂若クハ引渡ニ依リ强制執行ノ委任終了シタルトキハ各本條ニ定メタル手數料ノ十分ノ三ヲ受ク但第本條ノ場合ニ於テハ其手數料ヲ三拾錢トス

第十一條　執達吏執行爲ヲ爲スヘキ場所ニ臨ミタル後民事訴訟法第五百五十條ニ依リ又ハ委任ノ消滅ニ依リ强制執行ヲ止メタルトキ又ハ支拂若クハ引渡ニ依リ强制執行ノ委任終了シタルトキハ各本條ニ定メタル手數料ノ半額ヲ受ク但第九條ノ場合ニ於テハ其手數料ヲ五拾錢トス

第十二條　第三條乃至第十一條ノ手數料ヲ受クヘキ行爲ニハ强制執行ノ場合ニ於ケル左ノ行爲ヲ包含ス

第一　警察上援助ヲ求メ又ハ證人鑑定人ノ立會ヲ爲サシムルコト

第二　執行行爲ニ關スル催告其他ノ通知ヲ爲シ又ハ書類ノ送達ヲ爲スコト

第三　記名證券ヲ買主ノ氏名ニ書換ヘ及必要ナル陳述ヲ債務者ニ代リテ爲スコト

第四　支拂其他ノ給付、差押金錢及賣却金ヲ受取リ交付シ若クハ供託シ又ハ受取證書ヲ交付シ又ハ差押物ヲ還付スルコト

第五　競賣ノ公告ヲ爲スコト

第十三條　執達吏ハ立替トシテ左ノ費用ノ辨濟ヲ受ク

第一　書記料

第二　郵便料、電信料

第三　公告料

第四　證人、鑑定人ノ手當

第五　職工、役夫ノ手當

第六　有價證券ノ記名書換及流通ヲ止メタル證券ノ流通ヲ回復スル爲ノ費用

第七　人及物ノ送致費用

第八　物ノ保存並監視ノ費用

第九　果實收穫ノ費用

第十　旅費

第十四條　前條ノ書記料ハ左ノ場合ニ於テ之ヲ受ク

第一　法律ニ依リ又ハ利害關係人ノ求ニ依リ證書及記錄中ニ存スル書類ノ謄本ヲ作リタルトキ

但法律ニ依リ交付スヘキ送達證書ノ謄本ハ此限ニ在ラス

第二　供託ヲ爲スニ際シ執行裁判所ニ差出スヘキ屆書ヲ作リタルトキ

第三　差押命令ノ送達後第三債務者ノ爲ス陳述ヲ筆記シタルトキ

第十五條　書記料ハ半枚十二行二十字詰ニ付貳錢五厘ヲ但書行ニ滿ヲサルモ半枚ト看做シテ算定ス

第十六條　執達吏拒證書ヲ作リタルトキハ其手數料拾錢ヲ受ク

拒者ノ營業場又ハ住居ノ問合ヲ爲シ拒證書ヲ作リタルトキハ手數料貳拾錢ヲ受ク

第十七條　證人ニ支給スヘキ日當ハ貳拾錢以下鑑定人ニ支給スヘキ日當ハ五拾錢以下トシ執達吏土地ノ情況ニ從ヒ之ヲ支給ス

第二章　支給ス若シ一里以上ノ地ヨリ呼出シタルトキハ第十八條ノ規定ニ從ヒ旅費ヲ支給ス

第十八條　執達吏自己ノ役場ヨリ一里以上ノ地ニ至リ職務ヲ行フトキハ一里毎ニ拾錢以下ノ旅費ヲ受ク但一里ニ滿タサルモ一里ト看做シテ算定ス

右旅費ノ額ハ控訴院長ノ認可ヲ經テ地方裁判所長之ヲ定ム

第十九條　執達吏ハ總テノ事務ヲ擔任スルニ當リ手數料及立替金ノ概算額ヲ委任者ヨリ豫納セシム若シ豫納セサルトキハ委任ニ應セサルコトヲ得但裁判所及檢事局ノ命令ニ依ルトキ又ハ訴訟上ノ救助ヲ受ケタル者ノ爲ニ事務ヲ擔任スルトキハ此限ニ在ラス

第二十條　執達吏ハ委任ノ終了シタル後手數料及立替金ノ辨濟ヲ受クヘキモノトス但民事訴訟法第五百五十四條ニ規定シタル場合ハ此限ニ在ラス

第二十條ノ二　執達吏規則第十六條但書ノ場合ニ於テル執行ノ費用ハ被徵收者ノ負擔トス（明治三十二年三月法律第三號ヲ以テ本條ヲ新置ス）

第二十一條　前條ノ場合ヲ除クノ外、執達吏及檢事局ノ命令ニ依リ其職務ヲ行フ爲ニ要シタル立替金ハ三箇月毎ニ確定シテ之ヲ支給ス（同上法令ヲ以テ本項中改正）

右立替金ハ國庫ヨリ之ヲ支辨ス

第二十二條　訴訟上ノ救助ヲ付與シタル場合ニ於テハ執達吏ノ立替金ハ國庫ヨリ支辨ス但債務者ヨリ辨償シ能ハサル場合ニ限ル

第二十條ノ二ノ場合ニ於テ被徴收者立替金ヲ辨償スルコト能ハサルトキハ國庫ヨリ之ヲ支辨ス

（同上法命ヲ以テ本項ヲ追加ス）

第二十三條　執達吏ハ其職務執行ニ付作リタル書類ノ正本又ハ謄本ニ手數料及立替金ノ額ヲ附記スヘシ若シ又執務時間ニ應シ其辨償ヲ受クヘキトキハ調書ニ其執務時間ヲ附記スヘシ若シ之ヲ附記セサルトキハ最短ノ時間ニ付テ定メタル金額ヲ以テ算定ス

執達吏代理鑑札調製方（明治二十三年九月司法省訓令第三號）

執達吏規則第十四條ニ依リ區裁判所ヨリ交付スヘキ鑑札ハ左ノ通リ調製スヘシ

（雛形ハ之ヲ略ス）

第二章　臺灣ニ於ケル特則

臺灣總督府法院執達規則（明治三十一年六月律令第七號）

臺灣總督府評議會ノ議決ヲ經タル臺灣總督府法院執達規則勅裁ヲ得テ茲ニ之ヲ發布ス

臺灣總督府法院執達規則

第一條　訴訟ニ關スル書類ノ送達及裁判ノ執行又ハ强制執行ニ關セサル告知及催告ハ法院書記ヲ

シテ取扱ハシム但法院長ハ臨時ノ必要ニ依リ他ノ職員又ハ適當ト思量スル者ヲシテ取扱ハシムルコトヲ得（明治三十六年十二月律令第十號ヲ以テ本項中改正）

前項ノ職務ヲ執行スル者ハ法院長ヨリ交付シタル證票ヲ携帶スルモノトス

第二條　書類送達ノ手數料ハ一通ニ付金五錢ヲ納ムヘシ

第三條　差押及ハ假差押吏請求スル者ハ左ノ區別ニ從ヒ手數料ヲ納ムヘシ

若執務三時間以上ニ渉ルトキハ一時間毎ニ本條ニ定メタル手數料十分ノ三ヲ加フ但其執務一時間ニ滿タサルモ一時間ト看做シテ算定ス（同上法命ヲ以テ本項ヲ追加ス）

第八執行又ハ差假額ノ手數料ハ左ノ通リ（以下略）

當令　武拾圓未滿ヲ略ス　參拾錢

第五拾圓未滿ヲ略ス　五拾錢

第百圓未滿ヲ略ス　七拾五錢

武百五拾圓マテ　壹圓

五百圓マテ　壹圓武拾五錢

千圓未滿ヲ略ス　壹圓五拾錢

千圓ヲ超ユルトキハ武圓ヲ超ユルコトヲ得

第四條　特定ノ動產若ハ代替物ノ一定ノ數量ノ引渡又ハ不動產ノ引渡若ハ明渡ヲ請求スル者ハ金五拾錢ノ手數料ヲ納ムヘシ若執務三時間以上ニ渉ルトキハ一時間毎ニ金拾五錢ヲ加フ但其執務一時間ニ滿タサルモ一時間ト看做シテ算定ス（同上法命ヲ以テ條中ニ追加ヲ施ス）

第五條　競賣ヲ請求スル者ハ左ノ區別ニ從ヒ手數料ヲ納ムヘシ但競賣ニ依リ得タル金額執行スヘ

[illegible]き債權額ニ超過スルトキハ其債權額ヲ以テ競賣金額ト看做ス（同上法令ヲ以テ本條改正）

一競賣金額[illegible]手數料[illegible]（同上法令ヲ以テ本條改正）

[illegible]貳拾圓ヲ[illegible]六拾錢[illegible]

[illegible]五拾圓ヲ[illegible]壹圓[illegible]

百圓ヲ[illegible]壹圓五拾錢

貳百五拾圓ヲ[illegible]　貳圓[illegible]

五百圓ヲ[illegible]　貳圓[illegible]拾錢

千圓ヲ[illegible]　四圓

以上千圓毎ニ壹圓ヲ加フ[illegible]

第五條　ノ二[illegible]強制執行ニ關セサル告知及催告ヲ請求スル者ハ其ノ手數料金拾錢ヲ納ムヘシ（同上法令ヲ以テ本條改正）

第六條　地方法院所在地ヨリ[illegible]里以上ノ地ニ至リ前數條ノ事務ヲ行フトキハ手數料ノ外一里ニ付金十錢ノ旅費ヲ納[illegible]シ但二里[illegible]看做シ[illegible]算定ス（同上法令ヲ以テ本條改正）

通歸ノ同行[illegible]ルトキハ其ノ里數ニ應シ前項ノ例ニ依リ旅費ヲ納ムヘシ[illegible]

第七條　差押、假差押、競賣ノ調書ノ謄本及ヘ其他ノ書類ノ謄本ヲ下付ヲ請求スル者ハ左ノ割合ニ從ヒ手數料ヲ納ムヘシ[illegible]

但枚十三行三十字詰ニ付金三錢[illegible]但十三行ニ滿[illegible]モ亦同シ[illegible]

第八條　此規則ニ定メサル必要ノ費用ハ其實費ヲ納ムヘシ（同上）

第九條　[illegible]法院ハ第二條第五條第六條第八條ノ費用ノ概算額ヲ當事者ヨリ豫納セシムルコトヲ得ル[illegible]

臺灣總督府法院執達規則施行細則

（明治三十一年六月臺灣總督府令第三十七號）

臺灣總督府法院執達規則施行細則左ノ通相定ム

臺灣總督府法院執達規則施行細則

第一條　此細則ニ於テ執達者ト稱スルハ臺灣總督府法院執達規則第一條ニ依リ訴訟ニ關スル書類ノ送達及裁判ノ執行ヲ爲ス者又事件主任官ト稱スルハ判官又ハ檢察官ニシテ職務上執達者ニ對シ事務ヲ命シタル者ヲ云フ

第二條　執達者ハ其職務ニ付事件主任官ノ指揮監督ヲ受クヘシ

第三條　執達者ハ職務執行ノ際其携帶ノ證票ヲ示スヘシ

證票ハ第一號雛形ニ依ル[illegible]

第四條　執達者ハ第三號書式送達職務簿及第三號書式執行職務簿ヲ備ヘ職務上取扱タル總テノ事務ヲ記載スヘシ

職務簿ハ執達者各自ニ設ケス種別毎ニ一冊ト爲シ毎年更新スヘシ但毎月若ハ數月ニ區別シテ分冊スルモ妨ナシ

第五條　送達ハ送達スヘキ書類ノ正本又ハ認證シタル謄本又ハ普通ノ謄本ヲ交付シ其送達施行濟ノ旨ヲ送達證書ニ記載スヘシ

第六條　執達者送達ヲ受クヘキ人ニ出會ハス且送達ヲ爲スヘキ場所ニ於テモ之ヲ受クヘキ者アラサルトキハ書類ヲ其地ノ街庄社長ニ預ケ證ヲ[illegible]

前項ノ場合ニ於テ又近隣ニ住居スル者ニ人ニ書類ヲ預ケ置キタル場所ヲ告ケ且其旨ヲ本人ニ通カニ通知スヘキコトヲ囑託スヘシ又本人住居ノ門戸ニ書類ヲ預ケ置キタル場所並書類ヲ速カニ受取ルヘキ旨ヲ明記シタル告知書ヲ貼付スヘシ

第七條　送達ヲ受クヘキ者カ正當手續ヲ經テ送達ヲ爲ス場合ニ於テハ受取ヲ拒ムコトヲ得サルモストス若シ此場合ニ於テ送達ノ受取ヲ拒ムトキハ執達者ハ交付スヘキ書類ヲ送達ノ場所ニ差置クヘシ

第八條　執達者ハ債務者ニ對シ任意債務ヲ履行シテ完結スヘキ旨ヲ催告シ尙之ニ從ハサルトキニ於テ强制執行ニ着手スヘシ

第九條　執達者ハ總テノ執行爲ニ付調書ヲ作ルヘキモノトス此調書ニハ總テノ命令ヲ記載シ債權者ヲ滿足セシムルヲ能ハサルトキハ總テ適當ナル方法ニ依リ債權者ヲ滿足セシムヘキコトヲ試ミタルモ其目的ヲ達セサリシコトヲ調書ニ於テ明確ニスルコトヲ要ス

調書ハ執行行爲ト同時ニ之ヲ作リ且成ルヘク其行爲ヲ爲シタル地ニ於テ之ヲ作ルヘシ

第十條　各執行行爲ノ調書ニハ左ノ諸件ヲ具備スルコトヲ要ス

第一　調書ヲ作リタル場所、年月日

第二　執行行爲ノ目的物及其重要ナル事情ノ略記

第三　執行ニ與カリタル各人ノ表示

第四　右各人ノ署名捺印

第五　調書ヲ其各人ニ讀聞セ又ハ閲覽セシメ其承諾ノ後署名捺印ヲ爲シタルコトノ開示

第六　執達者ノ署名捺印

第四號及第五號ノ要件ヲ具備スルコト能ハサルトキハ其理由ヲ記載スヘシ

第十一條　强制執行ニ依リ差押フヘキ財産ノ價額强制執行ノ費用ヲ償ヒテ剩餘ヲ得ル見込ナキトキハ差押ヲ爲スヘカラス

第十二條　執達者ハ過當ノ差押ヲ避クル爲差押物件ヲ調書ニ記載スルニ當リ其各物件ニ付概算ノ價額ヲ記入シ且差押物件ノ賣得金ヲ以テ債權者ニ辨濟シ及强制執行ノ費用ヲ償フニ足ルヘキ額ヲ標準トシテ差押ノ範圍ヲ定ムルコトヲ要ス

債權者ノ利益ヲ損傷スル恐ナキトキハ債務者ノ陳述ヲ斟酌シ債務者ニ於テ最放ヲ易キ財産中殊ニ金錢、有價證券及金銀物等ノ如キ容易ニ運搬シ得ヘキ物件ニ付差押ヲ爲スヘシ

第十三條　第三者ノ占有中ニ在ル債務者ニ屬スル物件ノ差押ヲ爲スニハ執達者ハ先ツ第三者ニ對シテ其物件ヲ直ニ引渡シ得ルヤ否ヲ訊問スヘシ

第三者之ヲ承諾スルトキハ債務者ノ占有スル物件ヲ差押フルト同一ノ方法ヲ以テ差押ヲ爲スヘシ

第三者物件ノ提出ヲ拒ミ又ハ執達者カ之ヲ占有スルニ付異議ヲ述フルトキハ執達者ハ其事實ノ調書ヲ作ルニ止マリ爾後ノ處分ハ債權者本人ニ任スヘシ

債權者ノ占有中ニ在リテ債務者ニ屬スル物件ノ差押ヲ爲スニハ執達者ハ通常ノ手續ニ依リ直ニ差押ヲ爲スヘシ

第十四條　債權者又ハ第三者ノ占有中ニ在ル物件ヲ差押ヘタルトキハ執達者ハ差押ヲ爲シタル旨ヲ債權者ニ通知スヘシ

第十五條　執達者執行爲ニヨリ金錢、有價證券、書類及物品等ヲ領收シタルトキ其領收證ヲ求ム

ル者ニ對シテハ之ヲ交付スヘシ

第十六條　執達者ハ差押ヘタル物件ニシテ多額ノ費用ヲ要スルニアラサレハ運搬シ難キカ又ハ差押物件ノ性質若ハ他ノ理由ニ依リ保存ヲ委託スルヲ便益ナリト認ムルトキハ其差押ヲ爲シタル土地ニ住居シテ信用アリ且辨償能力アル者ニ託シテ保存ヲ爲サシムヘシ

保存ヲ委託セラレタル者ハ正當ノ理由ナクシテ之ヲ拒ムコトヲ得ス

委託ヲ受ケタル者ハ其求ニ依リ委託物件ノ目錄ヲ領收ス其保存ニ關スル報酬ハ成ルヘク前以テ之ヲ定ムヘシ

執達者ハ保存ノ爲委託シタル物件竝其目錄ヲ確收シタル旨ノ證書ヲ保存人ヨリ受取リ又保存人ノ求ニ依リ該證書ノ謄本ヲ交付スヘシ

必要ナル場合ニ於テハ保存委託ニ關スル調書ヲ作リ之ヲ差押調書ニ添付スルモノトス

此調書ニハ左ノ諸件ヲ掲ケ且保存人ニ署名捺印セシムヘシ

第一　保存人ト爲シタル約款

第二　物件ノ交付ニ關スル保存ノ認諾

第三　保存ノ爲交付シタル物件

第十七條　執達者ハ債權者ノ承諾アルカ又ハ差押物件運搬ヲ爲スニ付重大ナル困難アルニ依リ之ヲ債務者ノ保管ニ任ストキハ左ノ規定ニ從フヘシ

第一　差押物件ノ性質其他ノ事情ニ從ヒ各差押物件毎又ハ其物件ノ保存スル筐匣、室、倉庫等ニ封印又ハ其他ノ方法ヲ以テ差押ヲ明白ニスヘシ但筐匣、室、倉庫ノミニ封印スル場合ニ於テハ其封印又ハ筐匣等ヲ損傷スルニアラサレハ其差押物件ヲ取出シ得サルコトニ注意

スヘシ

第二　執達者ハ差押物件ノ占有既ニ執達者ニ歸シタルコト及債務者其物件ヲ處分シ若ハ封印ヲ破壞スルトキハ法律上ノ罰ヲ受クヘキコトヲ債務者ニ諭示スヘシ

第十八條　不動産ノ差押又ハ差押物件ノ性質ニ依リ封印若ハ標目ヲ附シ得サル場合ニ於テハ執達者ノ署名シタル告示ヲ差押物件ニ接近スル各人ノ見易キ場所ニ貼付シ又ハ他ノ適當ナル方法ヲ以テ各人ニ之ヲ知ラシムヘキモノトス此場合ニ於テ必要ト認ムルトキハ其管理人ヲ命スヘシ

第十九條　執達者差押ニ付作ルヘキ調書ニハ特ニ左ノ諸件ヲ掲クヘシ

第一　各差押物件竝其概算價額又必要ナル場合ニ於テハ員數尺度重量等

第二　執達者差押物件ヲ占有シタルコト

第三　保存ヲ委託シ又ハ管理人ヲ命シタル際爲シタル處分

第四　差押物件ヲ債務者ノ保管ニ任セタルトキハ其理由

第五　競賣期日ノ日時及場所若シ此期日ヲ直ニ定ムルコトヲ得サルトキハ其理由

第二十條　執行行爲ニ依リ領收シタル現金ヲ保管スルトキハ執達者ハ書式第四號保管金品受渡簿ニ登記シ事件主任官ノ照査調印ヲ受ケ現金ト共ニ歲入歲出外現金出納官吏ニ送付スヘシ

第二十一條　執行行爲ニ依リ領收シタル有價證券其他差押物件ヲ保管スルトキハ執達者ハ第四號書式保管金品受渡簿ニ登記シ事件主任官ノ照査認印ヲ受ケ物件ト共ニ物品會計官吏ニ送付スヘシ

第二十二條　歲入歲出外現金出納官吏若ハ物品會計官吏ニ送付シタル前二條ノ現金又ハ物件ハ其送付ヲ受ケタル官吏ノ保管ニ屬スルモノトス

第二十三條　執達者歳入歳出外現金出納官吏又ハ物品會計官吏ノ保管ニ係ル差押物件處分ノ必要アルトキハ第四號書式保管金品受渡簿ニ其事由ヲ詳記シ事件主任官ノ認印ヲ受ケ其引渡ヲ請求スヘシ

第二十四條　執達者差押物件ヲ賣却スルトキハ競賣ノ方法ニ依ルヘシ但特別ノ場合ニ於テ競賣ノ方法ニ依ラスシテ換價スルトキハ第二十九條ノ規定ニ從フヘシ

競賣ハ差押ヲ爲シタル地ニ於テ之ヲ爲スヘシ但差押債權者及債務者他ノ場所ニ於テ之ヲ爲スコトヲ合意シタルトキ又ハ事件主任官ヨリ競賣ノ場所ヲ指定シタルトキハ其場所ニ於テ之ヲ爲スヘシ

第二十五條　競賣期日ハ執達者差押ノ際直ニ之ヲ定ムルヲ例トス若シ債權者及債務者後日ニ期日ヲ定ムルコトヲ承諾シタル場合又ハ直ニ期日ヲ定ムル能ハサル特別ノ場合若ハ直ニ定ムルノ便益ナラサル場合又ハ事件主任官ノ意見ヲ以テ他ノ換價方法ヲ命シ若ハ他ノ場所ニ於テ競賣ヲ命セラルヘキ場合ニ於テハ一時期日ノ指定ヲ猶豫スヘシ

差押ノ際直ニ期日ヲ定メタル場合ニ於テハ之ヲ定メタルトキ其期日ヲ債權者及債務者ニ通知スヘシ

第二十六條　競賣ハ前以テ公告セサルヘカラス公告ハ其地ニ相應ノ方法ヲ以テ爲スヘシ

公告ニハ殊ニ左ノ諸件ヲ掲クヘシ

第一　當事者ノ表示

第二　競賣スヘキ物件

第三　競賣ノ日時及場所

公告ヲ爲シタル方法日時ハ競賣調書ニ附記シ又ハ其證據トナルヘキモノヲ添付シ以テ之ヲ明確ニスヘシ

第二十七條　競賣ニ付シタル物件ハ競賣調書ニ記入スヘシ

賣却物件ハ一々之ヲ呼上ケ實物ヲ示スヘシ高價物ハ其評價金銀物ハ其實價有價證券ハ賣却日ノ相場ヲ告ケテ競賣價額ハ其評價實價若ハ相場ヨリ低價ノ競賣ヲ許ササル旨ヲ諭示スヘシ

競賣ニ付スル物件ノ不相當ニ過分ナルコトヲ避クルカ爲執達者ハ時々其賣得金ヲ以テ計算ヲ立テ債權者ニ辨濟ヲ爲シ及強制執行ノ費用ヲ償フニ足ルニ至ルトキハ直ニ競賣ヲ止ムヘシ

競賣ニ付シタル金銀物ニシテ其金銀物ノ實價ヲ超ユルニ競賣ヲ爲ス者ナキカ爲競賣シ得サルトキハ其競買實價額中ノ最高價額ヲ競賣調書ニ附記スヘシ

第二十八條　競賣ノ際作ルヘキ調書ニハ特ニ左ノ諸件ヲ掲クヘシ

第一　競賣ノ實得金ヲ以テ辨濟スヘキ債權及強制執行ノ費用ノ合計額

第二　競賣物件及其各物件ノ評價實價又ハ相場

第三　競落人及其最高競賣價額竝代金支拂濟ノコト

調書ニ署名捺印ヲ要スル者ハ競買人中唯各最高價申出人ニ限ル若シ競賣終結前ニ退散シタルトキハ其署名捺印セシムルコト能ハサル理由ヲ調書ニ附記スヘシ

第二十九條　差押物件ヲ競賣ノ方法ニ依ラスシテ換價スル場合ハ左ノ如シ

第一　事件主任官ヨリ競賣ノ方法ニ依ラスシテ換價ヲ爲スヘキコトヲ命シタルトキ

第二　有價證券ニシテ取引所相場又ハ市相場アルモノタルトキ

第三　金銀物ニシテ既ニ競賣ニ付シタルモ其最高競賣價額カ其實價ニ至ラサルトキ

前項ノ場合ニ於テハ直接ニ債權者ニモ賣却ヲ爲スコトヲ得

競賣ノ方法ニ依ラスシテ換價ヲ爲ストキハ執達者ハ成ルヘク高價ニ賣却スヘキコトニ注意シ金銀物ヲ其實價ヨリ低價ニ賣却シ又ハ有價證券ヲ其賣却日ノ相場ヨリ低價ニ賣却スヘカラス

第三十條　競賣方法ニ依ラスシテ換價スル場合ニ於テ作ルヘキ調書ニハ特ニ左ノ諸件ヲ掲クヘシ

第一　競賣ノ方法ニ依ラスシテ換價シタル理由

第二　賣却物件及其各物件ノ評價賣價又ハ相場若ハ事件主任官ノ定メタル價額

第三　賣却價額並代金支拂濟ノコト

第三十一條　執達者ハ強制執行ニ依リ得タル金錢ニ關シ計算ヲ爲シ其結果ヲ書面ニ作リ事件主任官ノ認印ヲ受ケ之ヲ明確ニシ之ニ依リ仕拂若ハ還付等ノ手續ヲ爲スヘシ

前項處分カ執行行爲ノ場所ニ於テ直ニ之ヲ爲スモノナルトキニ於テ事件主任官ノ認印ヲ受クルコトヲ得サル場合ハ實施ノ後之カ追認ヲ受クヘシ

仕拂若ハ還付ヲ爲シタル金錢ハ總テ受領證ヲ徵シ之ヲ明確ニシ計算書ト共ニ事件記錄ニ添付スヘシ

第三十二條　執達者ハ強制執行完結後ニ至リ賣却セサリシ差押物件又ハ強制執行中法院ノ裁判若ハ債權者ノ免除ニ依リ差押ヲ解除シタル物件ヲ即時ニ債務者又ハ領收權利者ニ交付スヘシ

右交付シタル物件ニ付テハ執達者ハ債務者又ハ領收權利者ヲシテ受取證ヲ出サシメ之ヲ事件記錄ニ添付スヘシ

第三十三條　特定動產又ハ代替物ノ一定ノ數量ヲ引渡サシムヘキ強制執行ハ執達者其執行カアル債務名義中ニ包含シタル物件ヲ債務者ニ就キ索出シテ之ヲ取上ケ債權者ニ引渡スヲ以テ之ヲ爲

スモノトス

前項ノ引渡ハ之ヲ取上ケタル後遲カニ行フコトヲ要ス若シ直ニ之ヲ行フコト能ハサルトキハ債權者ノ申出アルマテ之ヲ保存スヘシ其保存ノ手續ハ差押物件ニ關スル規定ニ從フヘシ

右執行ニ付作ルヘキ調書ニハ特ニ左ノ諸件ヲ掲クヘシ

第一　債務者ヨリ取上ケタル特定動產又ハ代替物ノ箇數、度量又有價證券ニ係ルトキハ其券面額、番號、日附

第二　物件ヲ債權者又ハ其代理人ニ引渡シ若ハ輸送シタル旨又未タ之ヲ爲ササルトキハ其理由及其保存ノ方法

取上ケタル物件ヲ債權者ニ引渡シタルトキハ執達者ハ其受取證ヲ取リ置クヘシ

第三十四條　不動產又ハ人ノ住居スル船舶ヲ引渡シ又ハ明渡サシムヘキ強制執行ハ執達者債務者ノ占有ヲ解キ債權者ニ其占有ヲ得セシメテ之ヲ爲スモノトス

此執行行爲ニ付テハ執達者ハ債權者又ハ其代理人ヲシテ立會セシメ且無益ノ日時ヲ費ササルコトニ注意スヘシ

執達者ハ住家明渡ノ際債務者ノ動產類即チ强制執行ノ目的物ニアラサル動產ハ之ヲ取除キテ債務者ニ引渡スヘシ若シ債務者不在ナルトキハ其代理人又ハ債務者ノ成長シタル家族若ハ雇人ニ之ヲ引渡スヘシ

債務者及前項ニ掲ケタル者不在ナルトキハ執達者ハ該物件ヲ債務者ノ費用ニテ第十六條ノ規定ニ從ヒ保存ニ附スヘシ

保存シタル物件ヲ債務者ニ返還シタルトキハ執達者ハ其受取證ヲ取リ置クヘシ

債務者右ノ受取ヲ怠ルトキハ執達者ハ其事情ヲ具シテ事件主任官ノ許可ヲ得差押物件ノ競賣ニ關スル規定ニ從ヒテ之ヲ賣却シ其費用ヲ控除シタル上其代金ヲ保管スヘシ

右執行ニ付作ルヘキ調書ニハ特ニ左ノ諸件ヲ掲クヘシ

第一 債權者又ハ其代理人ノ出頭シタルコト

第二 引渡シ又ハ明渡シタル者及其場所ニ現在スル附屬物、器具

第三 債務者ハ其物ノ占有ヲ解キ債權者又ハ其代理人之ヲ取得シタルコト

第四 債務者ノ動産ヲ保存シタルトキハ其理由、種類竝其處分方法

第三十五條 假差押及假處分ニ關スル執行手續ハ通常ノ强制執行規定ヲ準用ス

第三十六條 罰金、科料、過料、刑事訴訟費用（私訴ハ費用ヲ除ク）及官沒金ノ類ニシテ滯納者アル場合ニ於テ執達者ニ命シテ强制執行ニ依リ徵收セシムルトキハ左ノ手續ニ依ルヘシ

第一 各事件主任官ハ執達者ヘ交付スヘキ徵收命令書ヲ歲入調定官ヘ送付スヘシ

第二 歲入調定官前項命令書ノ送付ヲ受ケタルトキハ收入官吏ヲ經之ヲ執達者ニ交付スヘシ

第三 執達者徵收命令書ノ交付ヲ受ケタルトキハ納入所在地ニ就テ納金（曩ニ納人ニ交付シタル納入告知書ト共ニ）ヲ收納シ適宜ノ領收證書ヲ交付シ甲號納入告知書ニ係ルモノハ其告知書ニ納金ヲ添ヘ金庫ヘ納入シ金庫ノ領收證書ヲ收入官吏ヘ差出シテ納入濟ヲ證明シ乙號納入告知書ニ係ルモノハ其告知書ニ納金ヲ添ヘ收入官吏ヘ引渡シ領收證書ハ之ヲ保存スヘシ

第四 執達者ハ犯人無資力ニシテ之ヲ完納スルコト能ハサルトキ又ハ犯人死亡シタルトキハ其旨ヲ事件主任官ニ屆出ツヘシ

第三十七條 金錢其他物件ノ引渡若ハ明渡ハ之ヲ受クヘキ本人ニ爲スヘシ其代理人ニ爲スニハ書面委任ニテ之ヲ領收シ得ルコトノ明確ナルトキニ限ル

第三十八條 執達者取扱ヒタル事務完結シタルトキハ其結果ノ重要ナル事項ヲ遺漏ナク事件主任官ニ申報スヘシ又必要ナル場合ニ於テハ完結前事件ノ經過ヲ申報スヘシ但事件記錄ニ添付スル書面アルトキ之ニ依リ明確ナル事項ハ記載スルニ及ハス

（書式ハ之ヲ略ス）

第三章 韓國ニ於ケル特則

執達吏ニ屬スル職務ヲ行フ場合ニ於ケル手數料ニ關スル件

（明治四十二年十月統監府令第三十六號）

執達吏ニ屬スル職務ヲ行フ場合ニ於ケル手數料ニ關スル件左ノ通定ム

執達吏ニ屬スル職務ヲ行フ場合ニ於ケル手數料ハ執達吏手數料規則ノ例ニ依ル

官吏ニ非サル者執達吏ノ職務ヲ行ヒタルトキノ手數料ハ其ノ者ノ所得トス

附則

本令ハ明治四十二年十一月一日ヨリ之ヲ施行ス

第五編 辯護士

第一章 通則

辯護士法（明治二十六年三月法律第七號）

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル辯護士ヲ裁可シ玆ニ之ヲ公布セシム

辯護士法

第一章 辯護士ノ資格及職務

第一條 辯護士ハ當事者ノ委任ヲ受ケ又ハ裁判所ノ命令ニ從ヒ通常裁判所ニ於テ法律ニ定メタル職務ヲ行フモノトス但シ特別法ニ因リ特別裁判所ニ於テ其ノ職務ヲ行フコトヲ妨ケス

第二條 辯護士タラムト欲スル者ハ左ノ條件ヲ具フルコトヲ要ス

第一 日本臣民ニシテ民法上ノ能力ヲ有スル成年以上ノ男子タルコト

第二 辯護士試驗規則ニ依リ試驗ニ及第シタルコト

第三條 辯護士試驗ニ關スル規則ハ司法大臣之ヲ定ム

第四條 左ニ掲クル者ハ試驗ヲ要セスシテ辯護士タルコトヲ得

第一 判事檢事タル資格ヲ有スル者又ハ辯護士ニシテ其ノ請求ニ因リ登錄ヲ取消シタル者

第二 法律學ヲ修メタル法學博士、帝國大學法律科卒業生、舊東京大學法學部卒業生、司法省舊法學校正則部卒業生及司法官試補タリシ者

第五條 左ニ掲クル者ハ辯護士タルコトヲ得ス

第一 重罪ヲ犯シタル者但シ國事犯ニシテ復權シタルトキハ此ノ限ニ在ラス

第二 不敬罪、僞造罪、僞證罪、賄賂罪、誣告罪、竊盜罪、詐欺取財罪、毀消罪、贓物ニ關スル罪、遺

失物埋藏物ニ關スル罪、家資分散ニ關スル罪及刑法第百七十五條同第二百六十條同第二百八十二條同第二百八十六條同第二百八十七條同第三百六十條ニ記載シタル定役ニ服スヘキ輕罪ヲ犯シタル者

第三 公權停止中ノ者

第四 被產若ハ家資分散ノ宣告ヲ受ケ復權セサル者又ハ身代限ノ處分ヲ受ケ債權ノ辨償ヲ終ヘサル者

第六條 辯護士ハ報酬アル公務ヲ兼ヌルコトヲ得ス但シ帝國議會議員、府縣會常置委員ト爲リ又ハ官廳ヨリ特ニ命セラレタル職務ヲ行フハ之ノ限ニ在ラス

辯護士ハ商業ヲ營ムコトヲ得ス但シ辯護士會ノ許可ヲ得タルモノハ此ノ限ニ在ラス

第二章 辯護士名簿

第七條 辯護士ハ辯護士名簿ニ登錄セラルルコトヲ要ス

第八條 各地方裁判所ニ辯護士名簿ヲ備フ

辯護士ハ其ノ氏名ヲ登錄シタル地方裁判所ノ所屬トス

刑事訴訟法第二百六十四條及第二百七十九條ノ所屬辯護士ハ受訴裁判所所在地ノ辯護士ヲ以テ之ニ充ツ

第九條 辯護士名簿ニ登錄ヲ請フ者ハ其ノ所屬地方裁判所ノ檢事局ヲ經由シテ司法大臣ニ請求書ヲ差出スヘシ

登錄請求書ニハ第二條乃至第六條ノ事項ニ關スル證明書ヲ添フヘシ

第十條 登錄ヲ請フ者ハ登錄手數料トシテ金貳拾圓ヲ納ムヘシ

他ノ地方裁判所ニ登錄換ヲ爲ストキハ手數料トシテ金拾圓ヲ納ムヘシ

第十一條　登錄ニ關スル規則ハ司法大臣之ヲ定ム

第三章　辯護士ノ權利及義務

第十二條　（明治三十三年法律第十六號ヲ以テ削除）

第十三條　辯護士ハ正當ノ理由ヲ證明スルニ非サレハ裁判所ノ命シタル職務ヲ行フヲ辭スルコトヲ得ス

第十四條　辯護士ハ左ニ掲クル訴訟事件ニ付キ其ノ職務ヲ行フコトヲ得ス

第一　相手方ノ協議ヲ受ケテ之ヲ贊助シ又ハ委任ヲ受ケタル事件

第二　判事檢事奉職中取扱ヒタル事件

第三　仲裁手續ニ依リ仲裁人ト爲リテ取扱ヒタル事件

第十五條　辯護士ハ係爭權利ヲ買受クルコトヲ得ス

第十六條　辯護士ハ訴訟事件ノ委任ヲ承諾セサルトキハ速ニ其ノ旨ヲ委任者ニ通知スヘシ若通告ヲ怠リタルトキハ之カ爲メ生シタル損害ノ責ニ任ス

第十七條　辯護士ハ所屬地方裁判所又ハ其ノ管內區裁判所所在ノ地ニ事務所ヲ定メ之ヲ所屬地方裁判所檢事局ニ屆出ツヘシ

第四章　辯護士會

第十八條　辯護士ハ其ノ所屬地方裁判所毎ニ辯護士會ヲ設立スヘシ

第十九條　辯護士會ハ所屬地方裁判所檢事正ノ監督ヲ受ク

第二十條　辯護士會ニ會長ヲ置ク又副會長ヲ置クコトヲ得

第二十一條　辯護士會ハ每年定期總會ヲ開ク又臨時總會ヲ開クコトヲ得

第二十二條　辯護士會ハ便宜ニ依リ常議員ヲ置クコトヲ得

第二十三條　辯護士會ハ其ノ會則ヲ定メ檢事正ヲ經由シテ司法大臣ノ認可ヲ受クヘシ

辯護士ハ所屬辯護士會ノ會則ヲ遵守スヘシ

第二十四條　辯護士ハ辯護士會ニ加入シタル後ニ非サレハ職務ヲ行フコトヲ得ス

第二十五條　辯護士ハ其ノ所屬地方裁判所管轄外ニ事務所ヲ設ケ職務ヲ行ハムトスルトキハ其ノ職務ヲ行フヘキ地方裁判所所在ノ辯護士會會則ヲ遵守スヘシ

第二十六條　辯護士會會則ニハ會長副會長常議員ノ選擧及其ノ職務、總會、常議員會及其ノ議事ニ關スル規程、辯護士ノ風紀ヲ保持スル規程並ニ醵金及手數料ニ關スル規程其ノ他會務ノ處理ニ必要ナル規程ヲ設クヘシ

第二十七條　會長副會長及常議員選擧ノ結果、總會及常議員會開會ノ日時場所及議題ハ辯護士會ヲシテ之ヲ檢事正ニ屆出ツヘシ

第二十八條　辯護士會ニ於テハ左ノ事項ノ外議スルコトヲ得ス

第一　法律命令又ハ辯護士會會則ニ規定シタル事項

第二　司法大臣又ハ裁判所ヨリ諮問シタル事項

第三　司法上若ハ辯護士ノ利害ニ關シ司法大臣又ハ裁判所ニ建議スル事項

第二十九條　檢事正ハ辯護士會ノ會場ニ臨席スルコトヲ得又會議ノ結果ヲ報告セシムルコトヲ得

第三十條　辯護士會ノ會議ニシテ法律命令及辯護士會會則ニ違フモノアルトキハ司法大臣ハ其ノ議決ヲ無效トシ又ハ其ノ議事ヲ停止スルコトヲ得

第五章　懲戒

第三十一條　辯護士ニシテ此ノ法律又ハ辯護士會會則ニ違背シタル所爲アルトキハ會長ハ常議員會又ハ總會ノ決議ニ依リ懲戒ヲ求ムル爲檢事正ニ申告スヘシ

檢事正ハ會長ノ申告ニ依リ又ハ職權ヲ以テ懲戒訴追ヲ檢事長ニ請求スヘシ

第三十二條　辯護士ニ對スル懲戒事件ニ付テハ管轄控訴院ニ於テ懲戒裁判所ヲ開クヘシ

第三十三條　懲戒罰ハ左ノ四種トス

第一　譴責

第二　百圓以下ノ過料

第三　一年以下ノ停職

第四　除名

第三十四條　懲戒處分ニ付テハ判事懲戒法ノ規定ヲ準用ス

附則

第三十五條　現在ノ代言人ハ本法施行ノ日ヨリ六十日以內ニ辯護士名簿ニ登錄ヲ請フトキハ試驗ヲ要セスシテ辯護士タルコトヲ得

第三十六條　現在ノ代言人本法施行前ニ委任ヲ受ケタル事件ニ付テハ其ノ判決ニ至ルマテ職務ヲ行フコトヲ得

第三十七條　第十二條ノ規定ハ現在ノ代言人ニ之ヲ適用セス

第三十八條　本法ハ明治三十六年五月一日ヨリ施行ス明治十三年司法省甲第一號布達代言人規則ハ本法施行ノ日ヨリ廢止ス

辯護士名簿登錄規則

（明治二十六年四月司法省令第五號）

辯護士名簿登錄規則左ノ通相定ム

辯護士名簿登錄規則

第一條　辯護士名簿ニ登錄ヲ請フ者ハ登錄請求書ニ辯護士法第十條ノ手數料金額ニ相當スル「登記」印紙ヲ貼付シ所屬地方裁判所檢事局ヲ經由シテ之ヲ司法大臣ニ差出ス可シ

登錄換ヲ爲ストキモ亦同シ

第二條　地方裁判所檢事局ニ於テ登錄請求書ヲ受理シタルトキハ檢事正ハ辯護士法第二條乃至第六條ノ要件ヲ調査シ意見ヲ付シ之ヲ司法大臣ニ差出ス可シ

第三條　辯護士名簿ノ登錄ハ司法大臣ノ命令ニ因リ地方裁判所檢事局ニ於テ之ヲ爲ス

登錄ノ取消ハ辯護士ノ請求ニ因リ又辯護士死去シタルトキハ辯護士會長ノ申告ニ因リ又辯護士法第五條ニ該當シ又ハ除名セラレタル者アルトキハ受訴裁判所檢事ノ通知ニ因リ地方裁判所檢事局ニ於テ之ヲ爲ス

第四條　辯護士名簿ニハ左ノ諸件ヲ記入ス可シ

一　辯護士ノ族籍氏名年齡

一　登錄ノ年月日

一　辯護士會加入ノ年月日

一　事務所

一　懲戒

第五條　地方裁判所檢事局ニ於テ辯護士名簿ニ登錄ヲ爲シタルトキハ其登錄ノ番號及年月日ヲ司法大臣ニ報告シ且之ヲ本人ニ通知ス可シ

登錄ヲ取消シタルトキモ亦同シ

第六條　辯護士名簿ニ登錄ヲ爲シタルトキ又ハ登錄ヲ取消シタルトキハ司法大臣ハ官報ヲ以テ之ヲ公告ス

第七條　辯護士會長ハ辯護士會ニ加入シタル者ノ氏名及加入ノ年月日ヲ所屬地方裁判所檢事局ニ届出ツ可シ

辯護士職服圖表（明治二十六年四月司法省令第四號）

辯護士職服左ノ圖表ノ通定ム

辯護士職服表

帽	地色	黑
	飾製式	雲紋 雜形第一圖
上衣	地色	黑
	飾製式	唐草 雜形第二圖

黑絲ヲ以テ縫著ス

白絲ヲ以テ縫著ス

（圖例ハ之ヲ略ス）

辯護士試驗規則（明治二十六年司法省令第九號）

辯護士試驗規則左ノ通相定ム

辯護士試驗規則

第一條　辯護士試驗ハ毎年一回之ヲ行フ但其期日ハ司法大臣之ヲ定メ三箇月前官報ヲ以テ之ヲ公告ス

第二條　試驗委員長及委員ハ判事檢事司法省高等官ノ中ヨリ試驗擧行毎ニ司法大臣之ヲ命ス

第三條　試驗委員長ハ委員ヲ監督シ試驗ニ關スル一切ノ事務ヲ總理ス

第四條　試驗委員附屬ノ書記ハ司法屬又ハ裁判所書記ノ中ヨリ試驗擧行毎ニ司法大臣之ヲ命ス

第五條　辯護士法第五條ニ該當スル者ハ試驗ヲ受クルコトヲ得ス

第六條　試驗志願者ハ其願書ニ左ノ證書ヲ添ヘ試驗ヲ受クヘキ裁判所ノ檢事局ヲ經由シテ之ヲ試驗委員長ニ差出ス可シ

一　履歷書

二　辯護士法第五條第一號但書及ヒ第四號ニ該ル者ハ其復權又ハ債務ノ辨償ヲ終ヘタル證明書

第七條　試驗志願者ハ試驗手數料トシテ金拾圓ヲ納ム可シ但其手數料ハ「登記」印紙ヲ用ヰ之ヲ願書ニ貼付ス可シ

手數料ハ願書ヲ取下ケ又ハ試驗ヲ受ケサルトキト雖モ之ヲ還付セス

第七條ノ二　試驗ヲ分チテ豫備試驗及本試驗トシ尙身體檢査ヲ行フ（明治三十八年司法省令第十四號ヲ以テ本條ヲ新設シ同四十二年同省令第十三號ヲ以テ全條改正）

豫備試驗ニ合格シタル者ニ非サレハ本試驗ヲ行ハス

身體檢査ニ合格セサル者ハ落第トス

第七條ノ三　豫備試驗ハ受驗者ノ本試驗ヲ受クルニ相當ナル普通ノ學識ヲ試驗スルヲ以テ目的トス（明治三十八年司法省令第十四號ヲ以テ本條ヲ新設ス）

第七條ノ四　豫備試驗ハ左ノ科目ニ就キ之ヲ施行ス（同上）

一　論文

二　外國語

外國語ハ英語佛語及獨語ノ中ニ就キ一種ヲ選ハシム

第七條ノ五　豫備試驗ノ方法ハ試驗委員長之ヲ定ム（同上）

第八條　本試驗ハ受驗者ノ專門ノ學識ヲ試驗スルヲ以テ目的トシ筆記口述ノ二樣トス（同上法令ヲ以テ本項改正）

筆記試驗ハ民法、商法、刑法、民事訴訟法ノ各科目ニ就キ之ヲ施行ス

口述試驗ハ民法、商法、刑法、民事訴訟法、刑事訴訟法ノ中少クトモ三科目ニ就キ之ヲ施行ス

第九條　試驗ハ司法省ニ於テ之ヲ行フ（明治三十六年六月司法省令第二十號ニテ全條改正）

第十條　筆記試驗ニ合格シタル者ニ非サレハ口述試驗ヲ行ハス

第十一條　試驗ニ關スル細則ハ試驗擧行毎ニ試驗委員ニ於テ之ヲ定ム可シ

第十二條　試驗委員長ハ試驗ノ成績及ヒ及第者ノ氏名ヲ司法大臣ニ報告スヘシ

第十三條　試驗及第者ノ氏名ハ官報ヲ以テ之ヲ公告ス

第十四條　試驗及第者ニハ及第證書ヲ授與ス

第十五條　試驗願書及ヒ履歷書ノ書式ハ左ノ如シ

書式

試驗願書（用紙美濃紙）

族籍

氏名

何年何箇月

私儀辯護士志願ニ付試驗相受度別紙履歷書及證明書相添此段奉願候也

年月日

現住所

氏名印

辯護士試驗委員長氏名殿

履歷書（用紙美濃紙）

族籍

氏名

出生年月日

學事

一何年何月ヨリ何地何某ニ就キ又ハ何學校ニ入リ何年何月迄何學ヲ修メ又ハ何學科ヲ卒業スルノ類

一何年何月ヨリ何官私立學校ニ入リ何學科ヲ修業シ何年何月卒業ス其證書寫別紙ノ如シノ類

一何年何月何學校若クハ其他ニ於テ何々ノ試驗ヲ受ケ及第ス其證書寫別紙ノ如シノ類

職業

一何年何月ヨリ何年何月迄何會社ノ役員トナリ又ハ何學校教員若クハ何官廳何官ト爲リタルノ類

一何年何月何地ニ於テ何々ノ事由ノ爲メ何廳ヨリ賞ヲ受ケ何年何月何々ノ事由ノ爲メ何地ニ於テ罰又ハ刑ヲ受ク其辭令又ハ宣告寫別紙ノ如シノ類

右ノ各項中記載ス可キ事ナキ者ハ其旨ヲ記載ス可シ

年　月　日　　氏　　名　印

現住所

辯護士試驗規則ノ筆記試驗取扱ニ關スル件

（明治二十六年七月司法省訓令第一號）

明治二十六年（五月）司法省令第五號辯護士試驗規則第九條ノ筆記試驗ハ檢事局ニ於テ取扱フモノトス

「代言」試驗志願者寫眞差出方

（明治二十三年七月司法省告示第十八號）

「代言」試驗志願者ハ自己ノ寫眞一葉裏面ニ其氏名ヲ自書シ出願ノ際之ヲ檢事ニ差出スヘシ

同上告示ニ關スル訓令

（明治二十三年七月司法省訓令第一號）

試驗ノ儀ハ受驗者多數ニ涉ル節ハ試驗場取締ノ行屆カサルヲ僥倖トシ他人ヲ出シ答案ヲ代作セシムル等ノ弊有之趣仍テ「代言」試驗志願者ハ自筆氏名記入ノ寫眞一葉ヲ差出スヘキ旨告示セシニ付テハ右差出セシ寫眞ノ儀ハ各檢事手元ニ止メ置キ防奸ノ用ニ供スヘシ

第二章　臺灣ニ於ケル特則

臺灣辯護士規則

（明治三十三年一月律令第五號）

臺灣總督府評議會ノ議決ヲ經タル臺灣辯護士規則勅裁ヲ得テ茲ニ之ヲ發布ス

第一條　辯護士ハ當事者ノ委任ヲ受ケ又ハ臺灣總督府法院ノ命令ニ從ヒ臺灣總督府法院ニ於テ法律命令ニ定メタル職務ヲ行フモノトス

第二條　辯護士ニハ明治二十六年法律第七號辯護士法ノ規定ヲ準用ス

第三條　辯護士ノ懲戒處分ニ付テハ明治三十一年律令第十八號臺灣總督府法院判官懲戒令ノ規定ヲ準用ス但懲戒委員會ハ覆審法院檢察官長ノ申立ニ依リ之ヲ開始ス（明治三十四年十二月律令第二十三號ヲ以テ本條ヲ改ム）

第四條　此規則ハ明治三十三年二月一日ヨリ之ヲ施行ス

臺灣辯護士職服規程

（明治三十三年一月臺灣總督府令第六號）

辯護士職服規程左ノ通相定ム

辯護士職服規程

第一條　辯護士ハ公開シタル法廷ニ於テハ一定ノ職服ヲ著スヘシ

第二條　辯護士ノ職服ハ明治二十六年（四月）司法省令第四條ニ準據ス

附則

第三條　此規程ハ明治三十三年一月一日ヨリ施行ス但明治三十三年五月三十一日マテ職服ノ著用ヲ猶豫スルコトヲ得

第四條　「訴訟代人」公開シタル法廷ニ於テ其職務ヲ行フトキハ此規程ヲ適用ス

臺灣辯護士名簿登錄規則

（明治三十三年一月臺灣總督府令第五號）

辯護士名簿登錄規則左ノ通相定ム

辯護士名簿登錄規則

第一條　辯護士名簿ニ新規登錄ヲ請フ者ハ登錄請求書ニ登錄稅法第七條ノ登錄稅ニ相當スル印紙ヲ貼付シ所屬地方法院檢察局ヲ經由シテ之ヲ臺灣總督ニ差出スヘシ

第二條　地方法院檢察局ニ於テ登錄請求書ヲ受理シタルトキハ檢察官長ハ辯護士法第二條乃至第六條ノ要件ヲ調査シ意見ヲ付シ之ヲ臺灣總督ニ差出スヘシ

第三條　辯護士名簿ノ新規登錄登錄換並取消ハ臺灣總督ノ令令ニ依リ地方法院檢察官長之ヲ爲ス

辯護士死去シ又ハ辯護士法第五條ニ該當シ又ハ懲戒裁判ニ依リ除名セラレタルトキハ地方法院檢察官長ハ辯護士會長ノ申告ニ依リ又ハ職權ヲ以テ直ニ登錄ノ取消ヲ爲スヘシ

第四條　辯護士名簿ニハ左ノ諸件ヲ記入スヘシ

一　辯護士ノ族籍氏名年齡

二　登錄ノ番號及年月日

三　辯護士會加入ノ年月日

四　事務所

五　懲戒

第五條　地方法院檢察官長辯護士名簿ニ新規登錄又ハ登錄換ヲ爲シタルトキハ其登錄ノ番號及年月日ヲ臺灣總督ニ報告シ且之ヲ本人ニ通知スヘシ

登錄ヲ取消シタルトキ亦同シ

第六條　辯護士名簿ニ新規登錄又ハ登錄換ヲ爲シタルトキ又ハ登錄ヲ取消シタルトキハ臺灣總督ハ府報ヲ以テ公告スヘシ

第七條　辯護士會長ハ辯護士會ニ加入シタル者ノ氏名及加入ノ年月日ヲ所屬地方法院檢察局ニ屆出ツヘシ

第八條　辯護士名簿ハ別記雛形ノ通調製スヘシ

附則

第九條　此規則ハ明治三十三年二月一日ヨリ施行ス

（別記雛形ハ之ヲ略ス）

第三章　韓國ニ於ケル特則

辯護士規則

（明治四十二年十月統監府令第三十四號）

辯護士規則左ノ通定ム

辯護士規則

第一條　統監府裁判所ニ於テ辯護士ノ職務ヲ行フ者ハ辯護士名簿ニ登錄セラルルコトヲ要ス

第二條　各地方裁判所檢事局ニ辯護士名簿ヲ置ク

辯護士ハ其ノ氏名ヲ登錄シタル地方裁判所ノ所屬トス

第三條　左ニ記載シタル者ハ辯護士名簿ノ登錄ヲ申請スルコトヲ得

一　辯護士法ニ依リ辯護士タルノ資格ヲ有スル者

二　韓國人辯護士試驗ニ合格シタル者

三　韓國人ニシテ韓國ノ判事、檢事、辯護士又ハ統監府裁判所ノ判事、檢事タリシ者

第四條　左ニ記載シタル韓國人ハ辯護士名簿ニ登錄セラルルコトヲ得ス

一　禁獄又ハ禁錮以上ノ刑ニ處セラレタル者

二　懲戒處分ニ因リ判事、檢事若ハ辯護士ノ資格ヲ喪失シタル者

第五條　辯護士名簿ニ登錄ヲ請フ者ハ登錄ヲ受ケムトスル地方裁判所檢事局ヲ經由シテ統監ニ申請書ヲ差出スヘシ

登錄申請書ニハ資格ニ關スル證明書ヲ添附スヘシ

第六條　地方裁判所檢事局ニ於テ登錄申請書ヲ受理シタルトキハ檢事正ハ第三條及第四條ノ要件ヲ調査シ意見ヲ附シテ之ヲ統監ニ差出スヘシ

第七條　辯護士名簿ノ登錄ハ統監ノ命令ニ依リ地方裁判所檢事局之ヲ爲ス

第八條　辯護士名簿ノ登錄ノ取消ハ左ノ場合ニ於テ所屬地方裁判所檢事局之ヲ爲ス

一　申請アリタルトキ

二　死亡シタルトキ

三　除名セラレタルトキ

第四條第四條ニ該當シタルトキ

第九條　辯護士名簿ノ登錄又ハ其ノ取消ヲ申請スル者ハ左ノ區別ニ從ヒ手數料ヲ納ムヘシ

一　新規登錄　金二十圓

二　登錄換　金十圓

三　登錄ノ取消　金一圓

手數料ハ納付ハ申請書ニ收入印紙ヲ貼用シテ之ヲ爲スヘシ

第十條　地方裁判所檢事局ニ於テ辯護士名簿ニ登錄ヲ爲シタルトキハ其ノ登錄ノ番號及年月日ヲ統監ニ報告シ且之ヲ本人ニ通知スヘシ

登錄ヲ取消シタルトキ亦前項ニ準スヘシ

第十一條　辯護士名簿ノ登錄又ハ其ノ取消ヲ爲シタルトキハ統監府公報ヲ以テ之ヲ公告ス

第十二條　辯護士ハ所屬地方裁判所又ハ其ノ管內ノ區裁判所所在地ニ事務所ヲ設ケ之ヲ所屬地方裁判所檢事局ニ屆出ツヘシ

數箇所ニ事務所ヲ設クルトキハ所屬地方裁判所檢事局及事務所所在地ノ地方裁判所檢事局ニ之ヲ屆出ツヘシ

第十三條　辯護士ハ所屬地方裁判所毎ニ辯護士會ヲ設クヘシ但シ五人ニ滿タサル場合ハ此ノ限ニ在ラス

前項但書ノ場合ニ於テ辯護士五名以上ニ達シタルトキハ三十日以內ニ辯護士會ヲ設クヘシ

第十四條　監督官ハ事情ニ因リ韓國人辯護士ナシテ別ニ辯護士會ヲ設ケシメ又ハ韓國人辯護士ニ辯護士會ニ加入スルコトヲ免シ若ハ其ノ退會ヲ許スコトヲ得

第十五條　辯護士ハ辯護士會ニ加入シタル後ニアラサレハ其ノ職務ヲ行フコトヲ得ス但シ辯護士會ノ設立ナキトキハ其ノ限ニ在ラス

第十六條　辯護士及辯護士會ハ所屬地方裁判所檢事正ノ監督ヲ受ク

第十七條　監督官ハ辯護士ノ職務ニ關スルト否トヲ問ハス其ノ品位ヲ汚損スヘキ行狀ニ付諭告ヲ爲スコトヲ得

第十八條　監督官ハ辯護士ノ會議ハ臨席シ意見ヲ述フルコトヲ得

第十九條　辯護士會ニ會長ヲ置ク又常議員ヲ置クコトヲ得

會長及常議員ハ辯護士ノ總會ニ於テ之ヲ選擧シ監督官ノ認可ヲ受クヘシ

第二十條　辯護士會ハ其ノ會則ヲ定メ監督官ヲ經由シテ統監ノ認可ヲ受クヘシ

第二十一條　辯護士會會則ニハ會長、常議員ノ選擧、職務、任期ニ關スル規程、議事ニ關スル規程、辯護士ノ風紀保持ニ關スル規程並報酬金ニ關スル規程其ノ他會務ノ處理ニ必要ナル規程ヲ設クヘシ

第二十二條　辯護士會ノ職ヲナキ場合又ハ第十四條ニ依リ辯護士會加入ヲ免シ若ハ其ノ退會ヲ許シタル場合ニ於テハ監督官ハ辯護士會會則ニ代ルヘキ命令ヲ發スヘシ

第二十三條　第十二號第二項ノ場合ニハ事務所所在地ノ地方裁判所檢事正ノ監督ヲ受ケ且其ノ地ノ辯護士會會則又ハ之ニ代ルヘキ監督官ノ命令ヲ遵守スヘシ

前項ノ規定ハ所屬地方裁判所檢事正ノ監督權及必要ナル限度ニ於テ所屬辯護士會會則又ハ之ニ

代ルヘキ監督官ノ命令ヲ遵守スヘキ義務ニ影響ヲ及ホスコトナシ

第二十四條　辯護士會議ノ日時、場所及議題ハ辯護士會ヨリ豫メ之ヲ監督官ニ屆出ツヘシ

第二十五條　辯護士會議ニ於テハ左ノ事項ノ外議スルコトヲ得ス

一　法令又ハ辯護士會會則ニ規定シタル事項

二　統監、裁判所又ハ檢事局ヨリ諮問シタル事項

第二十六條　辯議士會議ノ議決ニシテ法令又ハ辯護士會會則ニ違反スルモノアルトキハ統監ハ之ヲ無效トスルコトヲ得

第二十七條　辯護士本令又ハ辯護士會會則若ハ監督官ノ命令ニ違反スル行爲アルトキハ監督官ハ會長ノ申告ニ依リ又ハ職權ヲ以テ懲戒處分ヲ統監ニ申請スヘシ

第二十八條　懲戒ハ左ノ四種トシ統監之ヲ行フ

一　譴責

二　三百圓以下ノ過料

三　一年以下ノ停職

四　除名

第二十九條　懲戒處分ハ統監府公報ヲ以テ之ヲ公告ス

第三十條　辯護士名簿ハ別記樣式ニ依ル

附則

第三十一條　本令ハ明治四十二年十一月一日ヨリ之ヲ施行ス

第三十二條　明治四十二年統監府令第九號辯護士規則ハ之ヲ廢止ス

第三十三條　本令施行ノ際理事廳及韓國裁判所檢事局ニ於テ辯護士名簿ニ登錄アル者ハ本令施行ノ日ヨリ三十日內ニ本令ニ規定シタル辯護士名簿ノ登錄ヲ申請スルコトヲ得

前項ノ場合ニ於テハ手數料ヲ免除ス

第三十四條　前條ノ申請ヲ爲シタル者ハ其ノ申請ノ日ヨリ辯護士ノ職務ヲ行フコトヲ得

第三十五條　本令施行前ニ係ル辯護士ノ所爲ト雖本令ニ照シ懲戒スヘキモノアルトキハ本令ニ依リ之ヲ懲戒ス

第三十六條　明治四十二年七月二十四日以前ニ理事官ノ許可ヲ得タル訴訟代理業者ハ當分ノ內其ノ理事廳所在地ヲ管轄スル地方裁判所及其ノ管內區裁判所ニ於テ訴訟代理ヲ爲スコトヲ得

第十二條第一項、第十六條、第十七條及第二十二條ノ規定ハ前項ノ訴訟代理業者ニ之ヲ準用ス

第三十七條　監督官ハ前條ノ訴訟代理業者ニ不適當ノ所爲アリト認メタルトキハ何時ニテモ其ノ業務ヲ禁スルコトヲ得

（別記樣式ハ之ヲ略ス）

韓國人辯護士試驗規則

（明治四十三年四月統監府令第十六號）

韓國人辯護士試驗規則左ノ通定ム

韓國人辯護士試驗規則

第一條　韓國人辯護士試驗ハ韓國人辯護士試驗委員之ヲ行フ

第二條　試驗ノ期日及場所ハ統監府司法廳長官之ヲ定メ統監府公報及韓國ノ官報ヲ以テ之ヲ公告ス

第三條　韓國人ニシテ試驗ヲ受ケムトスル者ハ滿二十歲以上ノ男子ニシテ帝國又ハ韓國ノ學校ニ於テ三學年以上法律學科ヲ修メタル者タルコトヲ要ス

第四條　辯護士規則第四條ニ該當スル者ハ試驗ヲ受クルコトヲ得ス

第五條　試驗委員ハ十人以內トシ中一人ヲ委員長トス

第六條　委員長及委員ハ統監府司法廳高等官及統監府判事、統監府檢事ノ中ヨリ試驗擧行毎ニ統監之ヲ命ス

試驗委員附屬ノ書記ハ統監府司法廳屬又ハ統監府裁判所書記ノ中ヨリ試驗擧行毎ニ統監府司法廳長官之ヲ命ス

第七條　委員長ハ試驗ニ關スル一切ノ事務ヲ管理ス

第八條　試驗志願者ハ志願書ニ左ノ書面ヲ添ヘ之ヲ試驗委員長ニ差出スヘシ

一　履歷書

二　受驗資格ニ關スル證明書

第九條　試驗志願者ハ手數料トシテ金十圓ヲ納ムヘシ但シ其ノ手數料ハ收入印紙ヲ用ヰ之ヲ志願書ニ貼付スヘシ

手數料ハ志願書ヲ取下ケ又ハ試驗ヲ受ケサルトキト雖之ヲ還付セス

第十條　試驗ハ筆記、口述ノ二種トス

口述試驗ハ筆記試驗ニ合格シタル者ニ限リ之ヲ行フ

第十一條　筆記試驗ハ民法、商法、刑法、民事訴訟法、刑事訴訟法、行政法及國際法ノ各科目ニ就キ之ヲ行フ

口述試驗ハ前項ノ科目中三科目以上ニ就キ之ヲ行フ

第十二條　試驗合格者ノ氏名ハ統監府公報及韓國官報ヲ以テ之ヲ公告ス

第十三條　試驗合格者ニハ合格證書ヲ授與ス

第十四條　委員長ハ試驗ノ結果ヲ統監ニ報告スヘシ

第十五條　委員長、委員及附屬ノ書記ニハ手當ヲ給ス

附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

第四章　關東州ニ於ケル特則

關東州辯護士令（明治四十一年九月勅令第二百十四號）

朕關東州辯護士令ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

關東州辯護士令

第一條　辯護士ニ關シテハ辯護士法ニ依ル但シ同法中司法大臣ノ職務ハ第三條ノ場合ヲ除クノ外關東都督之ヲ行ヒ地方裁判所ノ職務ハ關東都督府地方法院、地方裁判所檢事局及檢事正ノ職務ハ同法院檢察官之ヲ行フ

第二條　辯護士ノ懲戒ハ關東都督府高等法院檢察官ノ申立ニ因リ同法院判官全員ヨリ成ル會議ノ決議ニ基キ關東都督之ヲ行フ

附則

本令ハ明治四十一年十月一日ヨリ之ヲ施行ス

民

法

目次

第一編　民法及同施行法

民法……一
第一編　總則……一
第一章　人……二
第一節　私權ノ享有……二
第二節　能力……二
第三節　住所……二
第四節　失踪……五
第二章　法人……七
第一節　法人ノ設立……七
第二節　法人ノ管理……一一
第三節　法人ノ解散……一三
第四節　罰則……一五
第三章　物……一六
第四章　法律行爲……一七
第一節　總則……一七

第二節　意思表示……一七
第三節　代理……一八
第四節　無效及ビ取消……二一
第五節　條件及ビ期限……二二
第五章　期間……二四
第六章　時效……二四
第一節　總則……二五
第二節　取得時效……二六
第三節　消滅時效……二七
第二編　物權……二九
第一章　總則……二九
第二章　占有權……二九
第一節　占有權ノ取得……二九
第二節　占有權ノ效力……二九
第三節　占有權ノ消滅……三〇
第四節　準占有……三三
第三章　所有權……三三
第一節　所有權ノ限界……三三
第二節　所有權ノ取得……三八

第三節　共有……三九
第四章　地上權……四一
第五章　永小作權……四二
第六章　地役權……四三
第七章　留置權……四六
第八章　先取特權……四七
第一節　總則……四七
第二節　先取特權ノ種類……四七
第一款　一般ノ先取特權……四七
第二款　動產ノ先取特權……四八
第三款　不動產ノ先取特權……五〇
第三節　先取特權ノ順位……五一
第四節　先取特權ノ效力……五二
第九章　質權……五三
第一節　總則……五三
第二節　動產質……五四
第三節　不動質……五五
第四節　權利質……五五
第十章　抵當權……五七

第一節 總則……五七
第二節 抵當權ノ效力……五七
第三節 抵當權ノ消滅……六一
第三編 債權……六一
第一章 總則……六二
第一節 債權ノ目的……六二
第二節 債權ノ効力……六三
第三節 多數當事者ノ債權……六六
第一款 總則……六六
第二款 不可分債務……六七
第三款 連帶債務……六九
第四款 保證債務……七三
第四節 債權ノ讓渡……七四
第五節 債權ノ消滅……七四
第一款 辨濟……七九
第二款 相殺……八〇
第三款 更改……八一
第四款 免除……八一
第五款 混同……八一

第二章 契約……八一
第一節 總則……八二
第一款 契約ノ成立……八二
第二款 契約ノ効力……八四
第三款 契約ノ解除……八七
第二節 贈與……八七
第三節 賣買……八七
第一款 總則……八八
第二款 賣買ノ効力……九一
第三款 買戻……九三
第四節 交換……九三
第五節 消費貸借……九四
第六節 使用貸借……九五
第七節 賃貸借……九五
第一款 總則……九六
第二款 賃貸借ノ効力……九八
第三款 賃貸借ノ終了……九九
第八節 雇傭……一〇一
第九節 請負……一〇一

第十節　委任……一〇二
第十一節　寄託……一〇四
第十二節　組合……一〇六
第十三節　終身定期金……一〇九
第十四節　和解……一〇九
第三章　事務管理……一一〇
第四章　不當利得……一一一
第五章　不法行爲……一一二
民法親族編及相續編……一一四
第四編　親族……一一四
第一章　總則……一一五
第二章　戶主及ビ家族……一一六
第一節　總則……一一六
第二節　戶主及家族ノ權利義務……一一八
第三節　戶主權ノ喪失……一一九
第三章　婚姻……一二二
第一節　婚姻ノ成立……一二二
第一款　婚姻ノ要件……一二二
第二款　婚姻ノ無効及取消……一二三

第三節　婚姻ノ効力……一二五
第三節　夫婦財産制……一二六
第一款　總則……一二六
第二款　法定財産制……一二七
第四節　離婚……一二八
第一款　協議上ノ離婚……一二八
第二款　裁判上ノ離婚……一二九
第四章　親子……一三〇
第一節　實子……一三〇
第一款　嫡出子……一三〇
第二款　庶子及私生子……一三一
第二節　養子……一三二
第一款　養組ノ要件……一三二
第二款　養組ノ無効及ビ取消……一三四
第三款　養組ノ効力……一三六
第四款　離縁……一三六
第五章　親權……一三八
第一節　總則……一三九
第三節　親權ノ効力……一三九

第三節　親權ノ喪失……一四一
第六章　後見……一四一
第一節　後見ノ開始……一四二
第二節　後見ノ機關……一四二
第一款　後見人……一四二
第二款　後見監督人……一四四
第三節　後見ノ事務……一四五
第四節　後見ノ終了……一四九
第七章　親族會……一五〇
第八章　扶養ノ義務……一五一
第五編　相續……一五三
第一章　家督相續……一五三
第一節　總則……一五三
第二節　家督相續人……一五四
第三節　家督相續ノ効力……一五八
第二章　遺産相續……一五九
第一節　總則……一五九
第二節　遺産相續人……一五九
第三節　遺産相續ノ効力……一六〇

第一款　總則……一六〇
第二款　相續分……一六〇
第三款　遺産ノ分割……一六二
第三章　相續ノ承認及ヒ抛棄……一六二
第一節　總則……一六二
第二節　承認……一六三
第一款　單純承認……一六四
第二款　限定承認……一六四
第三節　抛棄……一六六
第四章　財産ノ分離……一六七
第五章　相續人ノ曠缺……一六九
第六章　遺言……一七〇
第一節　總則……一七〇
第二節　遺言ノ方式……一七一
第一款　普通方式……一七一
第二款　特別方式……一七二
第三節　遺言ノ効力……一七五
第四節　遺言ノ執行……一七八
第五節　遺言ノ取消……一八一

第七章 遺留分……一八一
民法施行法……一八四
第一章 通則……一八四
第二章 總則編ニ關スル規定……一八七
第三章 物權編ニ關スル規定……一九〇
第四章 債權編ニ關スル規定……一九三
第五章 親族編ニ關スル規定……一九四
第六章 相續編ニ關スル規定……一九七

第二編 民法ニ關スル法規

第一章 人

職多非人等ヲ廢シ平民同樣タルヘキ事……二〇〇
內務大臣ノ主管ニ屬スル社團財團ノ法人タルニ付許可認可ヲ經ヘキ場合及申請方……二〇〇
宗教ノ宣布又ハ宗教上ノ儀式執行ヲ目的トスル法人ノ設立等ニ關スル規程……二〇一
司法大臣ノ主管ニ屬スル社團財團タル法人ニ係ル申請書等差出方ノ件……二〇二
文部大臣ノ主管ニ屬スル法人ノ設立及監督ニ關スル規程……二〇二
農商務省ノ主管ニ屬スル社團及財團ノ法人ニ關スル件……二〇四

馬政局所管ノ社團又ハ財團ヲ法人トシテ設立スルトキ申請方……二〇四
法人ノ設立及監督ニ關スル規程……二〇四

第二章 著作權

第一節 通則

著作權法……二〇六
第一章 著作者ノ權利……二〇六
第二章 僞作……二一〇
第三章 罰則……二一二
第四章 附則……二一三
著作權法ヲ臺灣ニ施行スルノ件……二一四
著作權者不明ノ著作ニ關スル件……二一四
著作權ニ關スル登錄手續……二一四
著作權登錄簿閲覽日指定……二一七
關東州及帝國カ治外法權ヲ行使スルコトヲ得ル外國ニ於ケル特許權乃至著作權ノ保護ニ關スル件……二一八

第二節 韓國ニ於ケル特則

韓國著作權令……二一九
同 施行規則……二二〇

第三章 遺失物及埋藏物

第一節 通則……二二六
遺失物法……二二六
同 施行細則(司法省令)……二二九

第二節 臺灣ニ於ケル特則
遺失物法ヲ臺灣ニ施行スルノ件……二三〇
遺失物法施行細則(臺灣總督府令)……二三一

第四章 立木
立木ニ關スル件……二三二

第五章 建物保護
建物保護ニ關スル件……二三六

第六章 土地

第一節 所有權

第一款 通規
外國人ノ土地所有權ニ關スル件……二三七

第二款 臺灣ニ於ケル特則
外國人ノ土地取得ニ關スル件……二三八
蕃地ニ關スル件……二三九

第二節 地上權
地上權ニ關スル件……二三九

第三節 永代借地權
永代借地權ニ關スル件……二三九ノ二
帝國ノ臣民又ハ法人ニ於テ政府ノ永代借地券ヲ以テ外國人又ハ外國法人ノ爲ニ設定シタル永代借地權ヲ取得シタル場合ニ關スル件……二三九ノ五

第四節 大租權
大租權確定ニ關スル件……二三九ノ六

明治三十六年律令第九號施行規則……二四〇
政府ノ取得シタル土地ニ對スル大租權消滅ニ關スル件……二四〇ノ三

第七章 質

記名ノ債權ヲ目的トスル質權設定ニ關スル件……二四〇ノ三

第八章 先取特權

立木ノ先取特權ニ關スル件……二四〇ノ四

第九章 抵當

工場抵當法……二四〇ノ四
鑛業抵當法……二五〇
鐵道抵當法……二五三
第一章 總則……二五三
第二章 登錄……二五八
第三章 強制競賣及強制管理……二六一
第四章 罰則……二七〇
附則……二七〇

同 施行法規則……二七〇
軌道ノ抵當ニ關スル件……二七六
軌道抵當取扱規則……二七七

第十章 債權

第一節 讓渡

神社寺院寺廟等ノ財產ノ賣渡其他處分ヲ爲サントスル時ノ手續……二七八

第二節 貸借

社寺ノ負債ハ氏子檀家ノ連署必要……二七九
土地貸借ノ期間ニ關スル件……二七九
利息制限法(布告)……二七九ノ二
利息制限規則(律令)……二七九ノ二
臺灣島人及淸國人ニ民法中適用ノ件……二七九ノ三

第三節 辨濟

臺灣島人及淸國人ニ民法中適用……二七九ノ三

第四節 確定日附

確定日附簿及ヒ日附アル印章調製方……二八〇
私署證書ニ確定日附ヲ附スル事ヲ登記所ニ請求スル手數料ニ關スル件……二八三
確定日附簿及日附アル印章調製方(臺灣總督府令)……二八三
私署證書ニ確定日ヲ附スル事ヲ請求スル手數料……二八四

第十一章 人事

第一節 戸主

戸主ニ非サル者爵ヲ授ケラレタル場合ニ關スル件……二八四

第二節 婚姻

陸軍現役軍人婚姻條例……二八五
陸軍現役軍人婚姻出願及許可手續……二八六
海軍現役軍人結婚條例……二八八
同 施行手續……二八八

第三節 後見

救育所ニ在ル孤兒ノ後見職務ニ關スル件……二九〇
救育所ニ在ル孤兒ノ後見職務執行ニ關スル特例ノ件……二九一
棄兒、迷兒、遺兒、其他父又ハ母ニ於テ親權ヲ行ヒ難キ狀況ニアル未成年者ニシテ救育所ニ在ルモノノ後見ニ關スル件……二九一

第四節 遺言

民法第千七十九條及第千八十一條ノ規定ニ依ル遺言ノ確認ニ關スル件……二九二

第五節 年齢計算

年齢計算ニ關スル件……二九三
同上法令ヲ臺灣ニ施行ノ件……二九四

第六節 不法行爲

失火ノ責任ニ關スル件……二九四

第三編 競賣法

競賣法……二九五
第一章 通則……二九五
第二章 動産ノ競賣……二九五
第三章 不動産ノ競賣……二九九
第四章 船舶ノ競賣……三〇二
第五章 增價競賣……三〇二

土地抵當權アル外國人、增價競賣請求ノ件……三〇五

第四編 登記

第一章 不動產登記

第一節 本則

不動產登記法……三〇五
第一章 總則……三〇六
第二章 登記所及ヒ登記官吏……三〇七
第三章 登記ニ關スル帳簿……三〇八
第四章 登記手續……三一一
第一節 通則……三一一
第二節 所有權ニ關スル登記手續……三二〇
第三節 所有權以外ノ權利ニ關スル登記手續……三二八
第四節 抹消ニ關スル登記手續……三三三
第五節 抗告……三三五
附則……三三六
不動產登記法施行細則……三三七

第一章 登記ニ關スル帳簿……三三七
第二章 登記申請ノ手續……三四三
第三章 登記手續……三四五
附則……三五〇
一定ノ町村又ハ其大字ノ土地登記簿ニ關スル件……三五一
土地ヲ分合シテ賣買讓與賃入スル者登記請求前ニ爲スヘキ手續……三五一
債務者ニ代位スル債權者ノ登記申請ニ關スル件……三五二

第二節 特則

工場抵當登記取扱手續……三五二
鑛業抵當登記取扱手續……三五六
立木登記規則……三五七

第三節 登記ノ囑託

各省ノ所管ニ係ル不動產ノ登記ノ囑託ニ關スル件……三六〇ノ一
同上法令ニ依ル囑託官吏ノ指定……三六〇ノ一
同上……三六〇ノ二
同上……三六〇ノ二

同上……三六〇ノ二
同上……三六〇ノ二
同上……三六〇ノ三
同上……三六〇ノ三
同上……三六〇ノ三
同上……三六〇ノ四

第四節　雜則

登記事務ノ取扱ニ關スル件……三六一
登記事務費ハ國庫ノ支出トス……三六一
土地登記簿建物登記簿及商業登記簿ノ謄本又ハ抄本ノ請求等ニ關スル手數料……三六一

第二章　永代借地權登記

外國人又ハ外國法人ノ物權ノ登記ニ關スル件……三六二
永代借地權ニ關スル件……三六三
帝國ノ臣民又ハ法人ニ於テ政府ノ永代借地券ヲ以テ外國人又ハ外國法人ノ爲ニ設定シタル永代借地權ヲ取得シタル場合ニ關スル件……三六六
永代借地及永代借地ノ上ニ存スル登記取扱手續……三六七
政府ノ永代借地券ヲ以テ外國人又ハ外國法人ノ爲ニ設定シタル永代借地權ヲ取得シ又ハ其土地ノ所有權ヲ取得シタル時通知ノ件……三六九
同上法令ニ依ル通知ヲ受ケタル時土地臺帳登錄ノ件……三六九
永代借地及永代借地ノ上ニ存スル建物ノ登記簿ノ謄本抄本等ノ交付又ハ閲覽ノ請求ニ關スル手數料ノ件……三六九

第三章　整理地登記

整理地登記規則……三七〇
整理地登記取扱手續……三七五

第四章　臺灣ニ於ケル特則

第一節　通規

臺灣不動產登記規則……三七七
臺灣不動產登記規則ニ依ル建物ノ登記ニ關スル取扱手續……三七八
登記施行手續ニ關シ臺灣ニ適用ノ司法省令ニ改正アリタル場合ニ於ケル規程……三七九
土地ノ登記ノ囑託ニ就キ官吏指定ノ件……三七九
建物及船舶所有者ノ印鑑差出ニ關スル件……三八〇
土地登記簿建物登記簿及商業登記簿等ノ謄本抄本ノ交付請求ニ關スル件……三八〇
地方法院及其出張所ノ管內ニ登記所設置ニ關スル件……三八一
地方法院及其出張所管內登記所ノ登記及公證事務取扱ニ關スル件……三八一

第二節 土地登記

臺灣土地登記規則……三八二
同 施行規則……三八四

第三節 永代借地整理

永代借地調査規則……三八九
同 施行規則……三九一
永代借地調査委員會規則……三九二
同 施行規則……三九三
臺灣永代借地整理規則……三九五
同 施行規則……三九六

第五章 法人及夫婦財産契約登記

法人及夫婦財産契約登記取扱手續……三九九
法人及夫婦財産契約登記簿ノ謄本又ハ抄本ノ調製方……四〇一
法人登記簿及夫婦財産契約登記簿ノ謄本又ハ抄本ノ請求ニ關スル手數料……四〇一
法人及夫婦財産契約ニ關スル登記取扱手續……四〇二
法人登記簿及夫婦財産契約登記簿ノ謄本又ハ抄本ノ交附請求ニ關スル件……四〇三

第五編 非訟事件手續

非訟事件手續法……四〇三
非訟事件手續法ニ依リテ謄本又ハ抄本ノ交附ヲ申請スル者ノ納ムヘキ手數料ニ關スル件……四四三
外國人ノ遺産ノ保存處分ニ關スル手續……四四三
相續人曠缺ノ爲ニ國庫ニ歸屬シタル財産ノ取扱ニ關スル件……四四四
相續人曠缺ノ爲メ國庫ニ歸屬シタル財産中森林原野ノ取扱ニ關スル件……四四五
死亡者ノ財産保護ニ關スル日英條約……四四五

第六編 國籍

國籍法……四四九
國籍喪失者ノ權利ニ關スル件……四五三
本邦人、外國人ヲ養子又ハ入夫ト爲スニ關スル件……四五四
同上法令ヲ臺灣ニ施行スルノ件……四五四
外國人ヲ養子又ハ入夫ト爲サントシ及歸化ヲ爲シ又ハ國籍ヲ回復セントスル者ノ願出手續ニ關スル件……四五四
明治二十二年外務省令第三號及同二十七年同省令第五號廢止ノ件……四五五

第七編 戸籍

第一章 戸籍

戸籍法……四五五
第一章 戸籍吏及ヒ戸籍役場……四五五
第二章 身分登記簿……四五六
第三章 登記手續……四五八
第四章 身分ニ關スル届出……四六二
第一節 通則……四六二
第二節 出生……四六六
第三節 嫡出子否認……四六九
第四節 私生子認知……四七〇
第五節 養子縁組……四七二
第六節 養子離縁……四七三
第七節 婚姻……四七三
第八節 離婚……四七五
第九節 後見……四七六
第十節 隱居……四七七
第十一節 失踪……四七七
第十二節 死亡……四七七

第十三節 家督相續……四七九
第十四節 推定家督相續人ノ廢除……四八〇
第十五節 家督相續人ノ指定……四八一
第十六節 入籍、離籍及復籍拒絶……四八二
第十七節 廢家及ヒ絶家……四八四
第十八節 分家及ヒ廢家再興……四八四
第十九節 國籍ノ得喪……四八五
第二十節 氏名及ヒ族稱ノ變更……四八七
第二十一節 身分登記ノ變更……四八八
第五章 戸籍簿……四八八
第六章 戸籍ノ記載手續……四八九
第七章 戸籍ニ關スル届出……四九三
第八章 抗告……四九五
第九章 罰則……四九六
附則……四九七
戸籍法取扱手續……四九九
戸籍法第二條ノ規定ニ依リ區長ヲ以テ戸籍吏トナスノ件……五六七
同上……五六七

戸籍法ノ規定ニ依リ納付スル手數料ノ金額ヲ定ムルノ件……五六七
皇族ヨリ臣籍ニ入リタル者及婚嫁ニ因リ臣籍ヨリ出テ皇族ト爲リタル者ノ戸籍ニ關スル件……五六八
外國ニ於テ婚姻ヲ爲ストキノ證明書ニ關スル件……五七〇
身分登記戸籍及寄留ニ關スル書類保存規程……五七〇
處刑ニ因リ族稱ヲ失ヒタル者戸籍吏ニ報告方……五七一ノ二

第二章 族籍

非藏人北面舊官人執次使番仕丁等ヲ廢シ士族「卒」ト改メ宮華族三代相恩ノ家士ヲ士族ニ加フ……五七一ノ三
郷士ヲ以テ士族ニ入籍ス……五七一ノ三
二代以上ノ卒ヲ士族ニ加ヘ一代抱ノ卒ヲ平民ニ復ス……五七一ノ三
僧尼籍編入方……五七二
僧尼定籍ニ付テノ心得方……五七二
僧尼寺院ニ住居ヲ許ス……五七三

第三章 氏名

一人一名タルベキ事……五七三
平民苗字ヲ設クル事……五七四

僧侶苗字ヲ設ク……五七四
御歴代ノ御諱並御名ノ文字ヲ名乘ルコトノ解禁……五七四
苗字名並屋號共改ムルヲ禁ス……五七四

第四章 寄留

寄留ノ届出ニ關スル件……五七五
出生死去出入等届出方及寄留者届出方……五七五
入寄留届書寄留者退去届書及寄留者復歸届書編綴方……五七六
戸籍取扱手續……五七六
寄留届寄留者復歸届取扱方……五七八
華族戸籍ニ關シ宮内省ニ出願方省畧ノ件……五七九
華族戸籍ノ異動ニ關スル件……五七九
臺灣ニ寄留スル内地人ノ寄留及出産死亡等ニ關スル届出方……五七九
寄留者諸願伺届等寄留地ノ管廳ヘ差出方……五八一

第八編 公證人

第一章 通則

公證人法……五八二
第一章 總則……五八二

第二章　任免及所屬……五八三
第三章　職務執行ニ關スル通則……五八四
第四章　證書ノ作成……五八六
第五章　認證……五九四
第六章　代理兼務及受繼……五九五
第七章　監督及懲戒……五九七
附則……五九九
公證人法ヲ樺太ニ施行スルノ件……六〇〇
公證人法施行細則……六〇〇
公證人定員……六〇七
公證人手數料規則……六一三
公證人懲戒委員會規則……六一八
第二章　臺灣ニ於ケル特則
公證規則……六二〇
同　施行細則……六二一
公證費用規則……六二三
公證規則ニ依リ公證官吏ノ職務執行ニ關スル抗告手續……六二五

第一編　民法及民法施行法

民法

（明治二十九年四月法律第八十九號）

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル民法中修正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

民法第一編第二編第三編別冊ノ通定ム

此法律施行ノ期日ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム（明治三十一年六月勅令第百二十三號ヲ以テ同年七月十六日ヨリ施行スル旨ヲ定メタリ）

明治二十三年法律第二十八號民法財産編財産取得編債權擔保編證據編ハ此法律發布ノ日ヨリ廢止ス（明治三十一年六月法律第九號）

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル民法中修正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

民法第四編第五編別冊ノ通之ヲ定ム

此法律施行ノ期日ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム（此期日ハ明治三十一年六月勅令第百二十三號ヲ以テ本法施行ノ期日ヲ同年七月十六日ト定ム）

明治二十三年法律第九十八號民法財産取得編人事編ハ此法律發布ノ日ヨリ之ヲ廢止ス

（別冊）

民法

第一編 總則

第一章 人

第一節 私權ノ享有

第一條 私權ノ享有ハ出生ニ始マル

第二條 外國人ハ法令又ハ條約ニ禁止アル場合ヲ除ク外私權ヲ享有ス

第二節 能力

第三條 滿二十年ヲ以テ成年トス

第四條 未成年者カ法律行爲ヲ爲スニハ其法定代理人ノ同意ヲ得ルコトヲ要ス但單ニ權利ヲ得又ハ義務ヲ免ルヘキ行爲ハ此限ニ在ラス

前項ノ規定ニ反スル行爲ハ之ヲ取消スコトヲ得

第五條 法定代理人カ目的ヲ定メテ處分ヲ許シタル財産ハ其目的ノ範圍內ニ於テ未成年者隨意ニ之ヲ處分スルコトヲ得目的ヲ定メスシテ處分ヲ許シタル財産ヲ處分スル亦同シ

第六條 一種又ハ數種ノ營業ヲ許サレタル未成年者ハ其營業ニ關シテハ成年者ト同一ノ能力ヲ有ス

前項ノ場合ニ於テ未成年者カ未タ其營業ニ堪ヘサル事跡アルトキハ其法定代理人ハ親族編ノ規定ニ從ヒ其許可ヲ取消シ又ハ之ヲ制限スルコトヲ得

第七條 心神喪失ノ常況ニ在ル者ニ付テハ裁判所ハ本人、配偶者、四親等內ノ親族、戶主、後見人、保佐人又ハ檢事ノ請求ニ因リ禁治産ノ宣告ヲ爲スコトヲ得

第八條 禁治産者ハ之ヲ後見ニ付ス

第九條 禁治産者ノ行爲ハ之ヲ取消スコトヲ得

第十條 禁治産ノ原因止ミタルトキハ裁判所ハ第八條ニ掲ケタル者ノ請求ニ因リ其宣告ヲ取消スコトヲ要ス

第十一條 心神耗弱者、聾者、啞者、盲者及ヒ浪費者ハ準禁治産者トシテ之ニ保佐人ヲ附スルコトヲ得

第十二條 準禁治産者カ左ニ掲ケタル行爲ヲ爲スニハ其保佐人ノ同意ヲ得ルコトヲ要ス

一 元本ヲ領收シ又ハ之ヲ利用スルコト

二 借財又ハ保證ヲ爲スコト

三 不動産又ハ重要ナル動産ニ關スル權利ヲ得喪ヲ目的トスル行爲ヲ爲スコト

四 訴訟行爲ヲ爲スコト

五 贈與、和解又ハ仲裁契約ヲ爲スコト

六 相續ヲ承認シ又ハ之ヲ抛棄スルコト

七 贈與若クハ遺贈ヲ拒絕シ又ハ負擔附ノ贈與若クハ遺贈ヲ受諾スルコト

八 新築、改築、增築又ハ大修繕ヲ爲スコト

九 第六百二條ニ定メタル期間ヲ超ユル賃貸借ヲ爲スコト

裁判所ハ場合ニ依リ準禁治産者カ前項ニ掲ケサル行爲ヲ爲スニモ亦其保佐人ノ同意アルコトヲ要スル旨ヲ宣告スルコトヲ得

前三項ノ規定ニ反スル行爲ハ之ヲ取消スコトヲ得

第十三條　第七條及ヒ第十條ノ規定ハ準禁治産ニ之ヲ準用ス

第十四條　妻カ左ニ掲ケタル行爲ヲ爲スニハ夫ノ許可ヲ受クルコトヲ要ス

一　第十二條第一項第一號乃至第六號ニ掲ケタル行爲ヲ爲スコト

二　贈與若クハ遺贈ヲ受諾シ又ハ之ヲ拒絶スルコト

三　身體ニ羈絆ヲ受クヘキ契約ヲ爲スコト

前項ノ規定ニ反スル行爲ハ之ヲ取消スコトヲ得

第十五條　一種又ハ數種ノ營業ヲ許サレタル妻ハ其營業ニ關シテハ獨立人ト同一ノ能力ヲ有ス

第十六條　夫ハ其與ヘタル許可ヲ取消シ又ハ之ヲ制限スルコトヲ得但其取消又ハ制限ハ之ヲ以テ善意ノ第三者ニ對抗スルコトヲ得ス

第十七條　左ノ場合ニ於テハ妻ハ夫ノ許可ヲ受クルコトヲ要セス

一　夫ノ生死分明ナラサルトキ

二　夫カ妻ヲ遺棄シタルトキ

三　夫カ禁治産者又ハ準禁治産者ナルトキ

四　夫カ瘋癲ノ爲メ病院又ハ私宅ニ監置セラルルトキ

五　夫カ禁錮一年以上ノ刑ニ處セラレ其刑ノ執行中ニ在ルトキ

六　夫婦ノ利益相反スルトキ

第十八條　夫カ未成年者ナルトキハ第四條ノ規定ニ依ルニ非サレハ妻ノ行爲ヲ許可スルコトヲ得

第十九條　無能力者ノ相手方ハ其無能力者カ能力者ト爲リタル後之ニ對シテ一ヶ月以上ノ期間内

ニ其取消シ得ヘキ行爲ヲ追認スルヤ否ヤヲ確答スヘキ旨ヲ催告スルコトヲ得若シ無能力者カ其期間内ニ確答ヲ發セサルトキハ其行爲ヲ追認シタルモノト看做ス

無能力者カ未タ能力者トナラサル時ニ於テ夫又ハ法定代理人ニ對シ前項ノ催告ヲ爲スモ其期間内ニ確答ヲ發セサルトキ亦同シ但法定代理人ニ對シテハ其權限内ノ行爲ニ付テノミ此催告ヲ爲スコトヲ得

特別ノ方式ヲ要スル行爲ニ付テハ右ノ期間内ニ其方式ヲ踏ミタル通知ヲ發セサルトキハ之ヲ取消シタルモノト看做ス

準禁治産者及ヒ妻ニ對シテハ第一項ノ期間内ニ保佐人ノ同意又ハ夫ノ許可ヲ得テ其行爲ヲ追認スヘキ旨ヲ催告スルコトヲ得若シ準禁治産者又ハ妻カ其期間内ニ右ノ同意又ハ許可ヲ得タル通知ヲ發セサルトキハ之ヲ取消シタルモノト看做ス

第二十條　無能力者カ能力者タルコトヲ信セシムル爲メ詐術ヲ用ヰタルトキハ其行爲ヲ取消スコトヲ得ス

第三節　住所

第二十一條　各人ノ生活ノ本據ヲ以テ其住所トス

第二十二條　住所ノ知レサル場合ニ於テハ居所ヲ以テ住所ト看做ス

第二十三條　日本ニ住所ヲ有セサル者ハ其日本人タルト外國人タルトヲ問ハス日本ニ於ケル居所ヲ以テ其住所ト看做ス但法例ノ定ムル所ニ從ヒ其住所ノ法律ニ依ルヘキ場合ハ此限ニ在ラス

第二十四條　或行爲ニ付キ假住所ヲ選定シタルトキハ其行爲ニ關シテハ之ヲ住所ト看做ス

第四節　失踪